
幻影

水島佳頼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻影

【Nコード】

N6498B

【作者名】

水島佳頼

【あらすじ】

僕の大切なものを返して。彼を取り戻すためなら、僕は何だってするから。そう、どんな事だって――。劣悪な環境で育ったミネイエンは、何を失って何を得るのだろうか？　これは、どこまでも真っ直ぐに生きている“悪役”の物語。

第一話 明るい焔（前書き）

この物語は『魔幻の鐘』のサイドストーリーです。『魔幻の鐘』を読まれていない方には、ネタバレとなってしまう内容となっております。内容的には魔幻の二章に入る直前までとなっておりますので、裏設定を知りつつ二章を読みたいという方はご覧下さい。

ネタバレは困るという方は、魔幻を読了してからこの小説を読むことをお勧めします。

なお、この話も魔幻同様、いくつかのシーンにグロテスクな描写を含みます。苦手な方はご注意下さい。

第一話 明るい焔

きつと幾ら離れていても、僕らは同じ月を見ているはずだから――
|。

そういった彼のことを、何度でも思い出す。否、最初から忘れてなんていない。

何歳になっても消えない胸の痛み。僕を蝕んでいく、妖魔のような鈍い痛み。この手を血に染めた遠い記憶が、夜毎僕を襲い来る。

床にうつぶせになった彼の腹部から、抑える手を無視して流れ続けていく出血。真っ白な肌に絡みついた鮮血の赤が、酷く毒々しい。彼が虚ろに見開いているのは、濁りかけた漆黒の瞳。僕を安心させようとして、彼は無理に笑っている。そんな彼が、僕の目の前でどんどん冷たくなっていく……。

ここでもいつも、息を荒げてベッドに上半身を起こす。こんな痛いだけの夢を見るのなんて、もう最後にしたい。だって夢の中で彼は、いつも苦しそうに笑ってるんだ。――生きたいよって目をしながら、血の海に沈んでいくんだ。

もう、赦してください。僕を自由にしてください。お願い、僕を逃がして。誰か、この呪縛から僕を救い出して。僕は、彼を救えればそれでいいんだ。だからもう、二度とこんな夢を見せないで。

毎朝、ひどい目覚めだ。

>i7837—128<

皮肉なことだけど、僕は自分の名が大嫌い。だから、呼ばれるたびに嫌悪感が体中を這い回る。それでもこの名は大切な人に好きだと言ってもらえた名だから、捨てるわけにもいかない。

これは、僕がまだ八歳だった時の出来事。八歳の僕は、まだ大切な人を失うことがどういふことなのか、全く解っていなかった。

「明焰、買出し行こう」

明るい声が聞こえてくる。ここはとある海辺の町。僕の生まれ故郷だ。当時の僕は、同年代の子供達と比べると幾分か華奢で小柄な子供だった。

僕を呼んでいる、その人の名前は麗水。^{リシュイ}僕の、一番大事な人。普段はもっぱら略してリイって呼んでることが多いんだけど、本名のリイシュイも綺麗な響きだから好きなんだ。彼は僕の種違いの兄で、当時十五歳だった。

その日、僕はリイと一緒にでかけた。行き先は一軒の酒屋。僕の実の父親は酒乱だった。父親はしょっちゅう僕らを脅して、酒を買いに行くように怒鳴った。だから僕は、その日リイと一緒にいつもどおりに酒屋に行った。

酒屋の店主は良識ある人で、俗に言う虐待を受けていた僕らをいつでも優しく保護してくれた。その日も、店主は僕らの頬や腕に残った切り傷を処置してくれたりした。

もう家に帰らなくてはならない。家に帰れば、父親が酒を飲む。父親は酒を飲むと暴れる。僕らは、父親から暴力を受けることになるのだ。それが嫌で、僕はずっとここにいたかった。

けれど、酒が遅いと父親の暴力も倍になる。それはもっと嫌だから、僕はさよならの代わりに酒屋の店主にお礼を言った。

いつもどおりなら、このまま酒を持って何事も無く帰れるはずだった。だけど、今日に限って平穏は続かなかった。

「父さんのことは嫌いだけど、明焰は僕の大事な弟だよ。だから、そんな悲しそうな顔しないで。父さんがこれから何しても、僕が明焰を守るから」

唐突にそんなことを言われた。知らぬ間に感情が顔や仕草に出るのは僕の嫌な癖で、いつもこうやってリイには心配ばかりかけていた。でも今回は、リイのそんな言葉すらいつもと何かが違うような気がしていた。そう、何となく悪い予感のようなものを感じていたんだ。

「リィ、何かおかしくない？」

「そうでもないよ。早く帰ろう」

リィのぎこちない笑いが気になったけれど、僕は素直にリィの隣に並んだ。酒瓶を入れた袋は重かったけれど、頑張ってこらえた。

酒屋から出ようとしてカウンターに背を向けると、急に酒屋に飛び込んできた男がいた。小柄な中年で、大きな酒瓶を手にも下げている男だ。……認めたくないけれど、僕の父親。

「いつまで待たせるんだ、てめえら？ そんなに死にたいか」

「やめなさい、親父さん。明焰も麗水も傷だらけじゃあないか」

いきなり怒鳴り始めた父親を、店主は宥めてくれようとした。だけれど次の瞬間くぐもったうめき声を上げてカウンターに突っ伏した。何が起こったのか、初めは理解できなかった。だけど僕は、カウンターの上に流れる赤い液体を見て唐突に悟った。

——刺された！

優しかった店主は、僕の父親の手によって殺されたんだ。しばらく店主はもがいていたけれど、やがて動かなくなった。虚ろに見開かれた店主の双眸は、もう何も見ていない。

店主は、胸を刺し貫かれてカウンターの上に事切れたのだった。

「父さん！」

リィの叫び声が聞こえて父親のほうを見れば、彼はアルコール度数の高い清酒を床に撒き散らして狂ったように笑っていた。

そして次の瞬間、僕は見てはいけないものを見た気がした。

火のついたマッチが一本、彼の手によって床に落とされた。とたんに物凄い勢いで炎が燃え広がらだし、酒屋はあっという間に火の海になった。頭の中は真っ白になり、僕は何を考えて良いのかもわからず立ち尽くした。頭の中を占めるのは、恐怖の感情のみ。僕は怖くて、恐ろしくて、壊れそうだった。

リィの次に好きだった酒屋の店主は殺されて、そのなきがらはたった今から僕の前で火に包まれようとしている。そして、酒屋の店主の命を奪った張本人は火の海に周りを囲まれながら平然と酒を飲

んでいた。

人を殺して放火した分際で、良く酒なんて飲んでいられる。自分にもこんな殺人鬼とおなじ血が流れているのかと思うと、ぞっとした。

「明焰、逃げよう！ こっち！」

リイの声が聞こえた。僕は必死で火の中をはいくぐり、リイのもとにたどり着いた。やっとリイの細腕にしがみついた時には、息も荒くなっていたし目の前も涙で霞んでいた。泣きそうになりながら、リイの手を強く握り締める。

「リイ、早く逃げよう、逃げようよ」

「にがさねえよ」

焼かれた木がはじける乾いた音に混じって、父親の声が聞こえた。いつも僕たちを脅す時に出す、冷たい声だ。僕はびくりと身を震わせ、リイにぎゅっと抱きついた。リイはそんな僕の頭を、優しくなでてくれた。

「明焰は、ここから逃げて。言ったでしょ、僕は君を護るから」

リイの落ち着いた声が聞こえる。僕は足がすくんで動けなかった。それでも動こうとしたら、しりもちをついて無様に転んでしまった。幸い僕の背後にまではまだ火が回っていなかったので、僕は焼死しないですんだのだけれど。

逃げなきゃ。そう思うのに、足は弱弱しく床を擦るだけで少しも役に立ってくれない。

リイが僕を見下ろした。そしてにつこりと、儂げな笑みを浮かべた。恐ろしさを感じる。リイがこの手を離れていくことを、はつきりと感じ取った。嫌だ、やめて！ 嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ！

僕には何となく解っていた。これがリイの最期の笑みなんだと。だけど受け入れたくなんてなかった。リイがいなくなったら僕はどう生きれば良いの？

今まで、父親の虐待にだって二人で耐えてきた。学校から帰る時も絶対一緒に下校するようにした。じゃなきゃ、先に帰った片方が

酷い虐待を受けるから。リイは『十五にもなって弟と一緒に帰っている』とか陰口を叩かれていたみたいだけど、いつも何も言わずに笑ってくれていた。

リイの隣だけが、僕の居場所だった。その居場所を奪われてしまったら、僕には生存できる空間がなくなってしまう。

「ねえ、明焰？　きつと、幾ら離れていても僕らは同じ月を見ているはずだから。だから、寂しくなったら月を」

ぐしゃっ。

酷く耳障りな音がして、リイの言葉が途中で途切れた。そしてリイは、僕のすぐ目の前に倒れこんだ。

腹部に開いた傷口を押さえるために添えられたリイの白い手には、幾筋もの真っ赤な血の筋が絡みついている。頭の中が真っ白になった。自分の目の前で何が起きたのか、僕には理解できなかった。

リイは重々しい動作で頭を少しだけ上げた。だんだん虚ろになりかけてきた目を僕に向けて、精一杯笑いながら、それでも死にたくないよって顔して。

——僕は、叫んだ。

叫びながら父親の身体を火の海に突き飛ばして、白髪になりかけた黒髪を鷲掴みにした。そして彼の手から凶器を奪う。

酔いが回ってきたせいか、父親はいとも簡単に八歳児に倒された。酔っ払って動きに切れがなくなってきた父親の喉を、僕は奪った凶器で一突きにする。両手に握った刃物に全体重をかけて、刃を父親の喉に深く食い込ませた。

生温い返り血が顔に飛んできて気持ち悪い。血を浴びるというかと自体が嫌だったし、なおかつこんな下衆野郎^{げす}の血なんて見るのすら嫌だった。きつと刃物を抜いたらもっと血が出てくるだろうから、僕は父親の体を火の中に転がしたまま駆け出した。勿論、凶器も死体の喉に刺したままだ。

ふと思いとどまり、父親の手を軽く凶器に添えさせておく。自殺にみせかけてごまかしてしまえば、罪人としてしょっ引かれずにす

むかもしれないから。

このままこんな所にいたら酒屋が崩れた時に下敷きになってしま
うから、僕はリイの腕を掴んで、半ば引きずるようにして逃げ出し
た。

窓を叩き割って、リイの身体をそっと放り出す。そして、僕もす
ぐに窓を乗り越えてリイを背負うようにして逃げる。

どうしようもなく怖かった。怖くて、怖くて、もう壊れてしまい
そうだった。リイの身体の冷たさが怖い。自分が犯してしまった殺
人がばれるのが怖い。そして何より、人を殺してしまった自分自身
が怖い。いつ、誰を殺すか解らない。もう、僕は普通の人間じゃな
いんだ。

気を抜けば誰かが追いかけてきそうで、僕は死に物狂いで逃げた。
なきながら、どこまでも走り続けた。よく気を払えば自分の体が傷
だらけでなおかつ火傷だらけなのにも気づいただろうけど、僕はも
う自分になんて気を留めていられなかった。リイをどうしよう？
病院は何処？

リイが十五歳にしては小柄で軽かったのが幸いして、僕はリイを
運んでこれた。緊急事態だったから、『火事場の馬鹿力』とかいう
ものを発揮できたのかもしれない。

しばらく走った僕は、川原で立ち止まった。随分と逃げて来るこ
とができたようで、町の光や火事があった酒場が遥か遠くに見えた。
リイは息をしていない。嘘みたいに冷たくなって、見るからに血
の気の失せた顔をしてる。実際にリイの出血は物凄かったし、長距
離を背負ったり引きずるようにしたりして運んできていたから血の
気が失せるのも当然だと思う。

早く医者に見せなきゃ、リイが死んじゃう。リイにもう二度と話
しかけてもらえなくなっちゃう。

「リイ、起きてよ」

声をかけても返事はない。最後になんて言いかけたか、それだけ
でも構わないからもう一度僕の目を見て話して欲しい。そして、も

う一度明るい声で名前を呼んで欲しい。リイがそのまま息絶えてしまうなんて、絶対嫌だ。

「おい、坊主」

いきなり声をかけられて振り返ると、白衣を着たおじさんが僕を見下ろしていた。白衣だけど、ひ弱なインテリって感じの人じゃない。全然知的そうに見えないし、白衣なんか全然似合っていない人だった。その風体は、研究員や医者みたいな知力はないのに、体力勝負のプロレスラーが格好だけ医者を真似てみた感じに似ている。

僕はリイの腕を自分の肩に回して、リイの身体を一生懸命支えながら逃げた。ああいう男には、何をされるかわかったものじゃない。今の僕には、リイと僕しか信じられる人がいないから。

「リイ、リイ。リイ、起きてってば」

走りながら声をかける。涙で前がぼやけた。そして、ぼやけた視界のせいで足元がよく見えなくて、何かに躓^{つまず}いて足元が泳ぐ。

「おい！ 大丈夫か」

後ろであの男の声が聞こえる。僕はまた立ち上がって逃げようとした。足元がふらついた。それでも、歩みを止めるわけにはいかなかった。

捕まったら大変なことになる。僕がリイを殺したと思われるかもしれない。警察が僕を取り囲んで、いつせいに捕まえようとするんだ。そして僕は、頑丈な手錠で拘束されて牢屋に入れられる。警察が僕を捕らえようと躍起になっていたせいで、リイは怪我の治療が遅れて死んでしまう……

「ああっ」

背中が軽くなった。リイを取られたんだ。

「リイ！」

さっと振り返ってリイを取り返そうとしたけれど、鳩尾に重たい一撃を食らって意識が暗転した。意識が落ちる寸前に、おじさんが何か言った気がしたけどそんなことはどうでもよかった。

——ねえ麗水？ 僕らはどんなに離れていても同じ月を見てるっ

て言ったのは麗水だよね？　嘘言わないで。そんなこと言い置いて、
離れていかないで。

もう僕を、置いていかないで……

第二話 孤独

目が覚めると、真っ白な部屋にいた。慌てて飛び起きる。けれど、リイは愚かあのおじさんすら見当たらない。

怖いくらいの清潔感と、消毒用のエタノールの匂いに満たされた白だけの空間。こんな中で、僕は独りだった。誰の声もしないし、音なんて自分の鼓動しか聞こえない。リイは何処だろう。

ベッドの白いシーツは僕が動いたら動いただけ皺になるから、今のところそのシーツだけがやけに現実味を持って僕にこの現世の存在を知らしめてくれている。僕とこの世をつなぎとめているのは、今のところそのシーツだけのような気がした。

真っ白な壁、真っ白な床、真っ白な天井、窓もドアも無い、完全に閉鎖された部屋。この部屋は本当に何から何までうんざりするほど清潔で、僕は自分自身をまるで汚れ物か何かのように思ってしまう。

真っ白なベッドに置かれた枕にぼたりと零れた雫を見て、僕は今更だけど自分が泣いていることに気づいた。もうどうしようもないんだ。リイは奪われ、僕は一人きりで真っ白な部屋に閉じ込められている。

リイを返して。ねえ、お願い。リイがいないと僕、狂ってしまいそうなんだ。お願いだからリイを返して。

僕はひたすらわめいた。壁を蹴りつけ、殴りつけてわめいた。僕はドアのないこの部屋から、壁をぶち壊してでもいいから出ようともがいていた。

何度も硬い壁を殴り続けたせいで、両手の拳には血が滲^{にじ}んだ。血が滲んだ両の拳はじんじんと鈍く痛み、赤く腫れあがる。それでも僕は殴るのをやめようとしなかった。こうでもして自分に痛みを与えていなければ、いつか僕もこの部屋と真っ白な空間に同化してしまいそうな気がして怖かった。

何度壁を叩いても何度痛みを感じても、やっぱりどうしようもなく怖くて、狂いそうだった。……うん、僕はもう狂っていたと思う。既にこの白い閉鎖空間に、心身を食われかけていたんだ。

もう出られないのかもしれないという恐怖に押しつぶされそうになっていると、白い部屋の外で音がした。

よかった。この部屋の外にも、ちゃんと世界があるんだ。そう思っ
て、ほんの少しの物音に物凄く安堵した。だけど、その物音を立て
ているものの正体は何なのかわからないからまた不安になる。

張り詰めていた静寂は引き裂かれて、ぼそぼそと低い声が聞こえる。そして。

「明焰、ここ？」

「リィ！」

なんと、壁の向こうからリィの声が聞こえた。僕は必死に壁に張り付き、少しでもリィに近くなれるように頑張った。だけど所詮それは無駄な抵抗で、扉越しにリィの体温に触れるなんてことはあり得なかった。

「しっ、静かにして。よくきいて、明焰。残念だけど、僕はもう死んだ。だから、ここからでたらすぐに第二研究室に向かってほしい」
リィの声はそう告げただけで、壁をぶち破ってこっちに来てくれるなんて気配は微塵も無い。別にそんなこと、はなから期待してないつもりだった。けれど、リィなら僕を助けてくれるって淡い期待が確かに胸の中にあった。それが、無残にも打ち砕かれたように感じる。

そして極めつけは、リィの『死んだ』という言葉。間違っても、今だけは聞きたくない言葉だった。

「何言ってるの、リィ？ 死んだ？ 嘘言わないでよ」

「ごめ、明焰、もう時間ないから行かなきゃ。ありがと、ここまで連れてきてくれて。明焰の兄貴でよかった」
ミンイチン

それきり、リィの声は途絶えた。白い部屋には、怖いくらいの静寂が戻ってきた。僕は壁の前に座り込み、壁に耳を当ててじっと息

を殺した。そうすれば、小さな声でリイが何か言ってるのを聞き取れるかもしれないって思ったから。でも、声が聞こえない。リイの声は聞こえない。僕がどれだけの間気を失っていたのか、どれだけの間この白い牢獄に囚われていたのかリイに教えてもらうことすらできなかった。

僕はその場で膝を抱え、すすり泣いた。これで本当に、僕は独りになった。リイがいない。僕の一番の理解者で、僕を何より大切に思ってくれたただ一人の兄がいなくなった。涙が止まらなかった。これからどう生きていけば良いのか、僕にはわからなかった。

やがて僕は泣きつかれて、壁の前で蹲^{うずくま}って寝入っていた。目が覚めた時、僕は再びベッドに戻されていた。誰かが僕の部屋に入ってきたんだ。起き上がると、自分の両手に包帯が幾重^{いくえ}にも巻かれていることに気づいた。包帯はかなり分厚く巻かれていたから、僕は両手を握ったり開いたりすることすらできなかった。

ベッドの周りを見渡してみると、枕元にあった小さな台の上に一輪の花が飾ってあるのに気づいた。この部屋の統一感に合うような白い花瓶じゃなくて、透明な硝子の花瓶に飾られた青くて綺麗な花。僕がそれに触れようと手を伸ばしてみると、

「目が覚めたね」

静かな声だった。思わず手を引っ込めて反射的に声のしたほうを振り返る。

視線の先にいたのは一人の青年だった。僕の観点からすると、外国人。けれどここは母国じゃないような気がするから、外国人って言う言い方はおかしいかもしれない。

この青年は薄茶色の蜂蜜みたいな色をした髪をしていて、前髪に分け目がない。瞳は透明感のある茶色で、琥珀か蜂蜜みたいにみえた。彼は全体的に白い感じがする青年だ。青年は、それでなくても白いイメージなのに、ぴんと糊のきいた白衣を着ていた。白衣の襟元には、小さな金色のピンバッジがつけられている。

彼は部屋にもとから置いてあった白いソファに腰掛けて、長い足

を優雅に組んでいた。さらに、その膝の上に組んだ両手を乗せている。僕は驚きで声も出せなかった。誰、この人。何のためにここに
いるの？

「君と一緒にここに来たのは、お兄さんかな？」

その声で、リイの身を案じる心がまた強くなった。この人に何かされたかもしれない。この人の仲間に何かされたかもしれない。僕の鳩尾を殴ったあのおじさんはリイを攫^{さら}ったんだ。だから、あの人が何かしたのかもしれない。この人も多分、あのおじさんの仲間だろう。

警戒しつつ、僕は青年をにらみつけた。青年は優しく微笑しつつ、僕をじっと見つめていた。

「僕はレジュステラフィルミナディオンスーダ。女みたいな名前だけど、男だよ」

今の、名前？ 唐突にそんな長い名前を告げられても、僕には理解できなかった。大体、男みたいとか女みたいとか言う前に彼以外にこんな名前を持つてる人なんていないと思う。

名前なんて覚える気はなかった。とにかく僕は、このレジュステラなんとかって男なんかよりもリイの方が気になった。

「よろしくね、君は」

にっこりと、ただ笑顔でそういう彼。僕は名前なんて教えたくないかった。だって、この人はもしかしたらリイを監禁していたりするのかもしれないから。僕と同じように、リイは彼らの手によって白い部屋に閉じ込められているのかもしれない。

だけど、あまりにも邪気の無い笑顔で彼がこっちを見てるから。無視し続けたら可哀想な気がして、僕は名前を告げていた。

大好きなリイから、好きだって言って貰えた名前。だけど、この名と同じ明るい焰によって僕らは平穏を奪われた。大好きだけど、大嫌いな自分の名。

「よろしくね、ミンイェン」

青年はにっこりと笑ってそういった。そして、僕の傍に歩み寄っ

てくる。何をされるのかと身構えると、青年は肩をすくめて僕の枕元に手を伸ばした。あの青い花が入った花瓶をとったんだ。

花瓶を持った青年を目で追うと、彼は部屋の隅に据え付けてあった洗面台で花の水替えをした。僕がここに来てから、どれほどの時間がたったのだろうか？ 花の水替えをしなければならぬほどの時間がたったとは到底思えない。

水替えのために立ち上がった彼は、優雅な身なりの割りに意外と長身だった。推定だけど、二メートルくらいある。僕と身長差は何十センチあるんだろう？ 彼は顔立ちや髪の色からして異邦人だし、この格好で町を歩いたらきっと目立つと思う。

「僕の息子も君と同じ年くらいなんだ」

水替えの終わった花を元通り枕元に飾りながら、青年は言った。僕は彼が嘘を言っているんだと思った。だって、結婚していいのは十八歳から上の人だけだから。

彼の住んでいる国では、十歳から結婚して良いって言うならまだ解る。だけど、そんな国あるわけないよ。

だとしたら、彼の息子さんは奥さんの連れ子なんだろうか。そうになると、彼の奥さんは三十過ぎ位の女性ってことになるね。ちょっと年上すぎると思う。まあ、文句は言わないけど。

「いくつ？」

自然に質問が声に出てきていた。こんな人と会話なんてしたくないって思ってたのに、何だか今はそれほど彼のことを悪いと思えなくなってる。同い年の息子さんがいるとか、よろしくって声とか、どこまでも優しい笑顔とか。そういうものが、僕の中に根付いた彼の危険度をどんどん下げていく。

この問いを聞いて、彼は笑顔で僕のほうを向いて答えてくれた。「僕は三十二歳だよ。息子は今年で十歳になる。僕、童顔ってよく言われるんだ」

……これって、もう既に童顔で済まされる領域を越えていると思う。だってどう頑張っても二十歳そこらにしか見えない彼が、三十

歳過ぎのおじさんだなんて考えられない。一体、どうやって若作りしてるのだろう。

悶々と悩み始めた僕を見て肩をすくめて、彼はそっと僕の身体にかかっていた布団を剥いだ。

「お兄さんに会わせてあげよう。ついておいで、ミンイエン」

僕は唐突にさっきのリイとの会話を思い出した。死んだとか言っていた、あのリイの声。あれは多分、幻聴だったんだ。僕はベッドから降りて、レジステラ何とかって男のあとについて壁の前に立った。ベッドの足元の延長線上にある壁だ。

彼は慣れた手つきで白衣のポケットに手をつ突っ込むと、そこから真っ白いカードを取り出した。よく見れば、その表面には小さく銀色の矢印が書いてある。彼はそのカードを、壁の溝に滑らせた。こんなところに溝なんてあったんだ。よく見なければ、見落としてしまふほど解りにくい溝だった。

「昨日君が暴れまくったせいで、一時はこのフロアの全部の部屋のカードリーダーがいかれちゃったんだよ。確かに僕も、ここに連れてこられて初めて目を覚ました時はとても怖かった。だけど、君ほど暴れたりしなかった」

男は肩をすくめ、苦笑する。この言葉で、僕が暴れ疲れて寝たあとに日付が変わったことが解った。そして僕は彼の言葉に、やっと彼と僕との共通点を見出すことが出来た。

「あなたですか」

貴方もここに連れ込まれた犠牲者なんですか。僕はそういった意図を含めて彼にそう言ってみた。

尤も、彼は自分自身のことを犠牲者だなんて思っていないって一目見て解ったけど。

「ミン、でいいよ」

僕の問いに肯定の笑みを返しながら、彼は言った。確かに、あんな長い名前で呼べって言われたらちよつと無理があると思う。でも「それじゃ僕と同じになるよ。僕もリイに、ミンって呼ばれること

あつたし」

「あはは、そうかあ。でも僕も、仲間からミンって呼ばれてるんだ」
不満げに言ってみた言葉は飄々とした笑いでかわされ、僕らはそれきり呼び名に関する話をしなくなった。僕と呼び方がかぶっても、彼はミンだ。だって、そう呼んでって言われたから。

暫くするとカードを認証したのか、どこかで空気入れを上下させるような変な音が聞こえた。同時に、どっとなだれ込んでくる清潔感溢れる空気。どこかの入り口がaitaようだけど、僕の前には依然として白い壁が聳えたままだ。

僕が思うに、多分通常はこんなに認証に時間がかからないと思う。それでも会話している余裕があったということは、やっぱり昨日僕が暴れたせいでカードリーダーが壊れたままなのかもしれない。あとで弁償させられたらどうしよう。

もしそんなことになったら、修理代を請求をされた母さんは僕を見捨てるかもしれない。安否のわからないリイを除けば、この世で唯一僕のことを好きだって言ってくれた人なのに。

早くリイの安否を確認しなきゃ。このままじゃ、僕はこの世でひとりになってしまうから。

「ミン」

恐る恐る、口を開く。今からたずねようとしていることは、答えによっては僕を絶望のどん底に陥れるだろう。そしてまた、答えによつては僕に何にも代えがたい安心感をくれると思う。

「リイは、生きてる？」

一瞬、沈黙が流れた。ミンは驚いたように僕を見て、それから少し笑った。そして、足を止めた僕を振り返って微笑む。

「来ないの？ 見れば解るよ」

ミンは相変わらず穏やかに笑いながら、前方の白い壁に手を伸ばした。すると、なんと音も無くミンの腕が壁に飲み込まれた。

僕は啞然として、声も出せないぐらいに驚く。もしかして、もしかしてミンって幽霊？ というか僕、幽霊とか神とかそういうモノ

は絶対に信じていないんだけど。

「僕も最初は慣れなかった」

にこりと笑い、ミンは壁の中に消えていく。彼の長い白衣の裾が、真っ白な壁と同化する。彼がいなくなり、僕は再びこの白い部屋の囚人しゅうじんになった。

意を決し、僕は包帯の巻かれた手をそっと前方にやった。壁にふれようとする、触れようとした指先は何の抵抗も無く壁に飲まれる。驚いて手を引っ込めてしまった。

壁はない。ないんだ。だって、触れた感覚がまったく無かったから。

「あとで僕の息子に会わせてあげるよ。きっと気が合うと思う」

声の様子からすると、この奇妙な壁の向こうでミンは笑っていると思う。そんなことを考えていたら、急に壁の向こう側から手が伸びてきた。

ミンの手だってわかってるけど、驚いて叫びそうになった。だって今、ホラー映画とかでありがちなシチュエーションでしょ？

ミンの手は何かを探るように数回何も無いところを掴んだけれど、やがて僕の服を探り当てる。僕が恐る恐るミンの手をとると、そのまま僕はミンに腕を引っ張られて奇妙な壁を抜けることができた。

この壁、一体どういう仕組みになってるんだろう？ 呆ける僕を尻目に、ミンは白いカードを丁度あの部屋のカードリーダーの裏側に位置する場所にすべらせた。また怪しげな空気の音がして、それきり何の音もなくなる。

ミンはただにこやかに笑いながら、そっと歩き出す。窓の無い真っ白な廊下に、汚れなんて一点も見当たらない白衣をひらめかせながら僕をちらりと振り返るミン。

「特殊な素材だね。薄くて軽いのにかなりの衝撃に耐えるんだよ、このドア。ドアが開いてるのに白い壁が見えるのは、幻覚作用があるからなんだ」

ミンは歩きながらそういって、僕に優しい目を向ける。い、今何

ていった？ 幻覚だなんて、そんな。ついに僕も精神に異常をきたすようになったの？

固まった僕を見て、ミンは悪戯っぽく笑う。そして、僕の頭にぽんと手を置いた。重たい手。すごく華奢で青年みtainなミンだけど、やっぱり本当は三十路を越した男なんだって再認識する。

「ははは、ごめん。今のは嘘だよ。本当は特殊なライトで光を屈折させて云々…… いろいろ凝ってるんだよ」

……。

僕は、この三十過ぎの男にちよつと遊ばれてるのかもしれない。幻覚と特殊ライトだったら、幻覚の方がまだ信憑性しんぴやうが高いように思うのは僕だけじゃないはずだから。

第三話 麗しい水

僕は自分なりに、今自分が置かれている状況を分析してみることにした。状況を把握して、それを元に行動するのが一番失敗しなくて良い方法なんだ。リイが言ってた。

まず、ここは研究所のようなところ。勿論有人なのに、人の気配が無い。僕は窓の無い真っ白な廊下を、ひたすら歩き続けている。隣を歩く変てこな名前の研究員に連れられて、ひたすら真っ直ぐに変てこな名前の研究員の愛称はミンといい、ミンは身長が百三十センチ弱の僕を余裕で頭三つ分以上抜いた長身で、外見は青年なのに中身はおじさんという変わった人間だ。彼が着ている白衣の襟元には、小さなピンバッヂがつけられている。僕はさしずめ、この白い研究棟に囚^{とら}われた被験体^{とく}ってところかな。

状況は把握し切れてないけれど、僕はミンを見上げて言った。

「ねえミン、第二研究室に連れてって」

ちよつと硬い声で言う僕に向かって、ミンは不思議そうに首をかしげた。

「どうして知ってるの？ 今からそこに向かうんだよ」

……そして今、僕はリイに会いに行こうとしているところだ。

大体、自分の周りのデータは集まった。だけど、ここがどこなのかは全く解らない。リイの安否も謎のまま。早く第二研究室に着きたい、その気持ちだけが僕を追い越して、空回りしていく。

僕はミンの隣で、無言で歩き続けていた。ミンは最初は何度か話しかけてきたけれど、僕の反応が薄いせいかやがて無言になった。

しばらく歩いていると、白衣を着た人に出会った。彼は年齢がよく解らない顔つきをした人で、おそらく十代後半くらいの人なんじゃないかと思う。多分、エナークとかに住んでる人だ。

彼はミンを凌ぐほどの長身だった。何か、この研究所って背が高い人ばかりなんだけど。

「……この子が例の？」

「そうだよ。レンティーノは？」

「中庭だよ。いつもどおり、紅茶飲みながら本読んでる」

にこり。その人は、レンティーノとか言う人物のことを言いながら僕に微笑みかけた。

そして彼は去っていつてしまった。伏し目がちで黒髪の、穏やかだけど何処か翳^{かげ}のある笑顔が印象的な人だった。

「今のが僕の息子」

去っていく黒髪の彼を目で追いながら、ミンはそういった。僕がぎよつとしてミンを見ると、彼は本当に無邪気に笑ってこう続けた。
「の、友人だよ。彼はあんな格好だけど、研究者じゃないんだ」

……また遊ばれた。軽く腹が立った。けどあまりにも無邪気な顔でミンが笑うから、僕はもう遊ばれても良いかもしれないと思い始めてしまう。悪気なんて全然なさそうで、楽しそうな顔。彼のそんな顔を見つつ、僕はため息をついた。

ミンの話によれば、あの少年はカフェで働いている父の生活を助けるためにここでバイトをしているらしい。ここって会社だったんだろうか。

「ここは研究所なんだけど、あの子は特別なんだ。ほら、研究者のお手伝いのバイトをしてるから。あの子は凄く働き者で、本当に助かるんだ。彼のお父さんが昔ここで研究者として一緒に働いてたけど、彼もまた働き者で」

本当に楽しそうにミンがそう言うから、僕はつい警戒心をゆるめて笑ってしまった。あんまり気を抜いたらすぐ何かの実験台にされてしまいそうだから、終始硬い表情でいようと思ってたのに。無邪気なミンの隣にいと、そんなことなんてすぐ忘れてしまう。

「やっとなめてくれた」

ほら、そんな風にミンが笑うから。だからまた、僕は警戒することを忘れてしまう。ミンって悪い人じゃなさそうだし、お兄さんって感じだし。

「ついたよ、ミンイエン。ここが第二研究室」

余所見をしていた僕は、ミンの声で前を向いた。僕らの前には、大きな白い壁が前に立ちはだかっている。この先に、リイがいるんだ。

「連れてきましたよ」

「ああ、入って」

ミンが中の人と会話して、それから壁の中に入る。僕もあとを追って、奇妙な壁を抜けて部屋の中に入った。

とたんに目に飛び込んできたのは、円筒形の怪しげな水槽のようなもの。いくつもいくつも、天井に届きそうなほど大きなものから僕の背丈と同じくらいのもので様々な水槽があった。中には水と一緒に、様々な標本のようなものが入っている。

これと同じものを何処かで見た覚えがある。何処だったかな、そう、学校の理科室だ。この水槽は、大きさこそ違うけど根本的に理科室のホルマリン漬けに似ていた。

と、その中に。

「リイ!？」

なんて、なんてことだろう。リイも円筒形の大きな水槽に入って、水の中に浸されていた。

僕は水槽に駆け寄って、べったりと水槽に手をついた。中の水の冷たさが伝わってくるけど、リイは目を開けない。肌に血の気がなくて、色んなところに擦り傷や火傷の跡があったことをのぞけば、リイは生前とあまり変わらない姿をしていた。父親に刺されたお腹の傷も、ちゃんと縫合されている。

だけど、リイは目を開けなかった。何度呼びかけても、何度水槽の表面を叩いても、結果は同じだった。

「リイ……」

絶望で目の前が滲む。リイを助けられなかった。リイは死んでしまった。リイはもう、二度と僕のことを呼んではくれないし、二度と笑ってくれない。僕は、完全にこの世から孤立してしまった。

「死体そのままにしといたら、生き返らすことが出来なくなるからねえ」

後ろから聞こえた声に反射的に振り返ると、白衣を着た小柄な男がにっこり微笑みながら僕を見下ろしていた。顔立ちは僕やリイと同じ東洋系で、彼は長い黒髪を一つに括って白衣の背中に流していた。

僕は男の言葉をよく思い出した。……いまこの人、確かに生き返らすって言った。

リイを、リイをもう一度この世に？

「生き返らせる？」

自分でも驚くくらいかすれた声が出た。僕は縋るように男を見上げた。すると男は、にやりと笑みを浮かべた。そこから無邪気さは感じられないけれど、それは楽しげな笑いだった、

「ああ、勿論だとも」

僕はリイの方に手を伸ばし、男のほうを見たまま水槽の冷たさを感じる。男は白衣を翻しながらつかつかと近寄ってきて、至近距離まできたところでしゃがみ込んで僕と視線の高さを同じにした。

「生き返らせてあげよう、お兄さんを。君はもう一度お兄さんと一緒に生きたいだろう？」

僕は、力強く頷いた。罨かもしれない。だけど僕は、リイが生き返るって言うならどんなものにも縋ろうと本気で思っていた。

かくして僕は、ここでリイ蘇生の手伝いをする事となった。この男は素性を明らかにしないけれど、これから知っていけば良いことだ。

綺麗な水の中で、リイは目を閉じたまま。そのまま水と同化してしまいそうな、青白いその横顔。

——リイ、待っててね。

第三話 麗しい水（後書き）

第二話と第三話、本当は同じ枠に入れるつもりでした。けれど、二話が長すぎたので泣く泣く切りました。

幻影は一話一話の長さがばらばらになりますが、何卒ご了承ください。

第四話 孤独の反対側

母さんが病院に搬入されて意識不明になっていると、僕はこの研究所でリィ蘇生を手伝うことになってから二日目に聞いた。原因は働きすぎによるもので、母さんは運が悪ければ一生目を覚まさないらしい。

母さんは父さんの酒代を稼ぐために頑張りすぎてたんだ。でもあの男にそんなに尽くす価値があるなんて、僕には思えない。僕は母さんとあまり話さなかったら、母さんが父さんを本当に好きだったかなんてよく解らないけど。だって母さんはいつも僕が眠ってから帰って来たし、起きた直後かさもなくて起きる前に仕事に行っちゃっていたから。

一瞬だけ、父親を殺してよかったって思ってしまった。思っただけ、その恐ろしい思考を一生懸命振り払う。

だんだん自分が壊れていくのを感じる。僕をこの世に辛うじてつなぎとめているのは、強く手の甲を引っかけて無理に出した血の赤い色と、その温もりだけだった。傷の痛みは、異常になりつつある僕の思考を正そうとしてくれる。

流れる血と鈍い痛みだけが前の僕と変わらずにある部分で、この血の色が赤であるかぎり僕は僕なんだって無理な理論をたてて、僕は白い部屋から一步も出ようとしなかった。

蘇生の手伝いだって、具体的に指示されたわけじゃなかったし。僕は誰かに会うのが嫌だった。

「ミンイェン、また血い出したの？」

この傷がミンに見つかり、決まって彼は僕を気遣うように手を消毒してくれる。何の文句も言わずに、呆れもせずに。まるで自分と血のつながりのある息子に接するように、ミンは僕に接してくれた。こんな手、要らないのに。鋭利な刃物を手渡されたら、すぐにも斬り落とすのに。

こんな僕に生きている資格なんて無い。十年も生きたんだからもういいよ、もう。僕がいなくなっても、研究員たちがリィを蘇生させてくれるだろうし。

どうして皆優しいんだろう。この研究所にいる人は、ミンだけじゃなくて皆が僕に優しく接してくれる。まるで家族みたいに、僕のことを優しく気遣ってくれる。だから僕は、誰かに会うのが嫌なんだ。

僕は殺人者だ。リィを救うことすらできなかった、愚かで無能な殺人者だ。みんなの優しさが、僕にとっては痛かった。

「……こんにちは」

ミンが帰った後思考に沈んでいると、ふいに声をかけられた。僕はベッドの上で上体を捻り、入り口のほうを見る。

「だ、誰？」

そこにいたのは、蜂蜜色の髪をした肌の白い……

「ミン？」

だと思う。でも、それにしても小さいし、肩幅も狭いし、丸い眼鏡なんてかけてるし、髪が長い。それに、輪郭が丸っこい。

極めつけは、彼のその外見の年齢。彼は、僕と同じくらいの少年だった。

「違います、僕はレジュストウルフルナディアンティーノ」

「……へ？」

「レンティーノって呼んでください、長いので」

にこり。ふんわりと笑みを浮かべる彼の姿は、やっぱりミンにそっくりだった。多分、彼はミンの息子なんだ。

僕は暫く無言でいたけれど、ふいに名乗っていないことを思い出した。少し考えてから、適当に名前だけ呟いておく。

「ミンイエン
「明焰」

「宜しく願います。ミンイエ、で良いですか？」
こくりと頷いておく。

何だか気まずい。この研究所にいる人は殆どが外国人みたいだし、

僕はまだ部屋の外なんて出ていないからここが何処なのか未だに解ってない。それに僕は、こういう礼儀正しい人との接し方なんか知らない。

「手…… 傷だらけですね。誰かにやられたのですか？」

突然、レンティーノが話しかけてきた。僕は驚いたけど、何だか無性に苛ついてぶっきらぼうに答えた。

「いや、自分でやった」

「勿体無い、こんなに綺麗な手なのに。もっと自分を大切にして下さい」

「君に言われる筋合いなんて無い！」

レンティーノの穏やかな言葉に、僕は激昂した。どうして何も知らないくせにそんな善人面ができるのだろう。

僕は兄を奪われた。家族とも離別した。酒屋の店主も失った。自分の家に帰ることも許されず、故郷での居場所もない。ただ真っ白な空間に閉じ込められ、外部との接触はゼロに等しい。

そんな状態の中で、一体どうやって自分を大切にしろというのだろうか？

「ありますよ。僕はあなたを知っている。だから、それだけのことです」

「良く知りもしないくせに！」

……僕は、完璧にレンティーノに当り散らしていた。何もできない自分のもどかしさを、全てレンティーノにぶつけていた。レンティーノは文句も言わずに、僕の怒りを笑顔で受け止めた。彼は、そういうところまでミンにそっくりだ。

「知ってますよ、ミンイェン。貴方はここから遠く離れた東の大陸で生まれ育ち、酒場で暴れたお父さんを刺して逃げてきたのですよね。貴方がお父さんの手を刃物に添えたことも幸いして、貴方のお父さんは店主を殺して自殺したと思われています。貴方は罪に問われませんよ。そして、貴方のお兄さんは防腐剤につけられて研究材料にされているのですよね」

ミンにそっくりなレンティーノは、僕よりも僕のことを良く知っていた。それはもう、怖いくらいに。レンティーノは笑顔のまま、淡々と僕のことを語った。それが余計、怖かった。

「研究材料」

レンティーノの言ったことを繰り返して、僕は呟いた。リーの蘇生は確かに実験的だけど、絶対成功させてくれるってあの偉い人は言った。

無論、僕はそれを信じ続けている。だけど、材料って響きが嫌だ。「新しい人体蘇生実験の対象なんですって。上手くいけば生き返りますよ、リィシユイさん」

僕よりも僕のことを知っているレンティーノだから、麗水の名を知っていても別に驚かなかった。そこは別に気にするところじゃないね。

だけど、レンティーノは今「上手くいけば」って言った。問題はこの発言だよ。それって、もしかすると上手くいかない可能性もあるってこと……？

「失敗したら？」

「大丈夫ですよ、遺体が残っている限り何度でも可能らしいですから」

レンティーノはそういうながら、深い眼差しで僕を見る。

「何で詳しいの？」

問えば、レンティーノはにっこりと笑った。それから僕の枕元にある花瓶を手にして、洗面台に持っていく。

どうしてこんな細かいどうでもいいような仕草でさえ、ミンに似ているんだろう。親子ってこんなに似るもの？　だとしたら僕は、あの酒びたりのどうしようもない男と似ていなきゃならない。そんなの、嫌だ。

「僕の父も蘇生した人間なんですよ。ただ、蘇生した時に不具合が少し生じるようで、それを改善するために貴方のお兄さんで新しい蘇生方法を実験するのだそうです。現時点で一番大きな不具合は、

歳をとることができないことです」

レンティーノは花瓶の水を洗面台に捨てながら、そう言った。白い指先、綺麗な手の甲。きっと大事にされて育ってきたんだろう。レンティーノには傷なんて全くなかった。少なくとも、今僕から見えている範囲内ではゼロだ。

「僕は、蘇生した人間の生殖能力についての実験で生まれたただの道具なのですよ。僕の成長は常に監視されていて、常に記録されているのです」

自嘲気味に笑いながら、花瓶に水を入れるレンティーノ。蛇口をしめる時にキュツと小さな音がしたけれど、それきりこの部屋から音は消えた。

生まれた時から実験台で観察の対象だったレンティーノは、今までどういう気持ちで生きてきたんだろう。僕みたいに普通の家で生まれて、ちよつと家庭環境に問題はあったけれど普通に暮らして、全く普通の幸せを感じている人たちのことをどう思っていたんだろう。

笑っているのにどこか陰鬱そうなレンティーノは、身体に傷こそないけれど心にはたくさんの傷を持っているに違いない。

なのに僕は、知らずにレンティーノを傷つけた。身勝手に怒って、不躰に質問して。レンティーノの心に刻まれた傷の上を、もう一度なぞるような真似をした。

「ごめん、僕、酷いことを」

「気にしなくて良いのですよ、ミンイェン。中庭にでも行きませんか？」

レンティーノの誘いに頷いて、僕はカードを使って部屋から出た。そして、真っ白な廊下をふたりで歩く。

たどり着いた中庭は本当に綺麗なところで、色とりどりの花が咲き誇る花壇やミンの背丈ほども高さがある薔薇のアーチなどで周りを囲まれていた。

もちろん研究所の白い壁が四方にあるんだけど、上を見れば嘘の

ように澄んだ青空が四角く切り取られたように広がっている。

見たこともない鳥が、四角い空に浮かぶ白い雲に向かって飛んでいるのを見た。リイも連れてきたかったな、と心の隅で思う。彼が蘇生したら、ここに一緒にこよう。そして、色々な話をするんだ。

「素敵なところでしょ？ 僕のお気に入り場所です。僕は最近、ここで本を読むのが日課になっているのですよ。もし僕が部屋にいないようでしたら、ここにいらして下さい」

レンティーノはにっこりと微笑んで、中庭の真ん中に置かれた小さなテーブルと椅子のところへ寄っていく。そのテーブルと椅子は組にして使うものらしくて、両方につる草のようなデザインを施されていた。この模様、レンティーノに良く似合う。

椅子は向かい合えるように二つあった。僕はレンティーノが座っていない方の椅子に腰掛ける。するとレンティーノは席を立て、壁際に歩いていった。そして彼は、傍にあった薔薇のアーチから一本、真紅の薔薇を摘んで持ってくる。

「どうぞ」

そういつて、薔薇の花を差し出すレンティーノ。

「あ、ありがとう」

おずおずと受け取る僕。

正直、僕には薔薇なんて似合わないと思うけど。同じ赤なら、僕には薔薇よりも血の方が似合っているかもしれないけど。でも、レンティーノが笑顔で僕を見てるから。友情の印かな、なんて思っ受けて取ることにした。

受け取ると同時に、指先にチクリと棘がささった。

「痛っ」

「ああっ、大丈夫ですか！」

レンティーノは慌ててスーツのようにぴしとした服のポケットに手をつ込んで、そこから純白のハンカチを取り出した。

それを僕の指に当てて、レンティーノはしっかり謝ってきた。これは受け取った側の僕の不注意だから、レンティーノが悪いなんて

ことはないと思うんだけど。

「あ、ダメだよ汚れる」

僕の血を吸い取る白いハンカチを見て、僕は唐突にレンティーノを振り払った。だけどレンティーノは笑って、僕を見ている。

「いいえ、見てください」

ハンカチを広げて、レンティーノはそれをよく見せてくれた。真っ白なハンカチの隅のほうに、真っ赤な模様が出来てしまっていた。僕が汚してしまった、もとは汚れの無かった白。

「貴方の血、薔薇の花びらみたいじゃないですか。それに、ハンカチの代わりなんていくらでもあるんですよ」

……初めて聞いた。血が薔薇の花びらみたいだなんて。この人、大分狂ってる。僕と同じように。

僕が啞然としていると、レンティーノは髪を首の後ろで纏めながら言った。折角髪を纏めたけど結ぶものを持っていなかったのか、レンティーノはすぐに髪を放して元のように伸ばしっぱなしの状態にした。

「ハビに言われるんですよ、僕には薔薇が似合うって。父さんにも良く言われます」

にっこりと微笑むレンティーノ。僕も微笑み返した。すると、急に視界が暗くなった。誰かに後ろから両手で目隠しされたんだ。

思わず暴れようとしたけど、後ろから穏やかな声が聞こえたので自粛する。穏やかだけど、低い声。後ろの人はもう大人なんだろうか。

「だーれだ？」

「すみませんわかりません」

誰だよ。今時こんなことする人っているんだ。背後に立つ人は僕よりも随分と大きくて、僕の目を隠している彼の手は大きくてごつごつしていた。

そっと手を外されて後ろを振り返ると、ここに連れ込まれた日に出くわしたリィと同じ年くらいの人が立っていた。近くで見ると、

余計背が高く見える。

彼はにつこりと笑った。相変わらず、笑顔の裏に何か暗いものをもってるように感じる人だ。

「ミンイエ恩君、だね」

「明焰でいいです」

僕がそう言うと、何だか人の良さそうな笑みを浮かべて彼は笑った。レンティーノが言ってたハビって人は、この人なんだろうか。

「じゃあハビって呼んで。僕のこと知ってる？」

「ミンから少し聞きました」

やっぱり、このあり得ないぐらい大きな人がハビって人だった。顔つきはリイと同じくらいの年齢に見えるのに、なんでこんなにも大きいんだろう。いいなあ。僕もこれくらい長身になってみたい。

「僕は今十六歳。ここでバイト中だよ。身長、百九十八センチ」

ハビはそういつて、僕を見下ろす。百九十八つて、僕より何センチ高いのさ？　あり得ない、十六歳でそんなに背が高いなんて。

百九十九センチも身長があれば、たとえ年齢が二十をすぎていようが僕の国では「あり得ない」って言われた。なのにハビは、そんな僕の国の平均を楽々と抜かしてる。きっと家具は何から何まで大きいんだろうな。長身すぎるのも、生活するのに大変そうで困るね。

リイは大人になったとしても、おそらく百七十センチくらいで身長が止まっちゃうんじゃないかな。そしてきつと、僕も。

僕はそれから、ハビについて多くのことを知った。ハビが学校とカフェ・ロジエッタに行く傍ら、ここでバイトをしてること。来年で学校を卒業して、ここに住み込みで働くってこと。実は今も、半分住み込み状態なんだとか。

ここの研究員と一緒に、バスケットをやって遊ぶともいつていた。この研究所内にバスケットなんて出来る場所があるなんて。僕はハビが研究員と遊んでいることよりもそっちの方に驚いた。

「ミンイエ恩は学校に行ってた？」

僕は頷いて、ハビを見上げる。

楽しかった学校生活。友達は多くなかったけど、いつも隣にリイがいた。思い出すと涙が出そうになる。だけど僕は笑って、無理に笑って、リイのことは考えないようにした。

「うん。僕の成績はクラスでも上のほうだったよ」

「じゃあ後でおいで、一〇六七号室。レンティーノの隣の部屋だから」

ハビはそう言い置いて、中庭から研究棟に戻っていった。研究員に呼ばれているのだと言っていた。

「ハビは多忙な方なのです。ですが、いつも僕に良くしてくれるんですよ」

レンティーノはとても優しく笑って、僕を見た。僕と身長が同じくらいのレンティーノだから、いつでも目線が正面で合う。

「薔薇、嫌いですか？」

僕の手には視線を向けて、彼は言った。僕は首を横に振って薔薇を見つめた。

「嫌いじゃないよ、でも僕には似合わないと思う」

「良く似合ってますよ。ミンイェンの肌は白いですから、薔薇の赤がよく映えます」

そんなこと言われても、僕は一応男なんだけど。それ、女の人に使う褒め言葉じゃない？

……だけど、レンティーノに言われればなんでも嬉しくなってしまうものなんだよね。不思議なことに。

「そろそろお昼ですよ。一緒にいかがですか」

レンティーノは笑顔で僕にそういった。僕は彼とすっかり打ち解けていたから、喜んで彼についていった。

——麗水、必ず助けるよ。だからお願い。

少しだけ、こうしてシアワセでいる許可を下さい。

第五話 モルモット

レンティイーノとお昼にしていると、ミンが来た。

「お帰りなさい、父さん」

「ただいま。ミンイエンも一緒だね」

ミンは嬉しそうに笑いながら、レンティイーノに言った。僕はレンティイーノが淹れてくれた紅茶を飲みながら、ミンに軽く会釈した。

ミンは僕に向かってにこりと笑みを投げかけると、自分も昼食にするように着ていた白衣を脱いだ。脱いだ白衣をベッドの方に放り投げて、彼は僕とレンティイーノを振り返る。

「レジュストウルフルナディアンティイーノ、明日から学校へ行くことになっているよ。聞いていた？」

その言葉に、レンティイーノが固まった。上品な仕草で握られていた彼のフォークが、からんと音を立てて皿の上に落ちる。

学校？ レンティイーノが、学校に行くの？ 僕も勿論、少なからず驚いていた。

「……いえ、何も」

信じられないといった様子で答えるレンティイーノ。僕だって信じられないよ。レンティイーノと一緒にいられなくなったら、僕はとても退屈だ。

「明日は七時半にここを出なさい。いいね？」

ミンは最初からレンティイーノがこうして驚くのを見越していたのか、説得するようにそういった。

僕はレンティイーノをじっと見た。レンティイーノは僕の顔を見て何か思ったのか、さっとミンの方を見た。

「ミンイエンを連れていってはいけませんか」

一瞬、全世界の時間が止まってしまったかのように感じられた。

だって、レンティイーノと一緒にいいって言ってくれるなんて。僕に居場所をくれるなんて。そして、この願いが棄却されてしまう

可能性も考えて。

きつとミンの返事が来たのはそれから一分もしなかった後なんだろうけど、僕にとってこの時間は数時間に感じられるほど長かった。「おや、もう打ち解けたんだね？　良い事だ、許可しよう」

駄目だといわれるかもしれないと思ったのに、ミンは笑いながらそう答えてくれた。僕とレンティーノは顔を見合わせて、一緒に学校に行けることを喜び合った。

かくして、僕らは学校に行くことになった。僕らがいくのはこの研究所の近くにある学校で、そこはきちんと制服を着ていく学校らしい。

僕が行っていた学校は何ともアバウトというかい加減な学校で、校則なんて殆ど誰も守っていないし、知っている人のほうが少なかった。だから制服なんて皆着てこないし、アクセサリーがじゃらじやらしても先生は誰も文句を言わなかった。

「明日の朝、中庭でいいかな」

レンティーノにそう訊ねてみると、彼はにっこりと笑って頷いてくれた。だが、彼のその笑顔が少し曇る。それから、心配そうにこう訊かれた。

「もしも僕がその時来ないようでしたら、すみませんが起こしにきてくれませんか？」

話によると、レンティーノは朝が弱いらしい。僕は勿論快く引き受けて、レンティーノに一旦別れを告げた。そして、隣のハビの部屋に行ってみる。

ハビは机に向かって凄く真剣な表情を向けて、一心に何か書いていた。部屋には紙にペンを走らせる音だけが響いている。怖いくらいに、ハビはその作業に没頭していた。

「……ハビ？」

声をかけても、反応は無い。後ろにそっと回ってみても、反応が無い。これはちょっとおかしいと思う。

そっと彼の後ろからその手元を覗き込んでみると、ハビが一心に

書き綴っているのは研究資料の一部だってことが解った。でも、文字が難しくて読めないところがいっぱいある。

内容を頑張って解読してみることにして、僕は彼の文字を目で追う。

『蘇生した人間から生まれた子供の精神状況、ケース？』

意味は全然解らない。蘇生なんて言葉は、最近知った言葉だし。だけどこれが、レンティーノのことだって言うのは漠然と思った。ここの子供っていったら、僕とレンティーノしかないような気がするから。続きを読む。

『集団生活に耐えられるかどうか』

集団生活なんて、いままさにしてるんじゃないの？　というか、耐えられない場合なんてあるんだろうか。

そして僕はさらに続きを読み、信じられないものを見た。

『被験体一〇六八』

何、この被験体って。そして、何で数字なの？　これがもしも本当にレンティーノの実験だったら、被験体とか番号とか、そんなもので呼んで欲しくない。

大体、実験なんてしてほしくないよ。レンティーノはちゃんとした人間であって、僕の数少ない友達だから。

さらに、僕はハビが続ける文章を読み続けた。

『なお、実験の同行者を作ることによって発狂した場合に備える』
発狂って、何のこと？　どういう意味なのかよく解らない。けど、とにかく良い意味じゃないっていうのは解る。

そして僕は、同行者の名前のところに小さく『一〇九六』と記されているのを見つけた。一〇九六。それって、僕の部屋番号だ。そういういえば、レンティーノの部屋番号も一〇六八だった。

僕もレンティーノも、知らないうちに番号で呼ばれていたんだ。学校に行くのだって、実験の一環だった。そんな、酷い。僕たち、これじゃあただの道具みたいだよ。

今まで普通に生きてたのに。レンティーノは生まれた時からここ

にいたらしいけど、僕は普通の人間だった。ここはウサギ小屋？僕はモルモット？

「……いつからいたの」

声をかけられて飛び上がる。いつものハビの穏やかで深い声じゃない。何となくかすれた、抑揚の無い声。それに驚いたし、ちよつと怖かった。

いつのまにか、ハビは資料を書き終えていたみたいだった。僕は考え事をしていたから、気づく事ができなかった。

何故だろう、僕はハビがとても怖かった。一歩後じさり、彼を見る。

「いつだろう、五分前くらいかな。ハビ、声かけても返事しないから」

どうにか平静をよそおってそういえたけど、内心穏やかじゃない。ハビは僕を見ようともせず、そっけなく

「そう」

と呟いた。

どうしてこんなに別人のような声で喋るんだろう、ハビ。僕が戸惑っていると、ハビは椅子に座ったままの姿勢で首を捻ってこっちを向いた。

鋭く細められた目。寄せられた眉。あの穏やかな笑顔の片鱗すらみあたらない表情で、ハビはこっちを見ていた。

「何の用？」

突き放されるような言い方で訊ねられて、僕はびくつとする。何だかこの人、ハビじゃなくてハビの双子のお兄さんとかそういう人なんじゃないかって思う。

だって呼んだのはハビなのに、それすら覚えてないなんて。僕は何となく居心地の悪さを感じて、ハビの部屋をあとにした。

どうしたんだろう、ハビ。僕、何か怒らすようなこと言っちゃったかなあ？

悶々と考えながら廊下を歩いていると、不意に誰かにぶつかって

転んだ。起き上がると、不機嫌そうな少年が僕を睨みつけていた。

「チッ 気をつけな」

「……」

やけに高圧的な態度。僕は少しむっとして、目つきの悪い茶髪の少年を睨み上げた。

目の色が鮮やかすぎるくらい空色で、変な奴だった。リイと同じ年くらいだろうけど、リイみたいな優しそうな人じゃない。

「てめえ、年上に対する口の利き方をしらねえのか？ 返事くらいしやがれ」

相当機嫌が悪いのか、その人は僕の胸倉を掴み上げてきた。僕はそれでも、黙ってその人をにらみつけていた。僕、偉そうな人が大嫌いだから。

年上だから何？ 僕より長く生きてるから何？ 八つ当たりの対象になるかならないかってことに、そんなの関係ないよね。年下だったら年上の不当な扱いも受けろって事？ 笑わせないでよ。

「やめなさいマーティン。それから、襟元を正しなさい」

男の声に割り込まれ、僕は割り込んできた男によって少年から解放された。マーティンとか言う変な奴は、依然として僕を睨み降ろしている。だから僕も、マーティンを睨み返していた。

マーティンを止めた男は、この研究所内ではあまり見られない上質な黒のスーツに身を包んでいた。でも研究員なんだろう、きつと襟元に、研究員の証であるピンバッジがつけられていた。

「君、部屋に戻ったらどうだ。それと、その鬱陶しい前髪はすぐに切れ」

……何なの、この人。この人もマーティンに負けず劣らず変な奴だ。前半はいいとして、後半の前髪のことなんてこの人には関係ないでしょ。むかついたから、僕はこれから前髪を伸ばし続けることに決めた。

「ライナス、だってこいつ」

「黙れマーティン、髪が乱れてるぞ」

「そんな事、どうだって良いだろ！」

喧嘩を始める二人を尻目に歩き出すと、マーティンに腕をつかまれた。振り返ると、マーティンにはやりと笑みを浮かべた。嫌な笑みだ。

「おい、一〇二〇号室に来な」

一体何の用があるんだろう？　もしかして、今の仕返しでもされるのかな。僕は嫌だったから、即座に拒否した。

「やだ」

「絶対来な」

何なの、この強引な人。多分、というか絶対友達いないよ。ああ、行きたくないけど「絶対来な」って言われちゃったしなあ。行かないと後が怖そうだから、行こうか。仕方ない。

僕は部屋に戻ってしばらくレンティーノの薔薇を眺めていたけど、やることもないので一〇二〇号室に向かう。部屋のドアをくぐると、相変わらず不機嫌そうなマーティンがソファに座ってこっちを見ていた。

「よおウサギ」

「ウサギじゃない」

大体、僕のどこがウサギなんだろう？　初めてウサギなんて言われた。

僕は早々にマーティンと会話する気をなくす。

「ウサギじゃなきゃモルモットか？　実験台がエラソーな口きくな」
不機嫌そうに言うマーティン。ウサギって、そういう意味で言ってたんだ。僕は納得すると同時に、哀しい現実を悟った。

そうだよ、僕は実験台。だけど……

「君だって実験台だろ」

だって、研究員でない人間がここにいるなんておかしいから。僕の発言を聞いたマーティンは、にやりと笑った。

何かおかしいこと言ったかな、僕。というか、言っちゃ悪いけどマーティンの笑みはとても下劣だと思う。

「よくわかったな？　まあ、ここにいりゃあ実験台だって解るだろうがなあ」

何なんだろう、この人。さっき廊下でぶつかった時と、まるで態度が違う。

何でかきいてみたら、マーティンは喉の奥でくつくつ笑った。話す度に思うんだけど、マーティンには悪役しか向いてない。

「まあな、放っておけねえんだ。てめえ、弟に似てんだよ。生意気な所とか」

生意気って言われてむっとして、僕はマーティンを冷ややかに見た。そして、視線と同じく冷ややかな声で言った。

「君はリイなんて似ても似つかないけど」

「あんなヒョロヒョロで童顔のホルマリン漬けと同じにされたくないね」

この男、リイを馬鹿にした！　僕はかっとしてマーティンに掴みかかったけれど、いとも簡単に押さえ込まれてしまう。

暫くマーティンに押さえつけられて息を荒げていたけれど、僕はマーティンの腕を振り払って壁際まで後退した。そして、さっさとこの部屋から出て行くためにこういった。

「何の用？」

マーティンはゆらりとソファから立ち上がり、こっちに向かってくる。僕は殴られるんじゃないかと思って、ぎゅっと目をつぶった。数秒目を閉じて固まっても、何もされなかった。僕が目を開けると、マーティは僕の目の前にいた。何か言おうと思ったけど、思わず口を閉ざしてしまった。

マーティンが僕を見下ろして、やけに寂しそうな顔をしていたから。

「言ったら、弟に似てるんだ。興味あったから呼んだだけだ」

僕は黙って、マーティンの横をすり抜けてソファに座った。これは僕なりの「もっと話したい」という意思表示のつもり。マーティンにはこれが伝わってくれたようで、彼はにこりと笑いながら僕の

隣に座った。

彼は僕のことを何度も生意気だと言ったし、何度も弟に似ているといった。そして、何度か放っておけないともいった。

よく解らないな、この人のこと。

「ハビにはもう会ったか？」

軽い口調でそう訊ねられて、僕は頷いた。だけど、さっきのハビはやっぱり変だった。だから、そう言ってみた。

「でもさっきは何だか変だった」

もしかしたらマーティンは『ああ、だってあれハビじゃないからな』とか言ってくれるのかもしれない。そんな淡い期待をした。

できればそうであって欲しい。だってあんなハビ怖すぎて近寄れないから。

「ああ、あいつ仕事に熱中すると人が変わるからな。気にするな、我慢しな」

マーティンは気楽そうに笑いながら、ふと黙り込む。

辺りを覆う静寂に、僕は何をして良いかわからなくなる。マーティンの声がないだけで、こんなにもこの空間が怖く感じる。

白で統一されたこの空間。レンティノーと中庭にいたりしたから、束の間だけこの白を嫌悪する気持ちを忘れていた。

初めてここに来たときの、言いようもない恐怖がよみがえってくる。漠然と怖くなって、マーティンの横顔を見上げる。するとマーティンは僕を見下ろして軽く微笑んで、静寂を破って話をし始めた。ごく普通の家に生まれたマーティンは、ごく普通に生活していたらしい。ただどある日、マーティンは鍛冶屋の息子に弟を殺された。鍛冶屋の息子はイノセントという奇抜な名前の少年で、事件当時の年齢は僕と同じ位の十歳前後だったらしい。

事件のことをきいて現場に駆けつけると、イノセントは血塗れの服で手を拭いていた。マーティンは激昂してイノセントを殴ろうとした。でも、警察に取り押さえられたからそれできなかった。

イノセントはマーティンと目が合うと、謝りもせずに警察の車に

乗せられていった。イノセントは最後まで無表情だった。まるで、自分が悪いことをしたなんて思っていない風に。

「俺、あいつを殺す。止めるな」

静かな声でマーティンは言った。それきり、また静寂が訪れる。僕は静寂が怖かったのもあって、早急に答えた。

「止めないよ、僕も父さん殺しちゃったから」

そう答えるとマーティンは意外そうな顔をして、それから安心したような笑みを漏らした。童話でも語るように、マーティンは柔らかな声で僕に弟の話を聞かせてくれた。僕はマーティンの話をじっと聞いていた。

マーティンが喋っていれば静寂に怯えることなんかないし、何よりマーティンが弟のことを話すときってとても幸せそうに見えたから、僕は彼のそんな意外な一面をもっと見たかった。もしかすると僕もリイのことを喋る時には、こんな風に幸せそうに笑っているんだろうか？

だけど僕は、リイとは半分しか血のつながりがない。いいなあ、マーティンは。マーティンと弟はちゃんと、同じ親から生まれたから。僕もリイのお父さんの子として生まれてきたかった。

だって今、この身体には忌々しい殺人鬼の血が流れてる。この身体には、リイを殺した憎くて憎くてたまらない男の血が流れてる。

もう嫌だ。僕さえ生まれていなければ、リイはきっと母さんと本当のお父さんと一緒に何不自由なく暮らせていただろう。

リイ、ごめんなさい。リイの幸せを壊しちゃったのは、他でもない僕だ。そう考えてると、涙で目の前が滲んでくる。

すると、マーティンの大きな手が僕の髪の毛をわしゃわしゃと撫でた。同じことを、リイもよくしてくれた。リイの方が優しく撫でてくれたし手も華奢だったけど、僕は一瞬リイが戻ってきてくれたのかと錯覚してしまう。

誰かの前で泣くなんて癪だったし、その『誰か』がマーティンだなんてもっと嫌だけど。だけど僕は、静かに俯いて泣いた。

マーティンはただ黙って、僕の頭をわしやわしやと撫で続けた。

第六話 集団生活に耐えられるかどうか。

ハビの部屋の前を通り過ぎようとすると、白い壁からぬつと腕が突き出てきて捕らえられた。そのまま引きずられるようにして壁にとりこまれる。

何だかホラー映画のワンシーンみたいだと思うけど、このごつごつした大きな手はハビの手だ。壁を抜けて部屋の中へと入ると、いつもの優しそうなハビがいた。

「ミンイエ、約束忘れたの？」

「ちゃんと来たよ。でもハビ、凄く集中してたから」

ハビは、僕に会ったことを覚えていないみたいだった。でもハビが全くいつも通りに笑うから僕は安心して、もうそんな事などどうでも良くなった。

暫く二人で他愛もないことを談笑していたけど、ハビは何を思ってたか唐突に机の上にあったノートパソコンをたたんで僕に差し出した。

「あげる、これを使って勉強してみて？ ほら、僕はもう一台持ってるから」

そう言われてハビの指差す先を見てみれば、新品のパソコンが一台ある。でも、たとえ使わなくなったものなのだとしても悪い気がした。

僕が暮らしていた国ではパソコンはとても高価な物で、ある家の方が珍しかった。そして僕は学校に入学するまで、パソコンなんて物を見たことすらなかったから。

「君が受け取ってくれなかったら、このパソコンはスクラップにされるよ」

学校を不本意ながら中退してここにいる僕だけど、スクラップの意味くらいは知ってる。なぜ、まだ使えるものを廃棄してしまうんだろう。そう思うと同時に、この研究所には途方もない財力がある

のだと僕は今気づいた。

「まだ使えるのに？ 勿体無いよ」

「この研究所では、パソコンとかは外に持ち出しちゃいけないことになってるんだよ。データが漏洩したら困るから」

ハビが言う“ろうえい”って何のことだろう。そんなことも知らないの？ って馬鹿にされることはないだろうから、僕は素直に訊ねてみることにした。

「ろうえいって？」

「外部に流れちゃうって事。困るでしょ、今は何でも悪用される時代だから」

ハビは案の定、僕を馬鹿にしたりせずそういった。そして僕にパソコンを差し出した格好のまま肩越しに後ろを振り返り、ただの白い壁にしか見えないドアを見た。

「盗み聞きとは悪趣味だね、ライナス？」

「……いや、失礼」

何が起こったんだろう、ライナスの謝る声がして足音が遠ざかる音が聞こえた。どうしてハビは誰かが来たことがすぐにわかったんだろう。魔法でも使えるんじゃないかってほど、今のは見事だったしちょっと怖かった。

訊ねてみると、意外な返答が返ってきた。

「コンタクトレンズだよ。今してるこのレンズは、ドアの前に当てられた特殊光の屈折率を変えてみることができるとだ。今月に入ってからもう五回くらいこのドアに激突してるから、研究員の人に頼んで作ってもらった」

そういつて、ハビは笑う。何だか笑い事じゃない気もする。確かに便利そうなのこのコンタクトレンズだけど、僕は使いたくないと思う。

だって、何か嫌だから。この白い壁は目隠しの為にあるものだから、コンタクトしたらその意味がなくなっちゃうし。

「あ、パソコン」

「ううん、駄目だよ受け取れない。使い方解らないし」

ハビが思い出したように差し出してくるパソコンを受け取らないために、僕は咄嗟にそんな言い訳をした。それでもハビは退かずに、どうしても僕にパソコンを使わせる気でいるようだ。

「そういうと思った。僕が教えるよ、使い方」

にっこりと笑って、ハビは僕の腕にパソコンを抱えさせた。見た目と違って随分と軽い感触に、僕は驚きを禁じえなかった。

考えてみれば、僕は人から物を貰ったことがあまりなかった。リイからお菓子を貰ったりしたことはあったし、さっきもレンティーノから薔薇を貰ったりしたけれど、それ以外には殆どない。ましてや、パソコンなんて。

「いいの？」

訊ねてみれば、ハビは深く頷いてくれた。そして僕の肩にずっしりと重たい手を載せてくる。

「僕があげたいんだよ。ミンイェンはまだ十歳だから、僕よりもっともっと頭良くなれるはずだから。こういうのは、早いうちにやるのがいいんだって」

その言葉に、僕は笑顔で頷いた。そしてちゃんとハビにお礼を言うてから、一緒に部屋を出る。向かう先は、僕の部屋。

「ミンイェン、明日から学校でしょ？　どう、久々の学校は」

ハビがあまりに嬉しそうに聞いてくるから、何だか僕も嬉しくなる。やっぱりハビって、僕にとってお兄さんみたいな存在だ。

「楽しみだよ、ハビ。レンティーノと一緒にに行けるから」

いつのまにか僕は、リイに接するのと同じような気分でハビにそう答えていた。ハビは軽く頷いて、僕の頭をくしゃくしゃと撫でる。真っ白いだけの廊下を歩きながら、僕はこの研究所でミンやハビやレンティーノに出会ったことは悪いことじゃないって思い始めていた。

僕の部屋の前について、ハビは足を止めた。僕はカードキーを取り出してドアを開け、中に入る。ハビも一緒に入ってきた。

「初等科の勉強に飽きたら、僕のところへおいで。もっと高度な勉強を教えるから」

僕のベッドに腰掛けながら、ハビは言った。それを聞いて僕は、もっともっと嬉しくなった。やっぱりさっき冷たい態度を取った人は、ハビじゃなかったんだ。だって、こんなに優しいハビがあんなに寡黙で無愛想で怖い人になるはずがないから。

「ハビ、ありがとうね」

僕がそういうと、ハビはベッドから立ち上がってパソコンになにやらコードを取り付けた。これが電源らしい。コードを取り付けた後、ハビはすぐに部屋に戻っていった。

夕食までの間にパソコンの電源を一度つけてみたけれど、使い方がさっぱり解らなくて放置してしまった。ハビがいないとパソコンが使えないことを痛感する。

今日はレンティーノとミン、そしてハビと一緒に夕食をとった。話題に上るのは学校のことばかりで、僕は嬉しい反面、少し胸の痛みを感じていた。

僕らはどうせ実験台。学校に行かせてもらえるのも研究の一環で、僕らは研究所で飼育されているただの小動物にすぎないんだ。

仮に実験が失敗して死んでしまっても、ウサギは所詮殺すために飼われていた動物なのだから誰も悲しんだりしない。僕らは死でさえも酷く事務的に処理される、そんな実験用の動物なんだ。

「凄く楽しみです！ 明日は一緒に学校に行くんですね、ミンイエーン？」

僕が何を考えているのか全く知らない様子のレンティーノは、満面の笑みで本当に嬉しそうに言う。ハビやミンも微笑んでいる。暗いのは、僕だけ。

うきうきした様子で笑うレンティーノを見ると、何故か「まあ、実験でも何でもいいかな」と思えてくる。

僕はレンティーノやハビたちと一緒にいると、実験やら研究やらそんなことのために生かされているんじゃないかって思えるんだ。

そんなことのためじゃなくてもっと大事なもののために、僕は自分の意思で生きてるんだ。僕はリイを蘇生させても、この研究所に残ってレンティーノの傍にいたい。

「そういえばミン、制服は？」

訊ねてみると、ミンはあっと小さく声を上げた。そして苦笑しながら、持っていたナイフとフォークを皿の上に置いた。

「ああ、すっかり忘れていたよ。後で置きに行くから、サイズが合わなかったら今日のうちに交換しおいで」

微笑みながらミンは素晴らしい、食べ終わった後の食器の片づけをした。レンティーノもそれを手伝っている。

僕もだんだん、わくわくしてきた。実験とか研究とか、そういうことを全く考えなければ僕は明日から素晴らしい世界に足を踏み入れることができるから。

制服なんて初めて着るし、レンティーノと一緒にだし、知らない場所でいろんな勉強ができるって凄いことだと思う。

リイも蘇生が完了したら、一緒に学校に連れて行きたい。それまでに僕は、リイに追いつくように頑張って一所懸命に勉強する。待っててね、リイ。

部屋に戻ってベッドに寝そべっていると、誰かが僕の部屋のドアをノックしたのですぐにドアを開けにいく。ドアを開けるとそこには、制服を着たレンティーノがいた。

普段からレンティーノはきっちりしたシャツとかスーツに近いデザインの前より着ていたから、全然違和感がない。ちなみに、明日から行く学校の制服は黒系のブレザーだった。

「ミンイェン、明日から僕はレンティーノです。長い名前は学校を卒業するまで使いません」

そうか、レンティーノの名前は長すぎるからね。全く、どうしてレンティーノの一家では覚えきれないくらい長い名前をつけるんだろう。

そういえば僕は、苗字の事なんかすっかり忘れいてた。父親の苗

字は劉^{リュウ}。母さんの苗字は黒^{ヘイ}。当然僕は、母方の苗字を名乗ることに決めた。父親が嫌いなんだもん。

「僕の苗字は黒だよ。でも、レンティーノは今までどおり明焰^{メイエン}って呼んでね」

レンティーノはその言葉を快く了承してくれたみたいで、満面の笑みを浮かべたまま頷いてくれた。

今日のレンティーノは本当にこやかだ。いつもにこやかだけど、今日はそのにこやかさが三割り増し、いや五割り増しになってる。

「解りました、ミンイェン。“ヘイ”って、変わった苗字ですね」

通常の五割り増しの笑顔で、レンティーノは本当に面白そうにそういった。だけど、ちょっと待って欲しい。一番へんてこりんな名前なのは、他でもないレンティーノじゃないか。

「でも、レンティーノの名前ほど変わってるものはないと思う！」
僕がそう言うとレンティーノはふと黙り込み、それから声を上げて笑いながら頷いた。何だか可笑しくなってきた、僕も笑ってしまった。

二人で笑い合っていると、ミンが僕の部屋に来た。レンティーノはミンと入れ替わりになる形で僕の部屋から去っていく。

僕はミンから制服を受け取った。そして、それをすぐに着てみる。ミンは僕のベッドサイドにおいてあった花瓶に気づき、花瓶に挿された一本のしおれかけた薔薇にもすぐに目を留めた。あ、水が足りなかったのかもしれない。

ミンは、僕が何も言わないのに薔薇の水替えをしてくれた。思ったとおり、ミンが傾けた花瓶からは数滴の水しかでてこなかった。そしてミンが薔薇の水を換え終わるまでの間に、僕は着替えを終えていた。

「おや、ミンイェン。黒い服もなかなか似合うね」

僕が着替え終わったことに気づいたミンが、ベッドサイドに薔薇の挿された花瓶を置きながら言った。僕は少し照れて、制服の袖や腰周りを自分で眺めてみる。

全身はまだ見てない。鏡の前に立ってみれば、解るけど。

僕は洗面台の前に立つ時に、少し緊張した。一体僕は、どんな格好をしているんだろう。似合わなかったらどうしよう。けれど、見なければそれも解らない。

意を決して、僕は洗面台の前に立った。その瞬間に鏡の向こう側に立ったのは、野暮^{やば}ったいもさもさした髪の少年。野暮^{やば}ったい髪とは釣り合わないシャープでシックな黒の制服をきて、心持ち不安げな表情をしている少年だ。この髪は、梳かせば何とかマシになるかもしれない。

感想？ そうだね、野暮^{やば}ったい僕にはあまり似合っていない制服だと思う。制服の立派さに僕自身が置いていかれてるような、そんな感じ。

着慣れない制服を着たまま、僕はその辺りを少し歩いてみたりする。うん、サイズは丁度いいみたい。

「よし、じゃあそれで明日から学校だ。鞆や教科書はあとで手配するよ。お古でなおかつ違う学校の物で悪いけど、とりあえず明日はハビとマーティンの鞆を使って」

そう言いながら、ミンはにっこりと笑う。彼の話によると、筆記用具や学用品なんかは全部この研究所が買ってくれるらしい。なんだか大掛かりなプロジェクトだな、と僕は心の中で笑う。

ミンはおやすみを告げたあと僕の部屋を出て行った。さあ、今日は早く寝なくちゃ。明日は早起きして、レンティーノより早く中庭で待っていたいから。

僕は制服を脱いでソファの上に畳んで置くと、ベッドにもぐりこんで電気を消した。

第七話 転機

次の日、勿論僕は学校に行つて初めて研究所の外に出た。ここは僕が今まで暮らしてきた片田舎の町とは、大きく違つていた。高層ビルばかり立ち並んだ、随分と都会的な街。それが、今日から通う学校がある場所なんだ。

ここは異国だろうと予想はしていたけれど、まさか景色がここまですていとは思ひなかつた。想像していた町並みとは、大きく違う。というか、こんな高層ビルなんて今まで見たことが無かつた。

僕は思わず街中で立ち止まってしまう。こんな都会的な町並みにもちゃんと緑を取り入れる工夫がされていて、歩道の脇には常緑樹の並木があつた。

ふと気がつくと、僕の隣でレンティーノもぼうっと辺りを見回していた。レンティーノも、ここから出るのは初めてだと言つていた。僕より長くあの研究所で暮らしてるのに、今日初めて研究所から出るらしい。

僕らの保護者としてハビとミンが同行してくれていたから、僕らは迷子にならずに済んだ。ハビもミンもぴしつとしたスーツに身を包んで、梳かした髪を整髪料で撫で付けている。

レンティーノとミンはちゃんとした親子だし顔も似ているから良しとして、僕とハビは顔つきからして大きく違う。だから絶対に親だなんて認めてもらえないだろうと思つたけど、レンティーノもミンも二人で口を揃えて「完璧な親子だ」と言ってくれる。

ちなみにハビはこの日の為に一昨日くらいからひげ剃りをやめて、無精ひげを生やしていた。これなら実年齢より確実に五歳は上に見える。

でもそんな若い男が十歳前後の子供なんか持つてゐるわけないって、普通は皆そう思うよね？ 大体レンティーノとミンだって本物の親子だけど、ミンが若すぎる。

「大丈夫だよ、ミンも僕も身長があるから」

不安をそのまま声に出してみると、ハビはそういつて自分を指差した。確かにハビの二メートル近い身長なら、顔をあまり見られずに済むかもしれない。

背の高さだったらミンだってハビより少し低いくらいだし、よく考えれば二人ともいつでも誰かを見下ろしている。

「知ってる？　僕もハビも、年齢を偽るのが得意分野なんだよ」

悪戯っぽく笑って、ミンは歩き始める。僕は素直に感心しながら、実年齢よりも年上に見られるってどういう感覚なんだろうと答えの出ない疑問をとりとめなく考え続けた。

生徒たちはまだ登校の時間らしくて、僕たちを物珍しげな目で見ながら校門に駆け込んでいく。どうしよう、緊張してきた。

今日から僕らが通う学校は、高層ビル群の中でひととき目立つ五階建ての学校だった。何が目立つかって、低すぎるのが目立つんだ。それに、校舎が何となく時代を逆行してるような雰囲気を持っている。

「まずは職員室に行こうか。君とレジストウルフエルナディアンティーノは同じクラスになっているはずだよ」

ポケットから鏡を出して入念に髪形をチェックし、細い銀のフレームの眼鏡をかけながらミンは言った。ハビもミンの隣でポケットから小さな櫛を取り出して、髪の毛をオールバックにしている。なるほど、オールバックにしている方が二十歳後半に見える。

「本当ですか、嬉しいですよ！」

ミンの言葉をきいたレンティーノははしゃいで、物凄く嬉しそうに笑っている。今のレンティーノからは、幸福感があふれ出ているようにすら思える。

どうやらレンティーノは緊張感を吹っ切ったらしい。僕も何となく元気付けられた。そうか、レンティーノと同じクラスか。良かった、これでクラスで孤立することはなさそうだ。

暫くして準備が整ったのか、ハビとミンは僕らを軽く振り返って

笑った。振り返ったハビとミンを見て、僕は愕然とする。実際は若い二人だけど、こんなに老けることもできるなんて。

ハビもミンも、完璧に化けていた。一体、僕が目を離していた数分の間に何があったんだろう。

「さて、行こうか」

偽（片方は本物の）保護者の二人に連れられた僕とレンティーノは校舎に入り、それから職員室に入る。先生たちは誰もが僕とレンティーノを歓迎してくれて、ハビとミンに色々な説明を聞かせていた。

やがて僕とレンティーノは、担任になった男の先生に連れられて四階の教室に向かった。そこで僕らを待ち受けていたのは、たくさんの好奇の視線とたくさんの子供たち。今日からは、週に五日は彼らと半日くらい生活を共にすることになる。

とにかくこれからは、ここが僕の居場所だ。僕は深く息を吸い込み、笑ってみた。

クラスに馴染むのは意外と簡単で、それはクラスの子供達が僕らに興味を持ってくれたからだだった。楽しい学校生活が始まり、時にはクラスで喧嘩したり孤立したりすることもあった。けれど、やはり楽しいのが大部分だった。楽しい時はすぐにすぎるというのは本当のようで、あっという間に五年の月日がたった。

五年の間に手にしたものは、下らない学生生活の思い出と、たくさん友人、それから誰も僕を避けたり苛めたりしない環境かな。

下らないことで笑って、下らないことで怒って、下らないことで悲しんで。それでも、その下らなさが心地よかった。

ハビのおかげで、僕はパソコンを使えるようになっていた。したがって、週に一度あるパソコンの授業がかなり退屈になってきていた。ちよつとした遊びのつもりで先生のパソコンに侵入してみたら、バレて物凄く怒られた。

パソコンの使い方が解らない人は殆ど全員僕に聞くようになったし、レンティーノもその例外ではなかった。

僕はクラスでトップの成績を誇り、毎日を楽しく過ごしていた。レンティーノも相変わらずで、僕に続いて良い成績をもっていた。クラスの中でも結構浮いた存在で何というか浮世離れた感じのレンティーノに、恋する人も多かったみたいだ。

浮いてるって言っても、それは平均的な普通の男子に比べてかなり異色だったって言う意味。だから決して、レンティーノがクラスの中で居場所がなかったりするという訳ではなかった。

レンティーノの変わったところといえば、蜂蜜色の髪が少し伸びたこと。全体的に、縦に伸びたこと。丸っこかった輪郭が、きりつと引き締まったこと。本質的にはあまり変わっていないように思うけれど、彼の一人称が僕から私に変わったのは暫く前のことだった。え、僕？ 背が少し伸びたこと、前髪が伸びたこと、それだけ。

あとは…… 未だに蘇生が完了しないリィの年齢に、追いついたりやった。本当ならもう、リィは成人して仕事を持って、もしかしたら家庭を持っていたかもしれないのに。彼は未だに、冷たい水の中で目を閉じている。五年前と全く変わらない姿で、彼には少しも生き返る気配がない。

僕はリィと同じように、十五歳にしては小柄だとよく言われた。ある日のことだった。僕はいつものように学校から研究所に戻ってきて、ある会話を耳にした。

「洗脳装置？」

「そうだ。今度実験するらしいぜ。人工魔力のあるあの若造を使つてな」

「ああ、あのマーティンⅡパストンっていうクソガキ？ いい気味だな」

洗脳って、まさか。そんな。……止めなきゃ。絶対に止めなきゃ！僕は自分の部屋に戻らず、真っ直ぐに一〇二〇号室を目指した。まずはマーティンにこれを知らせなきゃ。

一〇二〇号室にたどり着いてドアを開けてもらうと、僕は信じられない光景を目の当たりにすることになった。

「マ、マーティン？ その髪」

一瞬、違う人かと思った。だけどマーティンを見間違はずがいし、ここはマーティンの部屋だ。

マーティンは、染料のように真っ青な髪をいじくりながら僕を見ていた。昨日までは茶色かったその髪が、どうしてそんなに急に青くなってしまふのだろう？ かつらかとも思ったが、そうではないようだ。

「いいだろう？ 弟の瞳と同じ色だ。まあ、俺の瞳もだけど」

何事も無かったかのように、マーティンは普通にそういった。この髪は、実験の一環で染めたらしい。研究所で新しい染毛液を開発したから、マーティンが実験台になったのだ。

永久染毛液、そんな名の染毛液だった。その名の通り、この染毛液で髪を染めると伸びてくる髪まで染めた髪と同じ色になるという。遺伝子操作をする薬品なので、今は試験的にマーティンが使っているらしい。人体に影響がないか、遺伝子に影響がないか確かめるために。

「ねえ、マーティン。君は洗脳装置の実験のこと聞いてる？」

どうしてこうも、マーティンは会う度にどこかを少しずつ蝕まれているのだろう。弟の敵を討ちたい。彼が望んでいるのは、ただそれだけなのに。

どうしてマーティンが研究員に疎^{うと}まれ、悲惨な実験の対象にされているのか僕には理解できない。遺伝子を直接操作して髪の色を変えるなんて、下手したらマーティンを殺すことになりかねないの。いいや、考えたくないけど死ぬより酷い場合だってありそうだ。

そこまでリスクを背負わせた上で、更に洗脳の実験をするなんてそんなことをして何の意味があるというのだろうか？

マーティンは、陰鬱に笑う。

「洗脳かあ。じゃあ俺、もう俺じゃなくなるなあ？ 全く、笑えるね」

何を言っているんだろう、マーティンは。マーティンが洗脳され

て僕のことを認識しなくなってしまったとして、そんな状況で笑うことが出来るほど僕は冷酷な芸達者ではない。

「全然笑えないよ！」

思わず感情の制御が外れてマーティンに掴みかかると、マーティンは怒ったりせず穏やかな顔で笑った。そして、そっと胸倉を掴む僕の手首を握り締めた。

いとも簡単に、僕はマーティンの胸倉を解放させられる。力の差は歴然としている。当然、僕の方が弱いに決まっている。

「今まで楽しかった、ミンイェン。これやるよ」

言いながら、マーティンは僕の手首に一本の細い紐のようなものを巻きつけた。僕が首をかしげると、マーティンは僕の手首にその紐を結びつけた。一体何のつもりなのか、よく飲み込めない。

「人工魔力って知ってるか」

ぽつりと呟くマーティンに、僕は胸の奥を締め付けられるような感覚を覚えた。どうしてそんなに、苦しそうな顔で笑うのだろう。

まるで…… そう、まるで、リイが命を落とした時みたいじゃないか。

生きたいよって顔をしながら、それでも死んでいったリイと同じ道を、マーティンは受け入れるというのだろうか？

この研究所が世界で初めて魔力を化学で解明できたのだとか、そういうことすら如何でも良くなった。僕は何としてでも、マーティンを救う。もう、大事な人をリイみたいに失いたくないんだ。

「このミサンガには魔力を込めてある。俺は実験でこの力を手に入れたんだ。副作用で時々ひでえ頭痛を感じる時があるかもしれないけど、使いたいときに切りな。これを切れば、お前も魔力が使えるようになる。ただし、一定時間だけだ」

……本当に、魔力なんてものがこの世にあるんだ。まずは、マーティンの口からつむぎだされたその事実には驚いた。

この力があるのにどうして、マーティンは洗脳の実験を受けることを拒否しないのだろう。きっと何か、裏があるにちがいない。だ

けど、そんなことは今考えることじゃない。

僕は頷いて、それから唐突に思った。

「マーティン、その実験はいつやるの？」

「明日」

見事に単語だけで答えてくれたマーティンに、僕はしばらく何も言い返さなかった。だけど、きっぱりとこういった。

「部屋、代わって」

真面目にそういったのに、マーティンは即答で嫌だと答えた。僕はため息をつきつつ、天井を仰ぐ。

真っ白いはずの天井には、金髪の女の人のポスターが張ってある。この部屋は本当にマーティンの私的な空間で、天井にも壁にもポスターが貼ってあったり落書きがしてあったりする。

「お願いだよマーティン、その実験は僕が受ける」

天井から目を落とし、今度は足元を見ながら僕は言った。するとマーティンは僕の肩を掴んで強く揺すってきた。

僕は驚いてマーティンを見る。マーティンは物凄い目つきで、僕を睨んでいた。

「お前って奴は！ これからずっと結社のウサギのまま生きるのか？」

マーティンは真剣に怒っているようだった。

どちらかっていうといつも何かに対して不満だったり怒りだったり、そういうものを抱いて過ごしているマーティンだから、怒りの表情なんか珍しくもなんともないんだけど。

でも、こんなに怒ってるマーティンは初めて見たっていいぐらいかもしれない。兎に角、今すぐ殴られるんじゃないかっていうほど凄い剣幕だった。

「大丈夫、何とかしてみせるから！」

「……嫌だ、二度も弟を失うなんてっ」

唐突に怒りを消して、力なく僕の肩にかけた腕を下ろすマーティン。頑として嫌だと言い張るマーティンをじっと見て、僕は再び「

実験を受けたい」と言った。

僕は、マーティンが分けてくれたこの人工魔力で洗脳装置を壊してしまおうと思ったんだ。もしも実験でその装置を使えば人間を洗脳できると証明されてしまったら、僕らはきつと一人残らず洗脳される。レンティーノもハビもマーティンも、研究員であるミンでさえも。

そんなの、絶対に嫌だから。何をしてでも阻止しなきゃならないって、思ったから。僕は深呼吸して、マーティンの目をじっと見つめた。

絶望と微かな怯え、気楽さと愛しさと諦め。他にもいろんなものが、その瞳の中に垣間見えた気がした。

「いい、マーティン？　もしも僕が洗脳されたとしたら、マーティンが人工魔力で何とかして。でも考えてみてよ。マーティンが洗脳されても、僕には為す術なんてない」

しっかりと、確実に。僕はその言葉を、マーティンの目を見つめて言った。暫く無言の時間が流れた。だけど、やがてマーティンが渋々引き下がってくれた。本当は自分の意見を貫きたかっただろうけど、僕の我儘をきいてくれた。

僕は、学校が休みだということを利用してこんな計画を立てたんだ。人工魔力で洗脳装置を壊して、残酷な実験を止めるんだ。ね、単純で確実でしょ？

たとえば後から研究員に嫌われたって、僕は構わない。僕はマーティンやレンティーノやハビたちを守りたいんだ。

だって、大事な友達だから。

第八話 洗脳装置

実験当日は、五月の第二土曜日。

僕は一日中、マーティンの部屋にいた。今日のことは、ハビにもミンにもレンティーノにも秘密だ。

金髪や黒髪の女の人が流し目でこっちを見ているポスターとにらめっこしながら、僕は研究員を待った。つくづく思うけど、マーティンの部屋はちよつと僕にとっては大人すぎる。ハビやミンとはまた違う意味で、マーティンも大人だから。

やがて昼過ぎになると、ドアの向こうからナンバーで呼ばれた。

「一〇二〇」

「はい」

この瞬間から僕は、被験体一〇二〇号になった。被験体一〇二〇、本名はマーティンⅡパストン。

だけど殆どの研究員は、マーティンのことを番号で呼んでいる。

マーティンは色んな研究員から嫌われてるんだ。

だけど僕は、マーティンのことが嫌いじゃない。ハビやミンやレンティーノも、当然マーティンを嫌ったりしてない。おかしいのは、研究員の方なんだ。

僕はドアを開けて、実体のない白い壁を抜けて廊下に出た。すると待ち受けていた研究員が一瞬意外そうな顔をして、それから意地悪い目で僕を見た。否、見下した。見たとか見下ろしたとか、そういうことじゃなくて。

そうか、マーティンはきついつもこんな風にこの人に見下されてるんだ。マーティンが何をしたっていうんだろう。弟の為に一生懸命になってる、その努力を認めてあげようとか思わないのかな。

「貴様は一〇九六じゃないのか？」

その研究員が浮かべた嫌味っぽい笑みが一体何を意味するのか、僕には解らなかった。というか、解らなくても良いと思った。

この人はマーティンの敵だ。だから僕も、この人を敵に回す。

「僕は一〇二〇です」

勝負に挑むような気分で、僕は研究員を見上げた。すると研究員は、僕を馬鹿にしたような目で見た後あからさまな嘲笑を浮かべた。そして、歩き始める。僕は彼の後を追いつながら、何だか猛烈に腹を立てていた。

「フン、一〇二〇は逃げたのか。無様な野郎だぜ、全く」

「一〇二〇は僕だ！ マーティンは無様ななんかじゃない！」

気づいたら怒鳴っていた。だって、研究員がマーティンを侮辱したから。たとえ誰であろうと、僕の目の前で友人を侮辱したら絶対に許さない。

研究員は相変わらず僕を見下したまま、嫌な笑みを浮かべ続けた。僕は彼から目を逸らし、不満を思いつき顔に出しながら歩き続けた。

暫く廊下を歩いていると、前方に広がっている廊下の向こうから誰かがふらりと現れた。そして、僕を目指して一直線に走ってくる。

「あれ」

どう見てもそれはレンティーノだった。いつも通りの上品なスーツに身を包んで、古風な丸眼鏡をかけている。問題は、その形相にあった。

物凄く必死そうだ。一体、レンティーノに何があったのだろうか？

「ミンイェン、父さんが、父さんがっ」

髪も服も乱れてるし、眼鏡もずれている。なのに、それも直そうとせずにレンティーノは僕の肩を掴んで揺さぶってくる。

僕らは、出会った頃は同じくらいの身長だった。でも、今となつてはレンティーノとの身長差がかなり開いている。だから僕は、レンティーノを見上げた姿勢のまま揺すられていた。この姿勢で揺すられると、喉が痛い。

「ちよつと、レンティーノ？ まずは落ち着いて！」

僕はレンティーノの腕を掴んで叫んだ。レンティーノは息を荒げ

て僕を見下ろし、それから首を横に振る。

「私は一体どうすれば良いのです!」

レンティーノは泣きそうな顔でそう言い、僕の肩から力なく腕を外す。僕はレンティーノを見上げて、言葉の続きを待った。

彼は暫く何かを否定するように首を振ったり自分の髪を鷲掴みにしたりしていたけれど、やがてぽつりと呟いた。

「父さんが…… 死んだ」

髪を両手で鷲掴みにしながら、レンティーノはそういったのだ。

僕は一瞬、それが幻聴なのかと思った。だけど、それが現実であるという証にレンティーノがおかしくなっている。

レンティーノは震えながら僕を見下ろして、その場にへたり込みそうになっている。僕はそんなレンティーノに手を貸そうとしたけれど、不意に強い力で腕を引っ張られた。

痛みに顔をしかめながら腕を掴んでいる人物を見やる。あの、いけ好かない研究員だ。

「待ってよ!」

腕を振り解こうとするけれど、無駄だった。研究員は強く僕の腕を握り締め、絶対に離そうとはしない。

「スケジュールを厳守しろ、一〇二〇! 今のお前には、下らないことに付き合っている暇はないんだ」

……下らない? それを聞いて、僕は返す言葉をなくした。

もしかしたら大切な誰かが死んでしまったかもしれない、そんな時によく下らないなんて言える。この男が仮にも研究員なら、ミンは同僚だ。なのに、何て態度をとるのだろう。

強制的に歩かされながら、後ろを振り返る。レンティーノは廊下にへたり込んで放心していた。小刻みに震える手を、自分の胸に抱きしめるようにしながら。見ていて痛々しかった。

僕は手を離してくれない研究員に殺意のこもった一瞥を投げかけて、レンティーノに向かって叫んだ。

「すぐに戻ってくるから!」

この言葉がちゃんとレンティノに届いたかどうかは、解らない。だけど、届いてくれることを祈った。

ミンに何があったのだろう。心配だし、何だか嫌な予感もする。もしもミンが本当に死んだなんて言ったら、僕はどうすればいい？僕が俯いていると、研究員がふと足を止めた。何事かと思つて研究員を見上げると、いきなり頬をつかまれる。そして、何故か白いカチューシャで前髪を上げさせられた。

取ろうとしたけれど、腕をつかまれて取れずに終わる。

「髪なんか伸ばしてんじゃねえよ、男の癖に」

研究員は吐き捨てるようにそう言うと、再び僕の手を引いて歩き始める。僕はこんな男に触れられていたくなかったから、彼の手を振り払って自分で歩いた。

無言で歩き続けると、行く手に第二研究室が見えた。研究員が乱暴な口調で、この部屋に入れと言った。

本当にこの研究員は嫌な奴だ。訳もなく高圧的だし、僕を見下してるし、何より僕のことを番号でしか呼ばない。同じ研究員でも、ミンは僕を番号で呼んだことなんか一度もないのに。この研究員は、僕を人間として扱ってくれてないんだ。

僕はこの研究員を睨みつけたあと、用意されていた椅子に腰掛けた。椅子の傍には怪しげな器具や機械がたくさんおいてある。

電源装置やら小型のパソコン、それから何十本ものコードが取り付けられた箱状の物体。その機械にはスイッチやボタンがたくさんついていて、コードのうちの数本は電源に伸びていた。コードの殆どは身体に貼り付けるためにあるらしく、先端にテープが貼られている。

パソコンにはスクリーンセーバーが起動しているから、画面にどんなデータが表示されているのか読み取ることはできなかった。

でも研究員の一人がマウスに触れてスクリーンセーバーが解除された時に、画面に写真つきの個人データが表示されているのが見えた。

白衣の男。髪の毛が黒い。ほんの数秒の短い間だったから、それくらいしか解らなかった。だって、早速コードを取り付けられそうになったから。

額にコード付のテープを貼りつけられた瞬間、僕はあらかじめ斜めに切っておいた爪でマーティンのミサンガを切った。

とたんに、嫌な音が世界を覆う。機械が唸る音が酷くなり、ブザーのような電子音が鳴り止まない。

僕は耳を塞ぎ、額からテープを引き剥がしながら念じた。

この空間の時間が止まるように。そんなことしか念じられなかった。だけど、確実に効果があった。

世界から音が消えた。静寂の中で辺りを見回せば、研究員たちは微動だにしなくなっている。僕は椅子から腰を上げて、一直線にパソコンへと向かった。

「……この男って」

それは、研究所の最高権力者だった。リイを生き返らせてくれるって言った、あのおじさん。解った、これはきっとデータに該当する人物に誰かを服従させるための装置なんだ。

パソコンの横にプリントされた紙の束があった。ざっと目を通すと、それはこの装置のマニュアルだった。僕はキーボードに触れて、最高権力者のデータを書き換えて自分のものにした。そして、微動だにしない研究員たちを見る。

——実験、してみようと思うんだ。

よく考え直せばとても悪いことだって理解できる。倫理的な面から見たら、洗脳なんて最低の行為だね。

だけど『倫理的な面から見たら最低の行為』を、今まさに僕がされようとしていた。研究員たちは僕を見ても洗脳をためらうことはなかったし、一度だって気遣う声をくれなかった。これくらい、当然の報いだよね？

もう五年もたつのにリイを蘇生させてくれないし、かと思えば洗脳装置なんて開発してるし。自分は何も良い事なんてしてないく

せに、偉そうな態度で命令してきたり。本当に、この研究員達には愛想が尽きるよ。洗脳が上手くいったら、リイの蘇生を最優先にするように命令を下してみようか。

僕は、一番嫌いな研究員を椅子に座らせた。そして、額にコードを取り付ける。マニュアルを見ると、額だけじゃなくて色んな所に電極をつけるようにかいてあった。僕は、書いてある通りにコードをとりつけた。そして、自分の頭につけていた白いカチューシャを研究員につけてあげた。

これで準備はおしまい。僕は装置の電源を入れて、パソコンの“転送”ボタンを押した。

一瞬何も起こらないかと思った。でも次の瞬間には部屋中の電気がバチバチと音を立てて、不規則に弱まったり強まったりしだした。椅子に座った研究員は、喚き、もがいて、身体をかきむしるように皮膚に爪を立てた。しばらくして研究員の叫び声が嘎れてきた頃、電気が点滅をやめた。

彼はがくりと項垂れ、動かなくなった。僕はその光景を、ただ茫然と見ていた。椅子の上で正気を失っているこの男は、もしかしたら僕かマーティンが辿っていたかもしれない運命を辿った。ということは、僕やマーティンがこんな風に悶え苦しんでいたかもしれないんだ。何て恐ろしいことなんだろう。

僕が呆気にと取られていると、ぴくりと『被験体』が動いた。そして、ゆっくりとした動作で顔を上げて僕を捉える。

研究員は僕を真っ直ぐに見つめ、嬉しそうにこう言った。

「明焰様……」
ミニイェン

どう反応して良いのか解らなかった。さっきまで僕を見下していた、乱暴で理不尽なことしかしなかったこの男が僕を真っ直ぐに見てる。なおかつ、様付けで。

もしかこれが僕やマーティンだったら、最高権力者を様付けで呼んでいたんだろう。それこそ、彼の飼い犬になったかのように。ぞっとした。

「さ、様あ？」

拍子抜けしていた僕は、研究員にそういった。すると研究員は満面の笑みで頷いて、僕を見上げた。

「明焰様、何を望んでらっしゃるのですか？」

慕うように、縋るように。さっきまでのこの男からは想像も出来ないような態度で、彼は言う。

そう、僕らはもう対等な関係じゃない。彼の中で、僕は神なんだ。少し怖くなった。

僕は、慕われている。責任感を持たなきゃならない。だけど、次第に僕の中で何かが壊れはじめた。

……この男が僕たちみたいに番号で呼ばれている被験体に対して、いつもあんな酷い態度をとっていたのなら。彼らと同じように、僕も研究員たちを壊してしまえば良い。

「ねえ、きいて？」

話しかけてみれば、主人にすぎる犬のような目で僕を見上げる研究員。今の気持ちを一言で表すならば、もうこれしかないよ。

愉快。

散々マーティンや僕を侮辱しておいたくせに、こんな機械で力を加えられればすぐに自我を手放し、別人に豹変する。人間って、弱い生き物だね。

「この部屋にいる人、みーんなこの機械で洗脳して？」

言った瞬間、魔法がきれたように皆普通に動き出した。そして、僕と研究員を見て驚愕の表情を顔に浮かべている。僕は強い頭痛を感じて、その場にうずくまった。マーティンが言った人工魔力の副作用って、これなんだ。頭を抱えながら、それでも僕は下僕を観察した。

僕の下僕は、小柄で見るからにインテリの研究員を捕まえた。凄いい早業でコードを取り付け、洗脳を進めていく僕の下僕。恐ろしい

と思うと同時に、感動した。

今日から彼は、僕の手駒。そして、手駒はどんどん増えてゆく。これならリイを生き返らせるプロジェクトだって、楽に進む。

下僕はどんどん増えたから、抵抗する研究員を二人係りで押さえつけて洗脳するなんていう荒業もやってのけてくれた。ほどなくして、部屋にいた全ての研究員が僕の下僕と化した。しめて二十人程度。その中に、当然だけど最高権力者の姿はなかった。

下僕たちは、全員そろって僕を見つめている。ごめんね、リイ。もう僕のことを弟と呼べだなんて言えないね。時が僕を変えてしまったんだ、良い方にも悪い方にも。

だけどリイ、僕はいつまでもリイのことを大切に思ってるよ。だからリイ、もう少しだけ待っていて。

最高の芸術品やしもべたちを用意して、リイを必ず生き返らせるから。

第九話 護りたかったもの

僕は第二研究室を後にした。すると、なにやら廊下が騒がしくなっているのに気づく。

あっ！ レンティーノのこと、すっかり忘れてた！ あの短時間の間に色んな衝撃を受けて色んなことに感動したから、僕は一時的にほかの事を考えられなくなっていた。

廊下を走って、僕はレンティーノを探した。すると、レンティーノが必死な形相で、両手に握った銀色の何かを振り回しているのを見つけた。場所は、彼の部屋付近だ。……ちよつと待って。よく見たら、あの手に持っているものは手術用のメスじゃないか。

茶系のスーツには赤黒いものがたくさん付着していて、レンティーノの肌や蜂蜜色の髪にも禍々しい斑模様を作っている。研究員がたくさん倒れて呻いている。

レンティーノの足元で震えながら、既に息絶えようとしている人もいる。それを認識した一瞬、全ての行動を忘れてしまった。考えることも、声を出すことも、瞬きをすることも、息をすることもさえも。

レンティーノが逃げようとした研究員を鋭い目で捕らえ、彼に背中からメスを突きたてた時、僕はやっと声を出すことを思い出した。「レンティーノッ！」

何やってるの、どうしてそんなにたくさん人を刺してるの？

僕は一瞬だけ、レンティーノのことを怖いと思った。だけど意を決して、レンティーノの傍に駆け寄った。レンティーノは一度、僕に刃物を向けようとした。

ぎゅつと目をつぶっていても痛みが降りてこないから、そつと目を開ける。

「ミンイエ……」

消える寸前まで小さくなった、震えた声。レンティーノは僕の姿

を捉え、いつも通りの穏やかな表情に戻り、それからすぐにふらりと後ろに傾いた。

両手からメスが落ちて金属音を立てたのと、レンティーノが研究員の死体の上に倒れたのが同時だった。

僕はレンティーノに駆け寄って声をかけたけど、反応がない。息はしているけれど、多分精神的なショックから倒れてしまったんだろう。すまないと思いつつ、僕はレンティーノの胸ポケットからカードキーを取り出した。

レンティーノが必死の形相で守っていたのは、一〇六八号室のドアだった。そう、ミンとレンティーノの部屋。この中に、レンティーノが壊れてしまった理由がある。僕は深呼吸を一つすると、カードキーを使ってドアを開けた。

前方を見ると、見慣れた蜂蜜色の頭が見えた。体勢的にみると立てひざの姿勢だ。ミンは立てひざで、ベッドの上に突っ伏している。壁際の床に座っているようで、こちらからだと言えぬ。近寄ってみてもミンは起きなかった。

声をかけてみる。名前を呼んでみる。結果は同じだった。

隣に歩み寄ってみると、ミンが何かの瓶を握っていることに気づいた。そつとミンの手からそれを抜き取ってみる。瓶の中には何も入っていない。

ラベルには、睡眠薬と書いてあった。

「ミン？」

慌てて揺り起こそうとしてミンの背中に触れば、感じるのは白衣越しでも解るほどの冷たく硬い感触。

しごこうちよく、って誰かが言ってた。死んだら冷たく硬くなるんだって、誰かが言ってた。誰だったかな、ミンだった気がする。

「ミン？　ねえどうしたの、ミン？」

父さんが、死んだ。

レンティーノの言葉が脳内に響いた。嘘だ。ミンが死ぬなんて、そんなの嘘だ。それも、空っぽの睡眠薬の瓶を握って死んでるなん

て。考えられることなんて、一つしかないよ。

ふと見れば、部屋の隅にぐしゃぐしゃに丸められた紙が落ちていた。もしかしたら、ミンに無理矢理薬を飲ませた犯人が残っていたものかもしれない。そうであってくれたら、犯人を憎むことができるのに。

ミンが自殺したなんて、絶対考えたくなかったから。そんなことを考えながら、僕は紙を拾いにいった。

広げてみると、それはやはりミンに関係したものだった。内容を読んでみる。

——レジュストウルフェルナディアンティーノへ。

ごめんね、僕は死ぬことにした。

睡眠薬は僕が用意した。誰かに飲めって言われたわけじゃないよ。父親らしくなくてごめん。僕は人間としても最低だと思う。

君を置いていくのは本当に心苦しいけれど、僕は君に生きて欲しいからこうするんだ。

僕はもう生きていく気力も、資格も失った。凄く個人的な理由だけど。

パソコンを見れば全てがわかると思う。

ごめんね、本当にごめん。君を殺したくないんだ。

僕は心の底から君を愛していた。

だけど僕みたいな父親失格男なんて、忘れてくれて構わないよ。

だから、さようなら。

どうか助けないで。もう蘇りたくなんてない。

僕の死体は焼却処分して。

大好きだよ、レンティーノ。僕より頼れる人を、他に見つけてね。君には君の人生を満足いくまで味わって貰いたい。

だから、生き抜いて。僕の後を追おうなんて思わないで。

君のしあわせを、いつまでも願ってるから……

遺書はここで終わっている。読んでいるだけでひしひしと痛々しさが伝わってくる遺書だった。ミンはこれをどんな気もちで書いたのだろう。

多分、薬を飲んでからすぐに書き始めたんだ。最後のほうの文字は、読み取るのに苦労するほど震えていた。

ぐしゃぐしゃに丸められた遺書だけど、最初はちゃんと四つ折にされていたみたいだ。線がついていた。だとすると、この紙を丸めて放り投げたのはきつとレンティーノだ。こんなものを読んだのなら、狂ってしまうのだってうなずける。

僕はミンの頬に触れた。血の気の失せた頬に、いつもの笑みが浮かぶことはもう二度とない。そう、二度と。

僕はまた大切なものを失った。気が狂いそうなほど白いこの空間で僕が自我を保って友人を作れたのは、ミンのおかげだった。ミンは恩人だった。父でも、兄でも、友達でもあった。なのに。

僕はパソコンを見た。電源は入れっぱなしにしてあり、センサーバーが起動している。マウスを動かすとスクリーンセンサーバーが消え、デスクトップが表示された。メモ帳が開いてある。研究についての告知、という題がついていた。

内容を読んで僕は愕然とした。だって、酷いんだ。蘇生した子供の発育段階はもう観察をやめにして、解剖してしまおうって言う内容が書かれていたんだよ。

そして、実験の責任者はミン。執刀もミン。そんな風に、決められていた。僕はいてもたってもいられなくなって、ドアを開けて廊下に飛び出した。すると、血塗れの廊下にたたずむ血塗れのレンティーノと目が合った。

「ミンイエント」

レンティーノの顔が、たちまち泣きそうにゆがむ。僕は回りを確認して誰も生存者がいないことを確かめた。騒ぎが大きくなったら困る。

誰もいないことを確認してから、僕はレンティーノを部屋に連れ

込んだ。そして、カードキーをレンティーノに返した。

「私、私はっ、どうすれば！ 父さんを殺してしまった、殺して、わたしが」

自分の髪をかきむしるようにして、レンティーノは叫ぶ。僕はレンティーノの手を握って、髪を離させた。

これ以上、彼が壊れていくのを見ていられない。

「落ちていてレンティーノ、ミンを殺したのは君じゃない」

肩を掴んで揺さぶると、レンティーノは一旦黙った。だけどすぐにまた悲痛な表情を浮かべて、繰り返す。

「ですがっ、何の関係もない人を、私が殺した！ 殺したんです、何人も何人も何人も何人も何人もなに」

「やめてレンティーノっ！」

このままずっと喋らせていたら、それこそ彼は本当に精神崩壊しそうだ。だから僕は、大声で怒鳴ってレンティーノを黙らせた。

目を伏せて震える彼は、自分の身体を抱きしめるようにして荒い息を鎮めている。傍目にも、その両手の爪が肩に強く食い込んでるのが見て取れた。

僕はレンティーノをベッドの端に座らせて、肩を抱いてやってやった。落ち着くまで、ずっと。レンティーノの指から力が抜けて、荒い息が鎮まるまで。

「大丈夫、大丈夫だからね」

僕は精一杯の優しさを込めてそういう。だって、本当に大丈夫だよ。皆洗脳してしまえばいいんだから。

彼が落ち着いたから、肩に回していた腕を外した。そして僕は、パソコンを指差す。あのメモを読んだかどうか聞いてみると、答えは否だった。僕は無言でパソコンに視線を向け、読むように促した。了承してくれたのか、レンティーノは立ち上がって例のメモを読んでいる。僕も立ち上がり、レンティーノの隣に立った。レンティーノは左手で口許を抑えて、おえっ嗚咽を堪えていた。見開かれた両の目から、涙が零れ落ちていく。

僕はその姿を見て、パソコンを見せないほうがよかったのかもしれないと考える。だけどこれはミンが遺言に残したことだから、ちゃんとレンティーノが読まなきゃ駄目なんだ。ミンの全てを知らないといけないのは、僕じゃなくてレンティーノだから。

やがてレンティーノは文書を読み終わったようで、無言でそれを削除した。八つ当たりなのだろうか。それとも、用済みだからだろうか。これ以上見ていたくないという気持ちの表れかもしれない。

どんな理由で削除したのであろうと、僕はそれをとめようと思わなかった。僕だって、大事な人が苦しんだ理由なんていつまでも保存しておきたくないからね。

「ミンイエ、私はもう生きる資格を失いました」

死んだ魚のような目、というのがこれなのだろう。そう思ってしまったくらい、レンティーノは光の宿らない目でこっちを向いていた。生きる資格を失ったって、それ本気で言ってるの？ 遺書を読んだなら、レンティーノだってミンの気持ちを知ってるはずだ。ミンは、レンティーノに生きて欲しいんだよ。

「何を言ってるの？ 君が生きられるように、ミンは死んだんだ」

「貴方に何がわかると言うのですか！」

……初めて出会ったとき、僕の方がこうやってレンティーノに突っかったんだっけ。懐かしいな。僕が激昂してるのに、レンティーノは僕を優しく宥めてくれたね。うん、覚えてる。ちゃんと覚えてるよ。

ミンとその日のお昼に合流した時、学校に行く話も出たね。もう打ち解けたんだね、って驚かれたよね。

なんで、死んじゃったのかなあ。

ミン、僕たちにはミンが必要なんだよ。

「わかるよ、レンティーノ。ミンは僕のお父さんでもあったんだから」

声に出してみたら泣けてきて、僕は泣かないように一生懸命唇をかみ締めながら、顔に手を押し当てた。レンティーノには決して顔

を見られないようにと、僕はちよつと身体をそむけるようにして泣いた。

僕の隣にいるレンティーノも、静かに泣き続けていた。そつと、声もあげずに。

時間だけが、ただゆつくりと過ぎていった。

第十話 崩壊

ミンが死んだ。

葬儀は次の日に行われ、ミンは遺言どおり火葬された。ミンが死んだ日のうちに、研究員の三分の一を下僕にしたからこそできた所業だった。

今日も僕は下僕に命じて下僕を増やし続けた。もうじき研究所の中にいる三分の二の研究員たちが僕の奴隷になる。

誰も逆らうな。誰も勝手な行動をするな。ミンの死後から、僕の中の何かが急速にかわりつつあった。また大切な人を失ってしまったようにと、僕は必死になっていた。

僕はついに上層部の人間にも手を出した。この研究所に僕をつれこんだあのおじさん、最高権力者の次くらいに地位が高い人だったから。

僕は彼を悪い奴だとは思っていなかったから、高度に利用することにした。洗脳装置のプログラムをいじって、表面上は僕に洗脳されてるということを解らないようにしたんだ。だから彼は、一見しただけだと普段どおり。だけど中身は、ほぼ全くの別人になってる。これから彼には、上層部の情報をたくさん持ってきてもらわないとね。きみは、働き蜂なんだから。

僕は昼前から、あるところに向かっていった。そこは、第一研究室。僕の部屋である第二研究室の上階にある。

呼べばいつだって、彼らはきてくれるんだ。どんなに危ないところにも、どんなに遠い場所にも。

彼らの身体には僕の声が刻み込まれてる。いつだって僕だけに従順で、どんなものからも守ってくれる。ドアを開けると、彼らがいる。僕のかわいいしもべたち。

「皆にお知らせがあるよ」

僕は笑顔で語る。話を聞いていない人なんて誰もいない。皆がじ

つくりと僕をみながら、熱心に話を聴いてくれている。

楽しいんだ、とても。僕なしで生きられない人たちが、こんなにいるなんてね。

「今日で、蘇生した人間から生まれた子供についての実験が終わるよ」

にっこりと笑ったまま、僕はそう宣言した。そう、僕はレンティーノを自由にしておけたんだ。これでもう、レンティーノは実験なんかに使われない。

でも……

「では、学校に行くこともありませんね」

レンティーノの第一声がそれだった。第一研究室からですぐ、僕は中庭にいたレンティーノに、蘇生した人間から生まれた子についての実験を中止したということを伝えた。

ただ喜んで欲しくて。ただ『嬉しい』って言って欲しくて。ミンがいなくなった世界で、レンティーノがこれ以上苦しまなくても良いように。

だけど、考えてみれば学校って実験の一環として行っていたものだから、当然やめなければならなくなる。うかつだった。そのことを、僕は全く考えていなかったんだ。

レンティーノは学校がとても好きだった。それは学校に入った当初から全く変わっていなくて、十五歳になった今でもレンティーノは学校に行くのを毎日とても楽しみにしている。その楽しみを、奪ってしまうことになるなんて。まさか僕は、そんな風になるとは思っていなかった。

「卒業、したいよね」

呟いてみると、レンティーノは慌てて首を横に振る。ほら、またそうやって嘘をつく。

本当は学校に行きたいんでしょう？ 解ってるよ、長い付き合いだもん。

「いいえ、別にいいですよ。勉強はハビに習えば良いですし」

「ごめんね」

不自然なくらい明るい声で言うレンティーノだけど、僕は明るい気分になんてなれなかった。

解ってる。レンティーノがミンをなくしてどれほど孤独になったのか、少なくとも他の誰より解ったつもりでいる。

今までレンティーノがどれだけミンのことを慕っていたのか、どれだけ大切に思っていたのか、解っているからこそレンティーノの笑顔が痛かった。

本当は笑っていられるような状態じゃないのに。無理して僕を安心させようとしてくれてるけど、僕は余計に不安になる。

「ミンイエンは悪くありません。私もこの状態では、学校になんて行けませんから」

寂しげに笑うレンティーノ。この状態とは、喪服の状態を指している。つまり彼は、ミンが死んだこの状態で普通に生活するのが無理だって言ってるんだ。僕は何も言えずに俯いた。

ごめんなさい。ミンの火葬を指示したのは僕で、二度と蘇生できないように骨を地中深く埋めるよう指示したのも僕。ミンを慕う意味で、ミンの遺言に従ったんだ。

だけど、それこそがレンティーノからミンを奪うことになってしまったのかもしれない。深く傷ついて、本当は死にそうなほど苦しんでるのに、それでも穏やかに笑おうとするレンティーノがどうしようもなく儚げで、僕は彼がそのうち消えてしまふんじゃないかと錯覚する。

僕は奪って壊してばかり。幸せなものたちの間に入り込んで、壊して、逃げてばかり。僕には人間として生きるための何かが、生まれた時から欠落しているのかもしれない。ああ、それもそうか。僕はあの殺人鬼の子なんだもんね。

気高くすぐに散ってしまう薔薇の花のような、優雅で繊細なレンティーノ。だからこそ、彼は人一倍傷つきやすい人なんだ。僕はそれを解っている。解っていたくせにミンを火葬した。

レンティイーノに『もう一度お父さんをあげる』とは言えなかった。友達が苦しみ続けることよりも、故人の意思を尊重した。どうしていいかわからなかった。だけど僕は結果的に、殺人鬼である僕の父親と同等のことをしてしまった。

僕にとっても大事な人であって、生き返らせたいと思ったミンを、二度と生き返ることができないようにしてしまった。これはレンティイーノに対しての罪。だけどきっとミンを生き返らせたなら、それはミンに対しての罪になる。

「どうぞ。貴方の研究室には、綺麗な原色がないですから」

ぼうつと考え事をしていると、目の前に大輪の薔薇が飛び込んでくる。目の覚めるような真紅。例えるならそれは、血のような赤。

初めて中庭に出た時と同じように、レンティイーノが僕に薔薇の花を差し出していた。あのときは、友情の印として僕はそれを受け取った。だけど、今の僕がこれを受け取ってしまったって良いのだろうか？

僕はもうレンティイーノの友達として最低だ。そしてこの花を受け取ると言うことは、これからも友達として一緒に歩み続けるということだ。

果たして、僕がレンティイーノの隣にいても良いのだろうか。

「私は、実験台になってまで学校に行き続けたいとは思っていません。自分を責めないで下さい、貴方の心遣いはとても嬉しかったです」

柔らかく、傷なんか見せないようにして笑うレンティイーノ。どうして隠そうとするんだろう。僕は、レンティイーノの友達じゃないの？

……友達じゃないか、だって僕はミンを焼いてしまったから。直接的にやったわけじゃなくても、手下の手で焼かせてしまったから。どうしてレンティイーノは、そんな僕を赦そうとするんだろう。こんな僕、赦される価値なんかない。一生恨まれて当然のことをしたんだ。

「レンティ」

「ミンイエ、レンティイーノ。もう晩ご飯」

遠くから叫ぶハビの声で、僕の話は流される。レンティーノは少しためらい、薔薇の花を悲しげに見つめる。やがて、彼の瞳に何らかの決心の色が浮かんた。

僕が何か声をかけようとする、彼はそれをぞんざいに投げ捨てた。一瞬、言葉がでなかった。薔薇に限らず植物なら何でも大切に、切った花は必ず花瓶に挿していた彼が、あろうことか一番好きだと言っていた薔薇の花を投げたのだ。

レンティーノはそのまま目を伏せて、先に行ってしまった。僕はどうするか迷った挙句、薔薇の花を拾い上げた。投げ捨てられた衝撃からだろうか、花卉が何枚かとれてしまっている。硬いレンガを敷いた地面のせいで、残っているしなやかな花卉にもいくつもの傷がついていた。

その花はとても痛ましく見えた。まさしくそれは、レンティーノの姿だった。美しく優雅だけど、傷だらけの薔薇の花。

僕はその花を、花壇の花の間にそっと寝かせた。放置しておきなくなかった。何となく、レンティーノを見捨てるみたいで嫌だったから。

ゆっくり歩いて、中庭から研究所の中に入る。そのままのろのろと歩き始めると、誰かの背中にぶつかった。顔を上げると、それは紛れもなくレンティーノだった。

「ミンイエ」

「……なに？」

名前を呼ばれたから返事をした。ただそれだけのことで、レンティーノの背中が微かに震えだした。

廊下の真ん中。この時間帯は人通りがすくないけれど、それでも決して誰も通らないと言うわけではない。僕のしもべ以外の人がここを通ったら、なんとなく気まずい。

震えるレンティーノの隣に寄って、僕は彼の顔を覗き込む。

「私のことは、もう嫌いになりましたか」

いつもと同じ、柔らかで優しい笑みがそこにあった。だけどその

笑みとは裏腹に、レンティーノの瞳は潤んでいる。涙を堪えるためにか、喉の辺りがひくりと動いた。

「父さんは、私の前から永遠に消えてしまいました。その上、貴方まで私の目の前から消えてしまうのですか」

優しく穏やかな声が、涙を含んで震える。僕はレンティーノを見てあげて、首を横に振った。

でも、ちゃんとこう言った。

「僕はミンじゃない。ミンみたいに、君の心のよりどころになんてなれない」

そうだよ、僕はミンじゃない。レンティーノが彼の代わりを僕に求めているのなら、残念だけどそれは無理なんだ。

誰もミンの代わりなんてできない。あんなに優しくて飄々とした、少年じみているくせに父親くさい研究員なんてほかにいるはずがない。

だけどレンティーノは、僕のシャツの袖を掴んでこういった。

「貴方がいて下さるだけで良いのです、どうか私を一人にしないで下さい」

解った、解ったよ。僕にも同じ気持ちがある。寂しいんだよね、レンティーノ。

僕がこの世で信じられるのは、レンティーノとハビとマーティンの三人しかいない。あの世に行けばミンとリィにあえるけど、現世には三人しかいないんだ。

他の人は信じちゃいけない。だって裏切られるから。だけどこの三人なら信じてもいい。だって彼らも、何度も酷い裏切りにあっているから。

それに僕は、レンティーノたちにだったら裏切られてもいいかもしれないと思うことがある。本気で信じてる人だから、裏切ったりしないって言う確信もある。

不安げに僕の袖を握り締めるレンティーノに向かい、微笑んで僕は言った。

「わかったよレンティーノ。だから、僕も独りにしないで」

リィを失った直後の、あのとてつもない喪失感がよみがえってくる。これ以上大切なものは失いたくない。切実にそう思う。

だから僕は、素直に自分の気持ちを言葉にした。レンティーノは僕をみてほっとしたように、いつもの翳りの無い笑みを浮かべてくれた。

僕は価値のある人間じゃない。今でもそう思ってる。だけど、君に安心してもらえるためにちょっとは価値のある人間になってみようと思う。

僕も誰かの支えになれるように、がんばってみる。最後は自ら大切な人を守ろうとして犠牲になった、ミンのように。

ミンほど立派な人間にはなれないかもしれない。だけど、ちっぽけな僕にもきつとできることがあるはずだから。

——ねえ、リィ。僕は正しい？

たとえ間違っているとしても、リィが道を教えてくれることは今は無いけれど。

だけど僕、間違っているでもいいと思うんだ。僕を頼ってくれる誰かがいる。それがすべてなんだ。

だから、もう少しだけ見守っていて。

すぐにこの世界に、君をつれもどしてあげるから。

第十一話 極秘計画

それから一年ぐらいいが経って、僕は十六歳になっていた。僕は誕生日を祝ってもらえた経験が無いから、適当に同じ年のレンティーノに合わせて考えただけなんだけど。

現在この研究所内にいる研究員たちは、ほぼ全員僕のしもべになっている。例外として、僕の友人たちは除く。だって、友達だから。それから、最高権力者とその腹心たちもしもべにできなかった。どうしても捕まってくれないんだよ、何故か。これって、僕が直に洗脳しなきゃ駄目ってことなのかな。

ひとつ不可解だと思うのが、最近になって最高権力者たちが妙な動きをしていると言うこと。これは、あの“働きバチ”さんが持ってきてくれた甘い甘い情報。

働きバチさんの話によると、最高権力者は僕の存在をだんだん疎ましく思うようになってきたらしい。まあ、僕も嫌われて当然だって自分で思うからね。

それにしても、最高権力者の動きは本当に不可解。腹心と一緒に最上階の研究室に引きこもって実験をしてるらしいんだ。何の実験なのか解ればよかったけど、最高権力者がやけに神経質になって腹心以外を研究室に入れようとしなくて、働きバチさんはそこまでの情報しか持つてくることが出来なかった。

でも、良い情報をもってきてくれたから褒めてあげた。働きバチさんは凄く喜んで、また情報収集に向かった。単純でかわいいね。それでこそ僕のしもべだ。

僕は第二研究室に向かった。もう眠くなったから。ぼんやりしながら歩いていると、部屋の前についた。カードキーでドアを開け、部屋の奥へ向かう。

研究室の一番奥の壁際に、僕のベッドがある。そして、ベッドの周りにはたくさんのおもちゃ。

本当にいろいろな芸術品があるよ。僕が作ったなかで一番気に入っているのは、実験に失敗したせいで背中から夥しい数の眼球が見え隠れしている、奇形児のホルマリン漬けかな。

え、気持ち悪い？ 何言ってるの、芸術的じゃないか。気持ち悪いなんていうより、むしろ美しいよ。

僕のコレクションはここ一年辺りで爆発的に増加した。でも、いくらコレクションが増えてもリイが一番綺麗だっていうことに変わりはない。

今はコレクションを増やす手を止めて、蘇生の実験についてのデータを探しているところ。蘇生の実験の責任者は最高権力者になっていたから、彼が全部のデータを握っていたんだ。

だけど彼は最上階で引きこもっているから、誰もそのデータを持って来ることができない。彼さえ洗脳できれば、すぐにでもリイを蘇生できるのに。今の僕は彼にかなり警戒されているから、「データちょうだい」なんて言える筈もないし。

焦りと苛立ちを隠せない。早くあの人を洗脳しなきゃ。だって、もうリイの命が止まってから六年もたってるんだ。

何で何の進展もないまま六年もたったのか、未だに不思議で仕方がない。そして、僕はそのことに怒りを感じている。あの最高権力者、結局六年間何もしてくれなかった。僕を実験台として使うことはあった、僕の願いを聞いてくれることはなかった。

そうだよ、あの最高権力者だってマーティンを嫌った研究員たちと同じ。所詮最初から、僕を実験の目的で拾って実験の目的で飼って、一度だって人間としてみてくれたことなんて無いんだと思う。

僕は水槽の横に手を這わせ、スイッチを探り当てた。そして、ベッドの上に仰向けになった姿勢のまま電気を消した。

光のない空間を、静寂が満ちた。僕は電気を消した後の研究室がとても好きで、とても嫌い。

静かな空間は好き。これ以上の黒はないだろうと思うくらいの闇色も好き。だけど、この静寂と闇は否応もなく僕が孤独だということ

とを認識させてくれるから。だから、嫌いでもある。

そこまで考えたとき、自分の名前とこの研究室は同じようなものなのかもしれないと僕は唐突に思った。大好きだけど、大嫌い。

シーツを手繰り寄せて、僕は身を横向けにして丸まった。そのまま目を閉じる。だけど、ふと光を感じて目を開けた。勢い良くベッドから跳ね起き、出入り口を見る。わずかに開き、そして閉じたところだった。

僕はしもべを呼んだ。そして、壁に手を這わせて電気をつける。とたんに僕は悲鳴を上げた。明るくなった瞬間に、目の前に最高権力者がいたのだから。

最高権力者はポケットから四角い箱状の物を取り出した。箱から伸びた二本のコードの先に、テープが取り付けられている。テープ付のコードをみたとたん、僕は唐突にその箱の正体を悟った。

おそらくこれは凄く簡略化された洗脳装置だ。そして彼は、僕を洗脳して僕の手下を全員のつもりだと思ってるんだ。彼が最上階の研究室で引きこもっていた理由は、これを作るためだったに違いない。

僕は彼から逃げて、何か武器になるものはないかと探した。そのとき、僕のしもべたちが来てくれた。しもべたちは最高権力者を取り囲み、押さえつけて外へ連れ出していく。

「皆、聞いて！ その人を、一〇九六号室に幽閉して！ カードキーはこれだから」

働きバチさんにカードキーを渡して、僕は全員を部屋から出してまたベッドに転がった。心臓が激しく鼓動を繰り返し、全身から嫌な汗がふきだしているのを未だに感じてる。

怖かった。殺されるより酷いことをされるかと思った。でも、もう大丈夫。そう思い、僕は目を閉じる。目を閉じてからも、なかなか寝付けなかった。

何か音はしないかと、聴覚が異常なほど敏感になった。自分の鼓動や呼吸の音ですら、煩く感じて眠れない。どうにか安息できない

ものかと、辺りに手を伸ばす。携帯電話に触れた。

これは、下僕に頼んで調達してもらったもの。画面を見ると、レンティーノとハビとマーティンと一緒にとった写真が待ち受けに設定されていた。

ふと気づくとハビからメールが来ていて、ちょっと安心した。明日の朝、中庭で待ってるって内容だった。ハビには見えていないことを解っているけど、僕は頷いた。最高権力者の来襲から数時間たった頃、ようやく僕は眠ることが出来た。

次の日の朝、目覚めてすぐに周りを確認した。昨日と何ら変わっていない状態に安心し、僕はベッドからそっと抜け出す。今日も一日がはじまる。

身支度を済ませてから外に出て、すれ違う下僕に笑顔を送る。向かう先は中庭だ。僕は歩きながら、ハビは一体何の用で僕を呼んだのだろうと考えた。

歩き続けること、数分。中庭につづく扉についた。一步外に出てみれば、朝日が眩しくて目がくらんだ。ハビはもうここにきていて、僕を見てにこりと笑った。

「おはよう、ミンイエーン」

「うん、おはよう。どうしたの？」

いつもどおり穏やかに笑うハビに向かって、僕も笑みを返す。ハビがベンチに座ったから、隣に座った。

どうしたの、と訊ねてからハビは曖昧に笑うようになった。こういう場合、ハビは大体バッドニュースを伝えてくれる。今までの経験からすると、そうなのだ。

しばらく無言だったハビは、やがて何かを吹っ切ったように明るく言った。

「マーティンからきいた情報を伝えようと思って」

うん、マーティンからきいたバッドニュースね。一体どんなことなんだろう。僕は無言でハビを促すと、足を組んだ。

体格の差からして違うから比べたりする意味がないけど、ハビよ

り何十センチも短い足をみてため息をつく。東洋人は背が低くて足が短いなんてよく言うけれど、それは僕にのみ適応される言葉だと思う。

「イノセントIIエクルストンのことはきいてる？」

「うん、マーティンの仇だね」

低く穏やかな、いつもどおりのハビの声。僕は顔を上げて、ハビを見る。するとハビは、前方をみつめる。彼にならって僕も前を見ただけ、特に何も無い。

「帝王は誰だか解る？」

相変わらず前を向いたまま、ハビは言う。僕はそんなハビの横顔を見つめた。いつもは伏し目だけど、今のハビはちゃんと目を開けている。ただ目を開けているだけ。それだけでも、ハビにしては珍しい表情だ。

僕は帝王という単語を頭の中で反芻し、ふと思い出した。小さい頃、リイに聞いた覚えがある。世界を統べることを目標として、悪い手先を沢山集めている『帝王』という者が、世界の果てにある孤島に住んでいるんだと言うことを。

「昔聞いた。この世界に災いをもたらして、秩序を壊す人でしょ？」
リイに聞いたことをそのまま口に出してみると、ハビは頷いた。そして彼は視線をこっちに向ける。ちゃんと開かれていた目が再び伏し目になった。

僕がハビを怪訝そうに見れば、ハビは衝撃的な発言をした。

「彼が君に会いに来るそうだ」

ハビの言葉に耳を疑った。帝王が僕に？ 何かの間違いだと思うよ。

何で世界中の人間から恐れられている彼が、わざわざ僕なんかに会いにくるのだろう。実在するかどうかさえ解らない人物が、何のために。考えれば考えるほど解らなくなり、僕は縋るようにハビを見上げた。

「どういうこと？」

疑問を声に出してみれば、ハビは真面目な顔で僕をじっと見た。僕もハビを見返して、生唾を飲み下す。緊張してきた。

「イノセントⅡエクルストンの仲間が、マーティンの人工魔力に気づいたんだよ。それから、洗脳装置のことも知ったみたい。今日来るって」

どうやって？ とは聞けなかった。だって、相手は伝説のような人だから。リイの話によれば、その人はマーティンみたいに魔法を使う。

何でよりにもよって今日なんだろう。今日になって初めて彼が来ることを聞かされたから、心の準備がまだ足りない。明日以降だったら、完全防備で彼を迎えることができるかもしれないのに。

「僕、殺される？」

不安に思っただけ聞いてみたら、ハビの大きくて重たい手が僕の頭の上に乗った。出逢ったときにくらべたら、サイズが一段と大きくなったハビの手。

今も昔も変わらない包容力がある父親的なその手は、昔と変わらず僕の髪をくしゃくしゃと撫でた。ハビは何でか知らないけど、人の頭を撫でるのが好きなんだよね。

「大丈夫だよ、そうなりそうになったらちゃんと助けに行くからね」その言葉で、胸にわだかまっていた不安がすーっと溶けていくのを感じた。何だか胸にしみる言葉だった。

心の中にスムーズに浸透していった、今一番欲しかった言葉。ハビはそれを僕に与えてくれた。

「ハビ、ありがとう」

にこりと笑ってそういえば、ハビもほっとしたように笑った。僕はハビと別れて中庭を出て、部屋に戻る。

部屋に戻ってひとりになったとたんに、また孤独感と不安が復活した。緊張のせいで食欲が失せる。胃をぎゅっと締め上げられるような感覚に襲われて、僕はベッドに突っ伏した。

怖い。

リーの話によると、帝王の孤島に向かった人間は誰も生還してないらしい。それって要するに、島に向かった人間は皆帝王に殺されちゃってるってことでしょ？　だとしたら僕、やっぱり帝王に殺されるかもしれない。

もう嫌だ。このまま消えてしまいたい。帝王に会わなくてすむ方法があるのなら、何としてでも実行したい。どうしよう、どうしよう、頭の中でその言葉だけが回っている。

「ミンイエ、起きていますか」

レンティーノの声がしたけれど、返事をする気力すらなかった。僕は喉にも締め付けるような感覚をおぼえて、ベッドの上に身を丸めるようにして縮こまる。

この部屋に閉じこもっていれば、帝王も入ってこないかもしれない。そう考えて、僕は絶対に部屋からでないようにしようと心に決めた。無論、ドアを開けるなんて無理だ。帝王が入ってきちゃうかもしれない。

僕は、レンティーノの言葉を無視した。けれど、僕はドアを閉め忘れていたんだ。レンティーノが入ってくる気配があった。

第十二話 孤高の最高権力者

ベッドの傍に人が寄ってくる気配があつて、僕はそつと首だけそつちに向ける。警戒はしていたけれど、入ってきたのが帝王じゃないことは解っていた。だって、微妙に薔薇と消毒液の香りがした気がしたから。

「起きてください、ミンイエン。行きましょう」

悪戯っぽく笑ったレンティーノに引っ張られ、僕は半ば強制的にベッドから降ろされた。

「どこに行くの？」

レンティーノに手を引かれながらそう訊ねてみると、彼は笑いながら歩調を緩めた。

廊下には誰もいない。それにより、また孤独感が戻ってくる。押し寄せてくる不安の波に必死で耐え、僕はレンティーノを見上げた。

「朝ごはんですよ。貴方、まだ何も食べていないでしょう」

至って普通のその声。平常どおりで、何も変なところなんてないその声。僕はそれを聞いて少しだけ安心したけれど、やっぱり帝王が来るのが怖かった。

レンティーノは、多分何も知らないんだ。僕が抱えたこの不安の理由を、きつと何も知らない。だからそんなに、穏やかでいられるんだ。

「レンティーノ、帝王のこと知ってる？」

どうしようもない不安に締め付けられていた僕は、レンティーノにこの気持ちを聞いてもらおうと思った。

そして口に出してみると、レンティーノは飄々（ひょうひょう）とこう言った。

「ええ、知っていますよ。会うのですよね」

少なからず、僕は驚いたし戸惑った。だって、レンティーノはこのことを知らないと思った。ハビはマーティンから聞いた情報を、

僕にだけ伝えてくれたと思っていたから。

ということは、もしかして。皆は僕が帝王と会うことを、解っていて言ってくれなかったのかな。何それ、どういうこと？

「何で言ってくれなかったの？ 知ってたんでしょ？」

ちよつと裏切られた気分になって、僕は八つ当たり気味にレンティーノにそういった。だって、知っていたくせに皆で黙っているなんて。酷いよ。あんまりだ。

「あまりに衝撃的なバッドニュースでしたから、どうやって貴方に伝えるべきかハビとマーティンと三人で議論していたのですよ」

長い議論の結果にハビに伝えてもらうことになったとレンティーノは言い、僕を見下ろしながら軽く首をかしげて見せてくる。その態度が、言外に「何か問題でもありますか？」と告げているように感じた。

問題、大有りだよ。だって僕、殺されるかもしれないんだよ。相手は帝王だよ？ 伝説に等しいくらい実在感がない人なんだよ？ 怖くない方がおかしいよ、それに何もされずに済む方があり得ないと思う。

「何でそんなに平然としていられるの？ 僕、殺されるかもしれないのに」

思わず食って掛かったけれど、レンティーノはいつものようにそんな僕を軽くかわして穏やかに笑う。

いつもそうだ。いつもこうやって、僕はレンティーノの笑顔にうまく丸め込まれてしまう。

僕が睨みつけるようにしてレンティーノを見ると、彼は笑顔のままこう言った。

「貴方を信じているからですよ」
信じている。この言葉は魔法の言葉だ。少なくとも、僕はそう思った。

たった一言こういわれただけなのに、弛んでいた足元が急にしっかり固まったような気がした。

僕はレンティーノを見上げて疑問の視線を送った。どうしてそう思うの？ そうたずねようとした矢先、レンティーノはそっと口を開いた。

「私は、貴方が大丈夫だと信じています。ですが、もし万が一のことがあった場合は私たちを呼んでくださいね。私達が、貴方をちゃんと護りますから」

僕は頷いて、笑った。レンティーノはいつも、僕の求めている優しい言葉をくれる。

レンティーノやハビには随分と元気付けられた。彼らに会えていなかったら、僕は帝王から逃げるために最上階から飛び降りたりするような人間になっていたかもしれない。だけど、彼らがいてくれるから自分をちょっと大事にできるようになった。

レンティーノやハビ、それからマーティンには本当に感謝してる。彼らがいるから今の僕があるんだからね。

僕とレンティーノは、一階にある食堂に向かった。そこで朝ごはんを食べて、暫く談笑する。話は弾んで、読書の話題になる。後からレンティーノに本を一冊貸してもらえることになった。

僕とレンティーノはそのまま食堂で別れ、僕は第二研究室に戻った。研究室に戻ってすぐ、僕は仕事に取り掛かる。今日はとても気分が良いから、パソコンが起動するまでの数分間がいつもより短く感じた。

まず最初にメールをチェックする。何もきていなかったから、僕はプログラムの調整を始めた。“分解装置”と呼ばれた機械の調子が悪いつて話を聞いたから、プログラムのチェックを試みる。思ったとおりいろんなバグがでてきたから、バグを取り除きつつプログラムの改良をした。

“分解装置”だけじゃなくて、いろんな装置が不具合を訴えだしたから仕事は増える一方。最近の僕の仕事は、こんな感じのものが多いな。

これが終わったら、すぐにあの最高権力者に会いに行こう。今頃

きつと出して欲しくて暴れてるに違いないよ。そんな無様な彼を見るのが、楽しみで仕方ない。僕を洗脳しようとしたあの人が、僕に洗脳されようとしているんだから。彼の第一声は何なんだろう？早くきいてみたい。

楽しみだ楽しみだと思いつながらやっていたら、意外と早く仕事が片付いてしまった。僕は、初めてミンやレンティノーと出逢ったあの部屋へと向かう。あんな大事な場所によりにもよってあの人を幽閉するなんて、僕も判断力が鈍っていたと今更思う。

でも彼は、あの白いだけの空間に閉じ込められた僕の気持ちを、ちよつとは解ってくれるかもしれない。まあ、解ってもらえなくて別にいいんだけどね。どうせ洗脳しちゃうから。

僕はカードキーを使って一〇九六号室の扉を開けた。久しぶりにくぐる、初めて貰った部屋のドア。昔から僕はリイと同じ部屋で過ごしていたから、この部屋が僕にとって本当に初めての一人部屋だった。

部屋の奥を見渡してみると、ベッドの上に座り込んだ最高権力者と目が合った。

「お目覚め？」

「私をとらえてどうするつもりだ」

何だ、つまらない。普通すぎるよね、こんな第一声。もっと暴れて、叫んで、壊れてくれれば面白いのに。

僕は彼を見下ろして、にやりと笑ってあげる。そう、初めて出会ったとき彼が浮かべた笑みと同じ笑みをおくってあげたんだ。

「率直にいうよ、パソコン貸して。リイの蘇生を早くしたいんだ。データが欲しい」

単刀直入に本題から言ってみれば、最高権力者はいきなり笑い始めた。けたたましいという表現が似合うくらい、大声を張り上げて笑う。

そしてやっと笑いがおさまってきた頃に、彼は僕を見上げながら嘲笑を浮かべた。

「ふん、蘇生か。あんな話を信じて六年間も生きてきたのか」

その言葉に、僕は体じゅうの血を凍らされたような錯覚に陥った。何、それ。どういうこと？

「できるわけがないだろう、六年もたった今。常識で考えろ。ココを使え」

自分の頭を指差しながら、最高権力者はなおも嘲笑を浮かべ続ける。僕は足元がふらつくのを感じて近くの壁にもたれかかった。

最高権力者は、ポケットに手を突っ込んだり出したりという無意味な動作を繰り返しながら僕から目をそらした。そして再び狂ったように笑いだし、僕にあざけりの目を向ける。

「死後六年も放置したんだ。生き返るわけがないだろう、馬鹿馬鹿しい」

狂って欲しいと思った。壊れて欲しいと思った。叫んで欲しいと思った。だけどそれが現実になった今、僕は酷くショックを受けていた。

最高権力者は狂った。だけど、衝撃的なことを何度も何度も吐き捨てた。馬鹿じゃないのかとか、生き返るはずがないとか。何度も何度もそう言って、何度も何度も笑って、彼は何度も何度も僕を嘲った。

「嘘だ！」

笑い続ける最高権力者を黙らせるために、僕はありったけの力を込めて叫んだ。そして、最高権力者の胸倉を掴み上げる。そのまま殴ってしまったかと思ったけれど、ふと思いとどまる。

最高権力者は泣いていた。顔をゆがませて、喉を震わせて、両の目からとめどなく涙を流して。僕は拍子抜けして、最高権力者の胸元を解放してしまう。

彼はベッドの上に崩れ落ち、しゃくりあげて泣いた。何だか物凄く悪いことをしてしまった気がして、けれど悪いことをしたのは相手も同じだと考えて、僕は途方にくれた。

「データが欲しけりゃ自分で研究してみろ。私が長い間必死に築き

上げてきたものを、ことごとく破壊しおって！ 私が二十年もかけて集めた世界中の研究員をお前は盗んだ！ 私の大切なものを、私の全てを、お前はっ！」

泣き喚き、自分の膝を自分の拳で強く殴りつける最高権力者。彼が泣き叫んで喚いて自傷に走っているところを見ても、僕は嬉しいとか良い気味だとか、そういう感情を抱けなかった。

気づいたんだ、僕がしてしまったことに。だけど、約束を破った最高権力者を赦したくも無くて戸惑う。たった今リイが生き返らないと告げられて、絶望すら感じていたのに。この男を殴りたくなかったのに。

なのに僕は、なぜか今になってこの最高権力者のことを可哀想だっと思ってる。

「ははっ、もう良い。全てお前にくれてやるわ」

涙でぐちゃぐちゃになった顔に再び狂氣的な笑みを浮かべて、最高権力者はポケットから四角い箱状の物を出した。これは、リモコン？

何をするつもりなのか解らなかったけれど、僕は最高権力者からそれを取り上げようとした。しかし。

「あばよ。私が苦しんだ以上に、貴様が足掻くがいい」

言葉と同時に、彼はそのリモコンにたった一つだけついていたボタンを押した。とたんに、上の方の階で物凄い爆音が轟いた。激しい振動で、立っていられなくなる。

「はははははは！ 全てくれてやる、全身で受ける！」

轟音の中で、最高権力者が声を張り上げて笑う。耳障りな轟音の中に、また耳障りな音が増える。

僕は必死に踏ん張って、ぐらつく床の上で倒れないように自分を支えた。そして、彼の手を引っ張った。

「何無茶言ってるの、逃げなきゃここ潰れるよ！」

ここで人が死ぬのは嫌だった。ここは僕とレンティーノとミンの思い出の場所だから。その素晴らしい思い出に、最高権力者の最期

の場所なんて嫌なものをプラスしたくないんだ。

「私はこの研究所と運命を共にする！ 逃げたければ勝手に逃げるがいい」

僕はもう少し粘っていたかったけど、はがれた天井が肩を直撃してよろめいた。床にはいつくばった姿勢で、彼を見上げる。

そして彼が再び何かいいかけたそのとき、真っ白な天井がはがれて最高権力者の頭を直撃した。彼は最後の最後まで孤高だった。最高権力者と名のつく者に相応しい、達観した笑みを浮かべて彼は倒れた。真っ白なベッドシートに、大輪の薔薇を思わす真紅の染みができる。

僕は、しばらくのあいだ呆然と彼を見ていた。だけど、鳴り響く轟音にはっとする。こうしてはいられないと思い、僕は肩を押さえながらくると踵を返した。

特殊ライトが壊れてしまったのか、白い壁にはちゃんと扉が見えた。僕は体当たりでその扉を破る。振動の影響で扉が大きくひしゃげていたから、僕のような力のない人にも簡単に扉を破ることが出来たんだと思う。

僕はふらつきながら、歩き続けた。第二研究室に向かう。だって、そこにはリイがいるんだ。もしもリイの水槽が割れてしまったりしたら、僕は立ち直れない。

「ミンイエーン！」

僕の名を叫ぶ声が聞こえた。振り返ると、マーティンとレンティーノが廊下の向こうから走ってくるところだった。

二人は崩れかけた天井を見て、上手く落下物から身を守りながら僕の両隣に来てくれる。

「何があった、言いな」

マーティンの声で、僕はかなり安堵した。

「最高権力者が、上の方の部屋を遠隔操作で」

理由を簡略化して話してみると、落ちてくる瓦礫がれきから僕を守ってくれながら、レンティーノがマーティンを見た。

「爆破でしょうね、これは」

「解ってる。ミンイエ、俺が倒れたらお前のベッド貸しな」

レンティーノのあの一瞥が合図だったのだろうか。マーティンはそっと目を閉じて何か呟いた。

今、何が起こったのか僕には理解できなかった。轟音も振動も瓦礫が崩れる音も、一瞬にして全てが止まったのだ。一瞬、自分が死んだから全て止まって見えたのかと思った。

だけど隣のレンティーノがふらついたマーティンを支えたから、これが現実に行き起きていることなのだと悟る。

「ミンイエ。急ぎましょう、リイシュイさんのところへ」

そう言いながらマーティンの腕を自分の肩に回して、レンティーノは走り出す。僕も彼の隣を走った。僕は第二研究室に駆け込み、息を切らしながら部屋の奥まで進む。

ベッドの周りを見て、僕は心臓を鷲掴みにされた気がした。飛散した硝子の欠片や、潰れてしまった芸術品。床に流れ出た保存液。僕が作った芸術品の殆どが壊れてしまっていた。でも、奇跡的にリイは無事だった。ちょっと安堵して、僕はリイの水槽に触れた。

しばらくそうしていたけれど、僕は芸術品の成れの果てを、そっと手で拾い上げた。冷たく濡れたその胎児の身体には、もとはなかった裂傷や切傷が沢山刻まれていた。

遅れて僕の部屋にたどり着いたレンティーノは、まず眉根を寄せた。そして、僕の隣に歩み寄ってきた。じやりつ、と硝子の欠片を踏みつける音がする。彼の肩を借りてぐったりとしているマーティンは、見たところ完全に意識を失っていた。

「このままでは彼が持ちません。手術用の寝台に寝かせておきますから、その間にベッドを何とかしておいてくれませんか？」

レンティーノの指示に僕が頷くと、彼は部屋の隅にある手術台にマーティンを寝かせに行った。

あの寝台は長いこと使っていない。でも、必要になるときもあるから処分せずにとっておいてあったんだ。正解だったかな、とって

おいて。

僕はベッドのシーツを剥ぎ、硝子の欠片を叩き落とした。だけど小さい欠片が取りきれないだろうから、このシーツは使わずに別のものを使うことにする。

換えのシーツをかけ終わった時、レンティーノがこっちに来てくれた。そして、床に散乱した硝子の欠片や潰れた芸術品を拾い上げる。

「詳しく聞かせてくれますか？ 貴方と最高権力者の間に、何があったのか」

半分に割れてしまった水槽の中に硝子の欠片と芸術品を入れながら、レンティーノは言った。僕はそれには答えず、廊下に出てしもべを呼んだ。そして、レンティーノが片付けてくれている割れたホルマリン漬けを代わりに片付けさせた。

床もベッドも綺麗になったところで、マーティンを僕のベッドにうつす。そこでやっと、僕はレンティーノに話を聞かせた。

彼は長い話に付き合ってくれた。真剣に話を聞いてくれた。そして、聞き終わってすぐにこう言った。

「本人に『くれてやる』って言われたんですよね。ならばもう、貴方が最高権力者に対して罪悪を感じる必要はないと思います」

この言葉を聞いたとき、僕はきつととても間拔けな顔をしていたと思う。そう、多分泣きそうな顔をしていた。

だって、凄く嬉しかったし安心したから。レンティーノが優しい言葉をくれるだけで、どす黒くよどんだ気分だって一瞬で純白に変わる。

「問題はマーティンですよ。早く意識が回復すると良いのですが」ベッドに仰向けに寝ているマーティンを覗き込んで、レンティーノは心配そうな顔をした。僕はレンティーノを見て、それからマーティンを見た。

辛うじて息をしているマーティンだけど、目を閉ざしたまま殆ど動かない。寝返りも打たないし、腕や足を動かしたりもしない。な

んだか、睡眠薬を大量に飲んだミンを見つけてしまったときのことを思い出してしまう。たぶん、レンティーノも同じことを思っているんじゃないかな。

「マーティン、大丈夫かなあ」

このままマーティンが死んでしまったらどうしよう。いつも僕のことを弟のように可愛がってくれて、信頼してくれて、守ってくれたマーティンがいなくなるなんて。

もうこれ以上誰も失いたくないんだ。どうして皆、僕の元を去っていくのだろう。悪いところがあるなら何処だって直す。何だっにする。だからもう、二度と僕の大切な人を奪わないで。

僕はやるせない思いに、両の拳を握り締める。力を入れすぎた拳がふるふると震えているのが自分で解る。と、その手をレンティーノが優しく包んでくれた。驚いて顔を上げると、レンティーノはそっと微笑んでいる。

「彼は、研究所の崩壊を止められるのは自分しかないと言っていました。そして、強力な魔法を使ったのですよ。ですからきっと、今のマーティンは心も身体もつかれきった状態なのでしょう。疲れているだけですから、命に別状は無いと思います。そう信じましょう」

大丈夫です、マーティンは死にませんよ。そう何度も繰り返すレンティーノ。僕はマーティンを覗き込み、それからレンティーノを見上げた。レンティーノを信じよう。マーティンは無事だと信じよう。

やがてレンティーノは僕から手を離し、マーティンの布団を胸の辺りまでずりあげてから自分の部屋に戻っていった。僕はマーティンをじっと見つめ、それから彼に笑顔を向けた。

早く元気になってくれると良いな、そう思いつつ部屋の入り口の方を振り返って僕は叫びそうになった。

部屋の入り口に、いるはずのない人間がいた。

第十三話 来客

だけど僕は、その人の持っただならぬ気配をすぐに見抜いた。だって、見抜こうとしなかったって否応もなく感じるんだ。

その人は全てにおける統率者だろう。王者っぽいというか、独裁者のな何かを持っている。何というかその人からは、絶対に逆らってはいけないようなオーラが出てるんだ。逆らったら容赦なく殺されてしまいそうな、そんな気がする。

その人は僕に背中を向けていた。だから、まず最初にその人の顔を見て驚くということはなかった。代わりに、僕はその人の髪を見て驚いた。

長い、とても長い髪。こんなに長い髪の人なんて、歴史に出てきた人くらいしか知らないよ。

そして何より驚いたのは、その髪の色。皇帝紫だったんだ。マーティンのような青色でも驚いたかもしれないけれど、こんな髪の色なんて見たことがなかった。ただひとついえることは、それがとても綺麗だったということ。

つややかに光をはらむその髪は、無造作に、それでいて整然とふくらはぎの辺りまで伸ばされている。

その人は物凄く長い髪をしているけれど、おそらく男性だと思う。腕や足、それから肩の感じが何となく女性らしくないから。この人、一体どうやって入ってきたんだろう？

そう思った瞬間に、その人は皇帝紫の髪を翻してこちらに歩み寄ってきた。白磁の肌に、爛々（らんらん）と光る金色の目。獲物を狙う蛇を髣髴（ほうふつ）とさせる目だ。

彼は、恐ろしいくらいに端整で美しい顔立ちをしていた。すっきりとした輪郭に、通った鼻筋。ふたえの瞼。それは何故か、毒々しいぐらいの美しさだった。

射すくめられたように錯覚するほどの眼光の鋭さに、僕は生唾を飲み下す。帝王は何故か黒く長い爪をしていて、今にもその爪で切り裂いてくるんじゃないかと思うほど物騒な目つきで僕を眺め続けていた。

「どこから出てきたの」

ともすれば敬語を使いそうになってしまいが、僕は確信していた。この男が帝王だ。だから、下手に出てはいけない気がする。僕はこの人の言いなりにはならない。それを、アピールしてやらなくちゃ。

「無礼者め。言葉を改めよ」

「人の部屋にノックもなしに入り込む人のほうが無礼だよ」

深く響くバリトン・ボイス。心に直接響いてくるようなその声で『無礼だ』って怒られて、本当は怖かった。だけど何故か、僕は果敢にも帝王に口ごたえしていた。

殺される！ そう思っていたんだけど。

「……うむ、成る程。そなたの意見にも一理ある」

何と帝王は、僕の意見に納得してしまった。えっ、帝王って意外と紳士？

僕は手持ち無沙汰になり、適当に話題を探して帝王に話しかけた。

「髪、邪魔そうだね。切ったら？」

「そなたの前髪の方が邪魔であろう」

うわ、何で僕らこんなに普通に会話してるんだろう。殺されるって言う危機感がだんだん薄まってきたように思う。だけどやっぱり、帝王は相変わらず触れたら殺されそうなほどの鋭い眼光で僕を見やっていた。

世界で恐れられる帝王は、確かに物凄い威厳の持ち主だった。だけど僕も、スケールが大きく違うことを除けば帝王と同じような立場だ。そう考えると、恐ろしいくらい威厳のある帝王でさえも対等に見えてくるから不思議だ。

僕は、まっすぐに帝王を見た。といっても、多分前髪に隠れて僕の目は帝王には見えていないだろうけど。帝王は口許を軽く上げて

微笑して、僕を見て言った。

「率直に言おう。私の臣下になりたまえ」

臣下になれ？ 要するにそれは、手下になれてことでしょう。

僕は帝王の手下になんてなっているほど暇じゃない。それに、誰かの下で生きるなんてまっぴらだ。

「悪いけど、それは無理。だって僕、やらなきゃならないことがあるんだ。だから、貴方の手下にはなれない」

帝王にならって、僕も率直に自分の考えを言った。すると、帝王の顔から表情が消えた。部屋の温度が一気に十度近く下がったような気がする。

僕は怖くなったけれど、必死に帝王を見つめていた。目をそらしたら、負け。何だか、そんな気がしたから。

「ならば、死」

「死なないよ。大体、いきなり押しかけてきてそれはないでしょ。自己中だ」

帝王の言葉をさえぎってそう言った。今度こそ殺されるかもしれない。そう思ったけれど、帝王はなんと笑い始めた。

「……そなたのような輩^{やから}に出会ったのは初めてだ」

長い髪に黒い爪を差し入れて梳きながら、帝王は言う。僕は苦笑して、帝王を見たまま頷いた。

「だろうね」

帝王は唇を三日月の形にゆがめて笑い、それから僕の部屋を見渡した。

ふうん、と唸り、帝王は再び僕を見る。何を言われるのかと考えはじめた瞬間に、帝王のバリトン・ボイスが空気を柔らかく震わせた。

「そなたは随分とナンセンスな人間だと見える。人間など、不完全で面白くも美しくもなكارう」

僕を哀れむかのようなその口調に、頭のどこかでぷちんと何かが切れるのを感じる。これは芸術だ。決してナンセンスなんかじゃない

い。完全なものだけが美しいなんて誰が決めた？

確かに帝王は完全な、誰がみても完全な美しさを持っている。でも、だから何なの？

不完全で均等が取れていないからこそ、美しく感じるものがある。だってそれが自然の美しさだから。完全にととのったものなんて、人工的に思えてあまり好きじゃないから。

帝王は確かに綺麗だけど、よく考えれば彼は僕が求める美しさとはかけはなれている。かけはなれるどころか、むしろ対極にいるんじゃないかという気さえしてきた。

「あのね、言わせて貰うけど。人間は不完全だからこそ綺麗なんだ。ひとつも同じ形なんてない。一人の人間の手で人を造りだすなんて無理だし、どれも違う形をしているからこそ面白いんじゃないか。完全なものなんか、この世には一つとしてない。この星自体が不完全なんだから、そのうえにあるものなんて全部不完全であるに決まってる」

マシンガンのように喋りだす僕。表情を失って僕をまじまじと見つめる帝王。

「僕の思う芸術とあなたの思う芸術は百八十度違うみたいだけど、僕は僕が美しいと思ったものだけを追い続ける。貴方にナンセンスだとかいわれる筋合いなんてない」

ナンセンスという言葉に過剰反応して、僕は帝王相手にこんなことを言っていた。

人間は不完全で美しくないなんて、そんなのはあり得ない。だって、現に人間であるリイは不完全だけどとても美しいから。

僕は挑むように帝王を見た。さあ、来るなら来い。これ以上僕の芸術を、リイを貶^{けな}したりしたら許さないよ。この芸術品たちは、みんな僕のこだわりなんだ。

これを否定されることは、僕自身を否定されることと同義。相手が誰であろうと、絶対これだけは貶^{けな}させない。

僕の視線を真っ直ぐに受け止めた帝王はうっすらと笑みを浮かべ、

それからやがて声を上げて笑い始めた。

「面白い、益々そなたを手に入れたくなった」

そう言うとき帝王は笑うのをやめて、金色の目で僕の芸術品たちを眺めた。その目に嘲りの色はない。帝王は一通り芸術品を眺めた後、無表情で僕を見て言った。

「いつか私の臣下になりたまえ」

無理だよ、と答えようとした瞬間、紫色の残像を残して帝王が掻き消えた。僕は驚いてその辺りにレーザーがあたりしないか調べたけど、特殊ライトによって消えたように見えているわけではないようだ。

しばらく僕は壁にもたれかかっていたけど、ベッドに眠るマーテインと枕もとのリイを見て呟いた。

「僕、やらなきゃ」

帝王が去った後、僕は随分長いことを考えていた。神々しくも禍々しい、神であり邪神であるあの男。否、男とか女とかそういう次元の話じゃない。

性はふたつしかないけれど、帝王はそのどちらにも当てはまっていないような気さえする。いや、確かに男性なんだけれど。でもどちらもある人には相応しくないというか、そういう固定概念はとりつけるべきでないような感じがするんだ。

帝王は誰にも縛られている感じがしない。きっと彼は全てのものから束縛を解かれ、完全な“自由”そのものになっているんだ。

僕は考えた末、帝王をこう定義した。彼は闇の皇帝であり自由の権化で、究極の自己中。

何度も考えたけど、絶対これが正しいと思う。

「よし、やらなきゃ」

今さっき帝王に言った。僕にはやらなきゃならないことがあると、僕は確かにそう思った。

言ったことは実行しなきゃ。少しでも早く実行して、リイを早く蘇生させなきゃ。

リィ、研究は一からやり直しだって。だけどね、僕はきみを生き返らせるためならどんなに辛いことでも全力で頑張るよ。

六年もまたせてごめんね。

けど、もうすぐ新しい世界で、二人いっしょに暮らせるんだよ…

…

第十四話 シークレット・ガーデン

僕は最高権力者の権力を継いで、この研究所を統率する立場になった。建て直した研究所は、外装が辺りの高層ビルと殆ど変わらないようなつくりになっている。僕は最上階に第二研究所と同じ部屋を作って、そこを自分の部屋にした。

中庭はレンティノーの要望でそのまま残すことにして、最上階に一〇六八号室と一〇二〇号室をうつした。ハビの部屋のドアには、会議室なんて書いてある。僕やマーティンやレンティノーの部屋はそれぞれ特徴的すぎるので、一番質素で余分な物があまりないハビの部屋が会議室になった。

確かに、僕やマーティンの部屋はそれぞれ違った方向に特徴的だと思う。具体的にいえば、マーティンの部屋にはいかがわしいポスターがいっぱいはってあるし僕の部屋には芸術品がいっぱいあるから。

何でレンティノーの部屋まで除外されるんだろうと思って彼の部屋に遊びに行くと、その部屋には大きな本棚がたくさんあった。そうか、これじゃちょっと四人でくつろぐには狭いかもしいい。

ハビの部屋が会議室になっている理由は、もうひとつある。最近のハビは、研究所にすることが少なくなってきたんだ。彼のカフェの常連さんから出た要望のおかげで、カフェ・ロジェッタの営業時はほとんどん長くなってるんだ。

表向きは“製薬会社の社長”として、僕は一躍有名になった。十六歳で社長。おまけに裏の顔は研究員。僕の人生は一体どこから狂い始めたのだろう。

恐らく、生まれた時からこうなることが決まっていたんじゃないかと思う。あの父親の息子として生まれたと言うこと自体が、僕の人生を狂わせた。

良いか悪いかといったらどちらともいえないけれど、今ここで生きていることが最悪で死にたくなるってほどではない。それに、友達もいるしね。

僕は日々研究に明け暮れた。資料室に通い、部屋中の本やレポートを片っ端から読みふけた。酷い日になると、僕は資料の上に突っ伏して資料室で眠ってしまうこともあった。

全てはリィのため。最高権力者に反発する気持ちを示すためっていうのも、少しはあるかもしれない。

彼の部下たちをのっとっちゃったのは悪いことだったと、僕は反省してる。だから、彼の部下たちに全部任せたりなんてしない。僕は自分の手で、リィをよみがえらせる。人手が必要な作業以外は、自分で実験したり研究したりする。全て、僕がやらなきゃ。

調べた情報により、僕はひとつのことを理解した。それは、蘇生させるには細胞の動きを復活させなきゃならないということ。あの特殊な防腐剤に漬けられているわけだから、細胞が死滅したり壊死していることはないはずだ。

そう思いつつ書棚を探していたら、人工魔力の研究レポートが出てきた。ちらりとマーティンの顔が浮かんでくる。レポートを読むと、細胞に人為的な突然変異を起こさせると人工魔力が身につくということがわかった。

その構造について詳しく書かれていたので、僕は魔力が何であるのかをあらかた知ることが出来た。人間流の不完全な魔力がタイプAで、エルフ型の魔力がタイプBとされている。そして、エルフと人間の混合型がタイプC。

……ちよつとまって、エルフって何？僕はエルフを調べることにして、また違ったレポートを漁る。人工魔力の研究についてのレポートがあつた棚に、エルフについてまとめたレポートもあった。

添付された写真に写っていたのは十代の女の子だったけれど、目が銀色をしていて耳が異様に尖^{とが}っていた。これが、エルフ。いるはずないと思われている、異種族。エルフの説明にはこんなことが書

いてあった。

「体内の血を魔力に換えて強力な魔法を使い、その魔力で地球上にある全ての言語を解する種族。知能指数が高く、運動能力も異常に高い。特徴は、銀色の瞳とがった耳。生息している場所によって髪の色や肌の色に違った傾向がみられる。体内の構造は一般の人間と全く同じであり、耳と目さえ隠せば人間となんら変わりのない姿をしている」

僕は最初はこんなものなんていないと思っていたけれど、ちゃんと解剖の結果とかそういう資料もレポートに含まれていたから納得せざるを得なかった。

エルフの生息地については詳しく調べられないようだった。だけど、エルフが人間界に入り込んできたという事例は結構あるらしい。種族を超えた恋愛、というのがエルフたちを人間界に入り込ませる原因に当たる。

全く、信じられない。自分以外のモノをそう簡単に信じてついていっていいの？ 結果として、僕たちのような研究機関に捕らえられて殺される事だってあるのに。エルフって、知能指数が高いくせに馬鹿なのが多いかもしれない。

レポートを捲っていくと、エルフと人間の混血児について研究した内容が書かれていた。何故か、エルフよりもエルフと人間の混血児の方が魔力が高くなる傾向にあるらしい。なおかつ銀色の目以外にはどこにも変わったところが無いので、混血児たちは人間界でも普通に暮らしているケースが多数あるという。

言語を解す能力は最初眠っていることが大半で、何かの弾みで急に現れることが多いらしく、目覚めずに終わる混血児も過去にいたようだ。

僕は手当たり次第スポーツ選手や翻訳者を探し、ついに銀色の瞳をした翻訳者に出会った。ラジエルナ国のある港町に住んでいる男性で、翻訳者になりたての十八歳。彼は黒髪で、エルフと人間の混血である証拠の銀色の目をしていた。

僕は彼に会いに行った。正確に言うと、彼を浚^{さら}いに行った。

僕はマーティンを連れて港町に出向き、マーティンに頼んで車でその人をはねてもらった。殺しちゃおうと思ったんじゃないよ。だって、普通に誘拐したら問題になるから。

病院に搬入された彼は意識不明ということにされたけど、本当はかすり傷だけでピンピンしてた。じゃあ何で意識不明ということにされたかというと、マーティンが魔法で彼の容姿を拘^すって倒れていたから。それから一定時間だけ仮死状態になる薬を飲んで、マーティンが病院のベッドに寝ていたんだ。

そうとは知らない『遺族』たちが、死んだふりをしたマーティンに最後の別れを告げながらキスをしたりしている。僕はその様子を、『主治医』として見ていた。白衣を着て、首から聴診器を提^ひげて、なるべく神妙そうに見える顔で。白衣も聴診器も、研究所から持参したものなんだ。

「先生、この子を生き返らせることはできないのですか？」
死んだ彼の母親が発したその言葉に、僕は一瞬全ての動作を止めた。

リイを生き返らせるために、僕はこの家族の人生を狂わせてしまったんだ。僕がこの家族から大事な息子を奪ってしまった。そう、僕は僕の父親と同じことをしてしまったんだ。

だけど……

「お力になれなくてすみません」

僕はそう言い、首を横に振った。だって彼が魔力を提供してくれれば、リイが生き返るかもしれないだし。

数時間して、僕は遺族を外に出してマーティンを起こした。遺族には、遺体を検死に出すと言ってある。死亡診断書は僕が書いた。偽装だらけだけど、遺族はどこにも矛盾を感じなかったのか、泣きながら帰って行った。

マーティンは元の姿に戻った。けれどその姿では髪の色があまりにも目立つから、僕はマーティンに金髪青年になるように言った。

金髪になったマーティンと一緒に、僕は乗っていた車に戻った。

そこには拘束された混血児がいて、僕たちを恨めしげに睨み上げている。この車は盗んできたものだから、そろそろ逃げないとまずい。

「僕を捕らえて何をするつもりだ」

両手と両脚を縛られて後部座席に寝かされた彼は、刺々しい声で僕に言う。マーティンが黙らそうかと申し出てくれたけど、彼にあまり恐怖心を与えたら実験に協力してくれなくなっちゃうかもしれない。僕は助手席から彼を振り返ると、笑みを浮かべて見せた。

「ごめんね、ちょっと協力して欲しいことがあって。終わったらちゃんと帰してあげるから」

彼はそれでも僕を睨みつけていたけれど、やがて後部座席の心地よい揺れのためか眠りについていた。車を飛ばし、港に到着する。

高速船に乗り込んで、僕らは研究所を目指した。船の中で彼が暴れるだろうということは予測していたから、あらかじめ持っていた鎮静剤を打って黙らせた。約一日のあいだ船に乗っていたけれど、やがて目的地にたどり着いた。

僕とマーティンは棺桶ほどもある大きさの箱に彼を詰め込んで、ちよつと強引な方法で船から下りた。

具体的にどうやったのかって？ えっと、監視員が「それは何だ」と被験体が入った箱を指差すから、マーティンが強行突破したんだよ。要するに、マーティンが監視員を殴って気絶させちゃったってこと。

多分ニュースになるだろうから、マーティンはその場で姿を変えた。彼は黒髪で肌が浅黒く、がりがりに痩せた青年になった。

僕らは徒歩で研究所に向かった。港から研究所はかなり遠かったけれど、マーティンは文句の一つも言わずに箱に入った混血児を運んでくれた。僕らは、その日の夕方に研究所に戻ってくることが出来た。

戻ってきてすぐに、一〇九六号室に箱から出した混血児を閉じ込

めた。混血児はぐったりと力をなくし、真っ白なベッドに横たわっていた。そんな彼の姿を見ると、僕が初めてこの研究所にやってきたときのことを思い出した。僕も多分、初めて来た時はこんな風にぐったりしていたんだろう。

カードキーで扉を閉じて、僕はレンティーノとハビの元へ向かった。被験体を見つけたことを報告しなくちゃね。今日から、リィ蘇生プロジェクトが本格的に始動するんだから。

ふたりの第一声は、共に「おかえりなさい」だった。

「ハーフの方は見つかりましたか？」

レンティーノは会議室（つまりハビの部屋）の質素なソファに座ったまま、僕を見上げて言った。僕はレンティーノを見て微笑むと、ハビとレンティーノ両方に向かって答えた。

「見つかったよ、下にいる」

そう答えると、二人とも笑ってくれた。僕らは今後の予定を綿密に組んで、明日にもリィ蘇生に向けて実験を開始することにした。まずは装置をつくらなきゃね。そう思って、僕はまた資料室にこもった。

魔力を伝達しやすい物質は、金属や有機物ではなく鉱石や宝石などらしい。俗に言うパワーストーンの種類とか、あと水晶も良いって書いてあった。人工の鉱石じゃなくて、天然の方がいいらしい。

なるほど。資料室からレポートを持ち出して、僕は第二研究室に戻る。それからゴム管を持ってきて、砕いた水晶の欠片をそのゴム管に詰めた。水晶の入手先はどこかって？ 研究員の女性にパワーストーンに凝ってる人がいたから、分けてもらったんだよ。水晶はハンマーで叩いたら簡単に砕けた。

僕は円筒形で小さめの水槽を空にして持ってきて、水槽の一部に穴を開けて水晶の欠片が入ったチューブを通した。水槽の穴とチューブの間はゴムパッキンで念入りに塞ぐ。そして、保存液を注ぎ入れてみる。もれてこなかったから、僕は保存液の中にウサギの死体を入れた。うん、まずはウサギで実験するつもりなんだ。

蓋をして、暫くウサギを眺める。このウサギ、片足が無いんだ。生まれつきなかったらしい。その左右非対称さがとても芸術的で、僕はこの子に永久に保てる形を与えたんだ。

僕は暫く赤い目をした隻脚せっきやくの白ウサギを眺めていたけれど、魔力の持ち主のところへ行った。あの被験体のところへ行ってみようかとも思ったけれど、きつと非協力的だろうからマーティンを訪ねる。本当なら、マーティンに魔力を借りたりしたくないんだけど。だって、魔力を使うたびに酷い頭痛がするって前に言ってたから。苦しめたくないよね、友達は。

けれど、一回だけ。彼が無理をしない程度に、魔力を借りなきゃ。

第十五話 動物実験

「マーティン、ちょっと協力してくれる？」

彼の部屋の入り口で、僕は言った。すると、ベッドに寝転がって天井に貼られたポスターをみていたマーティンはずっと身体を起こす。さりげない仕草で、跳ねた髪を撫で付けながら。

いつもそう。何をしていても、何を見ても、声さえかければマーティンはしなやかな身のこなしで僕を振り返るんだ。

「ああ。何だ？」

いつもどおり小ばかにしたような笑みで、彼は言う。だけど僕はもう慣れた。これが彼の普通なんだ。慣れてしまえば、その笑みすら普通の笑みに見えてくる。

僕は少し言いにくさを感じながらも、本題に迫った。

「魔力貸してくれないかな、ちよつとでいいと思うんだ」

「何だ、それを早く言いな。お前が望むなら何時だって構わねえよ」僕の態度に反比例するように、マーティンは明るく言った。これだから嫌なんだ、マーティンに魔力を借りるのは。だって、これから無理させるのに。

マーティンは被験体をさらってくる旅の途中で何度も色んな魔法を使ったから、今はとても疲れていたり頭痛を感じていたりするはずなんだ。なのにこんな風に、笑みすら浮かべて頷いてくれるなんて。

僕が何も気づいてないとも思ってるのかな、マーティン。現に今だって、ベッドに寝転がってこめかみに手をやってたじゃないか。僕が来たら、髪を撫で付けるふりをしてごまかして。

マーティンは整髪料でわざわざ髪を跳ねさせているのに。それなのに、撫で付けるなんておかしいでしょう。ちゃんと解ってるのに。なのに僕は、マーティンをこれからさらに苦しめてしまう。

「心配すんな」

僕の頭に手に乗つけてくしゃくしゃと撫でてくるマーティンは、やっぱり笑みを浮かべていた。そんな無理して笑わないで。

レンティノーもハビもマーティンも、他にあまり共通点が無いのに無理して笑うところばかり共通してる。

「実験か？ 熱心だな」

白い廊下を歩きながら、マーティンは言った。この研究所は、建て直してから内装は真っ白にしてある。何となく、この白い空間に慣れてしまったんだ。それに、初めてここに来た時のシチュエーションをいつまでも忘れたくなかったから。

「これで蘇生が立証できたら、魔力を使った蘇生法が生まれるんだ」僕がそういつてみればマーティンは驚いたような顔をして、それから満面の笑みを浮かべた。こうやって僕が頑張ったことを、自分のことのように喜んでくれるのは物凄く嬉しい。だけど、やっぱり無理はして欲しくない。

「やるじゃねえか」

屈託のない笑顔。僕の髪をかき回す大きな手。そんな兄のようなマーティンの存在に、僕も笑みを浮かべる。

やがて第二研究室に着いて、僕はマーティンと一緒にウサギの水槽を見た。マーティンは何度見ても僕の芸術のよさがわからないらしくて、今回もウサギを見て神妙な顔で首をかしげていた。そして、一言こういった。

「相変わらず、嫌いな趣味してるねえ？」

ウサギだけじゃなくて僕の部屋にあるもの全てを見回しながら、マーティンは眉をひそめる。確かにこの部屋は廊下や他の部屋に比べるとかなり薄暗いし、芸術品もいっぱいある。

だけど僕は思うんだ。嫌な趣味してるのは、マーティンの方だ！だって、普通は裸に近い格好の女の人の写真なんか直視できないよ。

「お互い様ー」

一言で僕とマーティンの芸術的センスの違いを片付けると、僕は

ウサギの水槽につながったチューブをつまみあげる。そしてそれを、マーティンに渡した。

「このコードで水槽に魔力を送って欲しいんだ。ちょっとでいいよ、マーティンが疲れない程度に」

僕はそういつて、マーティンを見上げる。するとマーティンはチューブを軽くにぎりながら、ウサギを見つめた。

「生き返るまでやる」

彼がそう言うと同時に、ひとすじの風が吹いたかのようにマーティンの髪が軽く舞い上がった。僕のところにも、寒気にも似た感じが来る。思わず身震いすると、水槽の中のウサギに変化が起こった。動き始めたんだ。水槽の中で、空気を求めてもがいている。

僕は急いで水槽の蓋を取った。ウサギはもがきながらでてきて、ちゃんとそろった前足と一本しかない後ろ足の三本で上手にバランスをとりながら研究室の床を跳ね回った。

蘇生、できた。魔力を使った蘇生法も、使えるんだ。あの男性を使えば、リイが生き返る。生き返るんだよ。

喜びに打ちひしがれ、マーティンの魔力を感じた時とは違う意味で身体が震えた。だけどその喜びも、すぐに冷めた。ウサギがすぐに死んだとか、そういうことじゃない。マーティンがその場に膝をついて、苦しそうに息を荒げた。その姿をみてしまったからだった。「マーティン？ 無理しちゃ駄目って言ったのに！」

僕は彼の傍に屈んで、彼の表情を覗き込みながら言った。頭に手をやって苦しそうな表情で、それでも嬉しそうにマーティンは笑う。何か大きな仕事を成し遂げた時のような達成感のある笑みを浮かべたマーティンに、僕はかける言葉を見失った。

「結果的にウサギは生き返った。これでお前の兄貴も生き返る」

隻脚を引きずるようにして部屋の中を駆け回っているウサギを見ながら、マーティンは笑った。僕は当然笑っていられるような気分じゃなくて、真面目にマーティンを見つめる。

「マーティンには任せられない、駄目だよ。ウサギ一匹でこんな風

になっちゃうんだったら、なおさら駄目だよ」

ウサギは僕の手のひらに軽々と乗っかる程度の大きさだけど、リイはいくら小柄だとはいえ人間だ。できるわけないよ、マーティンには。絶対任せたくない。

僕が発した言葉で、彼はしばらくの間黙り込んでいた。だけど、やがてかすれた声で笑った。

「俺じゃ力不足か」

呟いた言葉は、とても悲しそうだった。僕は力不足だとかそういう理由でマーティンを責めたいわけじゃない。むしろマーティンのことを責めるつもりなんてない。

ただ、心配なんだ。魔力がひからびた時、人間は疲労で死んでしまいうってレポートに書いてあったから。

「マーティンには、もう苦しんで欲しくないんだ」

長い間弟のことで何度も何度も悩んで、挙句の果てにいい好きな研究員たちのおもちやになり、洗脳されそうになって。望んだわけでもないのに髪を青く染められ、それでも「弟の目の色だ」って言って笑って。強い頭痛という立派な副作用を伴う人工魔力をうえつけられて。

それでも真っ直ぐに自分の生き方を貫いてきたマーティンは、強いくせにとっても脆い人だ。だからこそ、僕はそんなマーティンに折れて欲しくないんだ。折れそうなマーティンをサポートしてあげられるのは、今のところ僕を含む数人だけだから。

「何思いつめてんだ？ 俺は大丈夫だ、解ったな」

僕の表情を見て、困ったように笑いながらマーティンが頭を撫でてくる。大丈夫？ 彼のその言葉ほど、信用ならない言葉はないんじゃないだろうか。

「そうだミンイェン、新入社員が二名入った。応対しな、社長？」
跳ね回るウサギを捕まえながら、マーティンは言った。社長って言う言葉に、思いつきり皮肉じみた響きを込めて。

僕は苦笑しながら頷き、一階まで降りていった。マーティンはウ

サギを持ってどこか別の階にいったようだ。あのウサギ、どうするつもりなんだろう。

一階に着くと、応接間に若い男女がいた。どちらも黒髪に黒い目で、ハビと同じ国から来たように見える。

男の方は手首に何本かヘアゴムをかけているけど、それ以外には特に変わったところがない。特徴があまりないんだ。目も大きい小さいか微妙なところだし、肌の色だって特別白いわけでも黒いわけでもない。体格だって、太ってもいないし痩せてもいない中肉中背だ。

そしてハビのような長身でもなければ、僕のように小柄でもない。彼は、ハビと同じくらいの年齢だろうか。

女の方は、とても綺麗な顔をしていた。うん、美人だよ。肌は白く、その白い肌と黒い髪や目の対比がとても鮮やかに見える。全体的に線が細い感じで華奢なところは、レンティノーを髻ほうふつとさせる。だけどレンティノーと違って、彼女には薔薇が似合わない僕は思った。薔薇より、蓮華の花とかが似合いそうだ。

肌の白と髪や目の黒が低彩度だけど、唇にだけ赤みが差しているのがとても印象的な人だ。彼女は僕と同年齢かそれより少し下に見える。

「初めまして」

男の方が先に口を開いた。僕も軽く会釈して、二人の正面に当たる場所に座った。女の方も僕に挨拶をしてくれる。

「面接ってやつだね。名前を教えてよ」

僕はにっこりと笑って言った。この二人がどれだけ使える人たちなのか、品定めしようって魂胆なんだ。

新入社員はこれで何十人目だろう。過去に入社した人たちは、皆洗脳装置で僕のしもべになった。よっぽどの理由がない限り、洗脳せず野放しにしたりはしないんだ。だからこうやって、社長である僕が直々に面接を行うんだよ。

「セルジです。訳あって苗字は名乗れないんですが」

手首にヘアゴムを巻いた男の名は、セルジというらしい。入社
の面接で苗字を名乗らなかったのなんて、彼が初めてだ。何だか面白
い人だね。ちょっと気に入ったかもしれない。

「へえ、わかった。それじゃあ、君は？」

女の方に声をかけると、彼女は深い黒の瞳で僕をじっと見つめた。
うわ、何だか緊張する。どうして社長の僕の方が面接で緊張しな
きゃならないんだろう？

「私はノーチェです。ノーチェⅡスルバラン」

彼女がそう自己紹介したから、僕は何度か頷いてセルジのほうを
見た。ノーチェの方はあんまり見ないことにする。そうすれば緊張
することもないだろうからね。

僕が目を見ると、セルジは神妙な顔つきで僕を見ていた。面接
に合格するかどうか不安なんだろう、きっと。

「セルジ、でいいね。セルジはどうしてこの会社に就職したいと思
ったの？」

そういうと、彼はずっと視線を手首のヘアゴムに落とした。しか
しまたすぐに僕に目を向けて、話し始める。

「僕は美容師になりたいんです。初めて美容室に行って髪を切って
もらった時の、美容師さんの優しい笑顔が忘れられなくて。子供の
頃から、これだけが僕の夢でした。ですが、親は僕を大学教授にさ
せようと必死なんです。だから僕は、夢を諦めなくてはならなくな
った。でも、どうしても夢を諦め切れなくて家出てきたんです」

セルジはそこで一旦話を切り、すぐにまた続けた。

「住むところは決まりましたが、家賃をどうやって稼ぐのが問題
でした。この研究所で働けば、生活費を稼ぐことは勿論、静かに何
かに集中できる空間が手に入ると思っています。だから、ここに就職
したいと思いました」

びっくりした。だって、いきなりこんなに長々と夢を語りだした
人なんてほかにいなかったから。そうか、美容師になりたいんだ。
夢があるっていいね。

僕はこんな仕事をしたいなっていうような夢は、一度も抱いたことがない。だけど、夢を見てる人を馬鹿だとか無様だとか格好悪いとかそういう風に思ったことは一度も無い。

「解ってると思うけど、ここでは美容師に関する知識をしっかりと学べないと思う。それから君は、科学に関する知識を持ってる？」

実際は一応じゃなくて思いっきり研究所なんだけど、僕はそうだった。今のところ、採用するとしても洗脳する必要はなさそうだった。ここまで意欲的にここで働きたいといった人なんて、彼くらいだと僕は思った。

「高校の部活では、科学部に入っていました」

セルジはそう言って、僕を見た。洗脳してないのに、縋るように向けるその目。僕より年上で僕より背も高くせに、精神的な立場は僕の方が上なんだ。神っていつも、こんな気持ちで人間を見下ろしてるんだろうか。

僕はにっこりと微笑んだ。“神様”になりきったつもりでね。

「よし、採用だ。最上階の一步手前に行って、ハビって人を探して。それから彼の指示を仰ぐように」

「はい、ありがとうございます！」

僕の言葉をきくやいなや、セルジは部屋を飛び出していった。物凄く嬉しそうだった。

採用が決定してあそこまで喜んだ人なんて他にいなかったよ。まあ、彼は『製薬会社』に就職できたから喜んでるんだよね。僕がしようとしていることを知ったら、怖気づいて逃げようとするかもしれない。そうになったら、仕方ないから洗脳しよう。

「君は？」

僕は、二人目の面接を始めた。ノーチェは軽く微笑を浮かべながら、僕を見つめてくる。僕は真っ直ぐにノーチェを見返した。すると、ノーチェは頬をほんのりと薔薇色に上気させる。うわ、この人意外と可愛い。

僕は初めて、この人のことを『綺麗』じゃなくて『可愛い』って

思った。

「私は女優になりたいんです。親に勘当されてひとりになってしまった今、私を受け入れてくれる事務所を探す傍ら家も探さなくちゃならくて。道が厳しいのは解ってます。なれないかもしれないっていうのだって、十分承知してます。だけど私は、自分自身に正直でありたい。だから、ここで暫く働いて生活費を稼ぎたいと思ってるんです。かねてから、理数系は得意でしたし。セルジさんと、理由は殆ど変わりませんよね」

短い髪を揺らしながら笑う彼女。その笑顔がとてもナチュラルで、輝いて見えた。

——自分自身に正直、か。マーティンみたいなこというね、ノーチェ。気に入ったよ。それにこの研究所、女性が少ないしね。

「女性社員、極端に少ないんだけど大丈夫？」

念のためにそうきいてみれば、ノーチェは軽く頷いてくれる。彼女、最初にこの部屋に来たときよりも大分自然体になったね。

「ええ、慣れてますから」

彼女の答えを聞いて、僕は席を立った。そして、彼女にも席を立つよう視線を送ってみる。見事に伝わってくれたのか、ノーチェも席を立てて椅子を整頓したりしてくれた。

彼女がいれば、男ばかりのこの研究所も少しは華やぐかも。まあ、レンティーノがいるだけで大分雰囲気が違うんだけどね。……これって、レンティーノが女っぽいついていうことと直結してるんだろうか。だとしたら今の発言は、レンティーノにはちよつと失礼だったかもしれない。

でも、レンティーノが花を飾ったり中庭のデザインを考えてくれたりしてくれたから研究所の内部が結構居心地の良い空間になっているんだ。それは紛れもない事実なんだよ。きっとノーチェは、レンティーノと結構気が合うタイプなんじゃないかと思う。

「じゃあ、君はレンティーノを探しに行つて。最上階の一〇六八号室だから」

僕がそういうと、柔らかな動作で一礼してノーチェも部屋を出て行った。ポケットに忍ばせていた軽量型洗脳装置を弄りながら、僕はエレベーターで最上階に向かう。結局使わなかったけど、使わなくてよかったって僕は思っている。

多分ノーチェも、違うエレベーターで最上階に向かっていると思う。こうやって、面接の後は必ずハビかレンティーノのところにやって仕事についての説明を聞かせるのがいつのまにか暗黙のルールになっていた。僕よりハビやレンティーノのほうが説明が上手いと思うからね。

最上階に着くと、エレベーターの前をレンティーノとノーチェが通った。何だか、物凄く均等の取れた二人だと思った。なにがって、二人ともすごく綺麗だったから。とても絵になってる。

お似合いだと思うけど、生憎レンティーノは女嫌いなんだよね。学校に行っていた頃からレンティーノは女子から猛烈にアタックされまくっていたから、そのせいで女の人が苦手になっちゃったのかもしれない。

二人は僕に気づかず、真っ直ぐに階段の方へ向かっていった。多分、最上階であるこの二十階から近い階に移動するんだろう。レンティーノはエレベーターをあまり使いたがらない人だから、この研究所の中で最も歩き回っている人だと言える。まあ、マーティンだってしょっちゅうどこかに出かけていって色んなことをしてくるんだけど。

彼が変身の能力を利用して人殺しをしているなんて、知った時は驚いたけど今は別に驚かない。だって、殺されてるのは皆彼の敵だから。それに、帝王の手下だって言う話もきくしね。

僕は帝王の手下に成り下がるつもりはない。それを解っているから、何も言わなくても邪魔者はすべてマーティンが排除してくれる。レンティーノはそれを悲しいことだと言った。ハビも普通るときはそういうけれど、人格が変わるとマーティンを褒めるようになる。ハビは昔から、二重人格なんだってマーティンが言ってた。だけど

僕がハビに向ける目は、昔と変わらない。

皆大切な人だから、皆好きだよ。レンティーノの意見も尤もだと思うし、だけどマーティンがいなければこの研究所がのつとられる可能性だって出てくるし。だから僕は、マーティンが人を殺すことを止めはしない。レンティーノだって、哀しいといいつつもマーティンをとめないんだから。

ちなみに、マーティンに罪の意識はないらしい。だってそれも当然だよ。マーティンは、自分が正しいと思ったことしかしていないから。

僕はマーティンの部屋に向かった。あのウサギの行方が気になったからね。

第十六話 生命活動、再開（前書き）

この話の後半から、グロテスクなシーンが入ってきます。苦手な方はご注意下さい。

第十六話 生命活動、再開

彼の部屋に到着すると、部屋の中でなにやらばたばた暴れる音がした。

「マーティン？」

「わ、開けるな！」

ドアを開けた瞬間に開けるなと言われた。僕は慌ててドアを閉めようとしたけれど、隻脚のウサギが物凄いスピードで僕の足の間を縫って廊下に飛び出したから、急いでそれを追う。

ウサギは足が一本足りなくせに逃げ足がはやく、僕とマーティンは途中で何度もぶつかり合いながら廊下を走り続けた。

マーティンと額を打ち付け合ってしまったのが果たして何度目だったのか。数えるのすら億劫になってきた頃、僕らの目の前でウサギがすいっと軽やかな動作で誰かに抱き上げられた。ウサギを目で追ってみれば、セルジがしげしげとウサギを眺めていた。

「後ろ足が片方ないんだね……」

ぽつりと彼が呟いたから、僕はその呟きに答えてあげた。

「生まれつきないんだ」

すると彼はふと悲しそうな顔をして、それから僕の腕にウサギを預けてくれた。セルジの腕の中では大人しかったウサギが、僕の腕に来たとたんまた暴れだした。

丁度そのとき、暴れウサギを相手に悪戦苦闘する僕の後ろからハビがひょっこりと顔を出す。

「ミンイェン、ウサギと遊んでるの？」

そう訊ねられて、僕は苦笑いする。遊んでるというか、これは保護しているつもりなんだけど。

何でセルジが扱うと大人しいのに、僕やマーティンが扱うと暴れるんだろう。

「この馬鹿がドアあけたせいで、逃げちまったんだ！ チッ」

マーティンはそういいつつ、おそらく部屋から持ってきたのである。ろうケージにウサギを閉じ込めた。ウサギはしばらく暴れていたけれど、セルジが近寄ると大人しくなる。何なんだこのウサギ。なんかむかつく。

だって、この子を一番大事にしていたのは他でもない僕なのに。芸術品だったところからお気に入りだったのに、その恩をこんな風に返すの？　なんてウサギだ。

「社長、小動物苦手かな」

ウサギのケージを覗き込みながら、セルジは言う。隻脚のウサギは人懐っこそうにセルジに近寄ったりしている。セルジがケージの隙間から指を入れると、ウサギはその指に口を寄せた。

くすぐったいよ、と笑いながらセルジは指をケージの隙間から引っっこ抜く。

「ミンイェンで良いよ。別に動物は苦手じゃないんだけど、君が来たとたんに僕への風当たりが冷たくなったような気がする」

そう答えると、セルジは申し訳なさそうに苦笑した。

僕たちは話し合って、このケージをセルジに託すことにした。それが一番良い方法だと思うんだ、今のところ。このウサギ、セルジにいちばん懐いているからね。

皆は納得したけれど、マーティンは遊び道具がなくなったと軽く文句を言っていた。知らなかった、マーティンって小動物と遊ぶのが好きなんだね。そういうところが意外と子供っぽい。

ちよっと想像してみようか。露出度の高い女性の写真で埋め尽くされてるといっても過言じゃない部屋に、青年と隻脚のウサギ。……とってもアンバランスだね。僕がこんな想像をしていると、マーティンが怪訝そうに見てきたので笑みを返してあげた。

ハビとセルジは、かごを持ったまま下層に下りていった。被験体用の空き部屋がいくつもあるから、その中からセルジに好きな部屋を選ばせるらしい。そう考えて、僕はいちばんの『被験体』のことを思い出した。

第二研究室に戻り、最高の芸術品に目を留める。僕のベッドのすぐ傍で眠る、透けるような肌をした黒髪の少年。とつくに青年になっ
ていて良い年頃なのに、彼は歳を取ることができない。

だから僕が、彼に時を与えるんだ。永久を与えた僕が、永久から彼を解放する。その日が、とうとう近くまでやってきた。

「リィ、まってね。ちよっと、あの人の様子見てくる」

僕は嬉々として、一階まで降りていった。足取りもかるやかに、真っ白な廊下をうきうきと歩く。やがて僕は、建て替えをしたのに位置的には前と全く変わっていない一〇九六号室についた。僕が意図してそうしたんだ、この部屋の位置は変えないで欲しかったから。レンティーンやミンと出あい、最高権力者と別れた場所。僕のはじまりの場所。そして、被験体である彼の始まりの場所。それが、ここ。

そつと耳を澄ましても何も聞こえないから、僕はカードキーを使ってドアを開けた。すつかり馴染み深くなった空気の音がして、白い壁の向こう側からエタノールの匂いがふわりとただよってくる。

僕は白い壁を抜けた。そして、ベッドに横たわる黒髪の彼を見た。彼は布団に包まって、こちらに背を向けている。動かないって事は、寝てるのかな。

僕はそつと彼に歩み寄った。青年と少年のあいだほどの年齢の彼は、これからこの『白い牢獄』の囚人になる。そう、かつての僕と同じようにね。ちよつと楽しい気分に浸りながら、横たわる彼のすぐとなり立ってみる。

すると、僕は異変に気づいた。

「ね、ねえどうしたの」

僕は彼の肩に手をかけた。驚くほどの冷たさと硬さに呆然とする。ベッドに眠る彼の隣に立ったそのとき、僕が何に気づいたと思う？
……彼の唇を伝って真っ白い枕を染めている、赤いモノに気づいたんだ。

僕は焦って、冷たくなった彼をあお向けた。彼はぐったりと力な

く、僕のされるがままになった。それによって僕はもつと焦る。

僕は彼の顔を見た。思わず目を背けたくなった。彼は目を半開きにしていて、その口からは夥^{おびただ}しい量の血が流れている。真っ白だったはずの枕に、禍々しい赤が染^しんでいた。

その鮮やかすぎる赤と白の彩色に、僕は吐き気を催した。なに、これ。なにがどうなったの？

僕は目の前が真っ白になるのを感じた。全身の血がさあっと温度を失くし、直後に物凄い速さで自分の心臓が波打つ音を僕は聞いた。どうしよう。どうしよう。何で、彼が息をしていないの？

銀色だったはずの彼の瞳は、濁った灰色になっている。それは間違はなく、彼が死んでしまったということを示していた。

そう、死んでしまったんだ。リイを生かすための唯一の希望が死んだ。これでまた、リイが遠くなった。僕はこみ上げてくる涙を抑え切れなかった。

どうして、どうしてこんなにも上手くいかないの？僕はリイに会いたideけなんだ。なのにどうして、彼は死んでいるの？ちゃんと帰してあげるっていったのに。あれは嘘だったけど、ちゃんとひっかかってくれると思ったのに。

リイを生き返らせるには混血児の魔力が必要なんだ。だから調達してきた、それだけのことなのに。どうしてそれだけのことすら上手く行かないの？僕の何がいけないっていうの？

リイに会いたいんだよ。

明日にでもリイが生き返って、一緒にここで暮らしていけるって夢見てたのに。そんな明るい夢でさえ、奪われなければならないの？僕には、夢みることさえ赦されないの？何でなの。リイに会いたいよ、会わせてよ。もう一度会うことくらい、赦してよ。おねがいだよ。

僕はもう、何で、としか考えられなかった。何で、何で、何で。頭の中には、その単語だけが渦巻いている。

近い将来リイに会えると、僕は思っていた。なのに、リイに会う

ための道具がなくなってしまった。

流れる涙をぬぐい、僕は立ち上がった。この人に何があったのか、確認しなくちゃ。そのうえで、次の実験台を探そう。そうだよ、きっと探せば幾らでも被験体は見つかるはずだ。僕は自分にそう言い聞かせ、ひとりだけで検死を始めることにした。

僕は、彼を冷静に見た。じつくりと、外傷が何処にあるのか見た。口の中を覗いた時、彼の死因が失血死であることを僕は確認した。彼は舌を噛み切って死んだんだ。

ふと彼の両腕をみると、手首に何箇所もかきむしった後があった。これは、自傷行為のあとなのかな。

多分彼は、この白いだけの出入り口がない（ようにみえる）空間で、自分を見失って死んでしまったんだろう。発狂しちゃったんだね。僕はリィの声を幻聴で聞いたから、助かったようなものだった。尤もあれば、幻聴なんかじゃなくてリィの幽霊だったのかもしれないって最近では思うんだけど。

僕は笑った。腹を抱えて笑った。発狂して自殺した彼と同じように、僕も狂っていたのかもしれないなかった。

どうして僕の計画の邪魔をするのさ？ 何で自殺なんてするの。生きていれば君は、ちゃんと僕の役にたつことができたのに。

君はどうしようもない馬鹿だよ。使い物にならないよ。というか、使い物になる前に死なれちゃったからそんなこと君に言っちゃって仕方ないんだけどね。

僕は笑いつかれて、壁にもたれてずるずるとその場にへたり込んだ。そうか、この人は壊れちゃったんだね。今になってやっと、最高権力者の本当の心がわかった気がした。

部下を取られることと被験体に死なれることは全く違うことだ。だけど僕が感じた、この全てに裏切られたようなマイナスの気分を、きっと彼も味わったんだろう。

僕はゆらりと立ち上がり、しもべたちを呼んだ。そして、彼の死体を芸術品へと変える作業をやらせたり、部屋を片付けさせたりし

た。しもべたちに全てをやらせると、僕は力なく項垂れながら部屋に戻った。

ああ、またやりなおしだ。最高権力者が死んだときと、また同じ状況になった。ふりだしに戻ってしまった今、僕はどうすればよいのだろう。

混血児は、調べたところ彼しかいなかった。他の混血児たちは、目立たないようにひっそりとくらしているんだろう。だからといって僕が町に出て行ってすれ違う人々の顔をじっくり眺めるわけにもいかないだろう。

僕はあることを思いついて、しもべたちをもう一度呼んだ。そして、今は芸術品へと姿を変えた彼の住所を知らせて、しもべたちをあの港町に送る。

一週間がすぎる頃まで、彼らは戻ってこなかった。その一週間の間にノーチェやセルジたちが大分ここになれて、僕との仲も深まったということを忘れてはならない。だけど、僕はその一週間がもどかしくてならなかった。

僕は水晶をつめたチューブを何本も何本も作って、一週間のあいだずっと焦燥をはずめ続けた。リイの水槽と同じサイズの水槽にそれをつないで、保存液も満たして、あとはリイを移し変えて魔力を加えるだけという状態にした。こうやって準備をしていれば、焦りも苛立ちもおさまったから。

やがてその時はきた。いらいらしながら部屋の中を行ったり来たりして、もやもやした感情をはずめようとしていた時のことだった。

「明焰様、連れてまいりました」

部屋のドアの向こうからしもべの一人が僕にそうつげたとき、きつと僕はどうしようもない間抜け面をしていたとおもう。早速一階の部屋に向かってみると、あの被験体を生み育てた夫婦がいた。

「せんせい？」

彼らの第一声がそれだった。僕は首を横に振り、それから口許に軽く笑みを浮かべる。

「ねえ、魔力をちょうだい。それから貴方も、その血をちょうだい」
あの被験体の両親に向かって、僕はそう言った。そうだよ、僕の
この手で人工魔力を作ってしまった方がいいんだ。

僕は怯える夫婦を見て、うつすらと笑みを浮かべたままでいた。

「君は、何を言っているんだ？」

夫の方がそういった。妻の方は不安げに夫の腕にしがみついている。
僕はそんな二人を見て、なおも迫った。

「ちょうだいって言ってるんだよ。くれなきゃ奪うよ」

そう言いながら指をぱちんと鳴らすと、おそろいの白衣に身を包
んだ僕のしもべたちが現れる。指鳴らしたら来てねって、前に教え
たことがあったんだ。だから来てくれた。

夫婦は竦みあがり、ついに妻の方が泣き出した。この人がエルフ
だね。

「最初に奥さんからにしようか。連れていって」

僕がそう指示すれば、しもべたちは泣き叫ぶ奥さんを十階にある
研究室に連れていった。そこで彼女の血を貰うんだ。そして、次に
旦那さんの血も貰って混ぜてみる。

本当はもう一回彼らに息子を作ってもらうっていうのが一番いい
方法だとおもう。でも、生まれたばかりの子供から魔力を吸い取っ
て殺すなんて流石に僕でもできないよ。ちょっと残虐すぎると思う。
僕にも少しくらいは、生物を大事にする心が残ってるからね。

それに、生き残った夫妻が発狂するって事も考えられるし。奥さ
んの方が狂ったら、魔力を暴走させると思う。そんなことになって
しまったら困る。この研究所、二度目の建て替えをしなきゃならな
くなるよ？

場合によっては近隣のビルも破壊されてしまうかもしれないから、
建て替えどころの騒ぎじゃなくなると思う。

「かえせ、妻を返せえっ！」

叫びながら旦那さんが僕のしもべに掴みかかった。僕は旦那さん
も一緒に研究室まで連れて行くようにしもべに指示して、のんびり

と歩いた。

やった、またリィに近づけた。でも、最初は実験をしなくちゃね。だから、彼らが一番生き返らせたいと思ってる人で実験しよう。それで大丈夫だって立証できたら、リィを蘇生させるんだ。

僕はしもべたちに命じて、最新の芸術品をチューブ付の水槽に移させた。そう、それは舌を嚙んで自殺した彼。ご両親が一番生き返らせたいと思ってる人なんでしょ？ これで彼が生き返ったら、予定通り混血児の実験も出来るしね。

実験室はとても広く、標準的な学校の教室二部屋分くらいある。僕はそんなだだっ広い実験室に、そっと足を踏み入れる。中には、三十人あまりのしもべと二体の被験体がいた。

そして、自殺したあの人のホルマリン漬け。チューブの通った大きな水槽に移されているから、すぐにでも実験が始められる状態だ。僕は、ウサギの蘇生に使った小さな水槽を持ってきて、そこから伸びているチューブを被験体が入った水槽のチューブとつなげた。ここに魔力のもととなる血を入れるって言う考え。

人間とエルフの混血児が強い魔力を持っているのなら、人間とエルフの血を混ぜたものでも同等の価値が得られると思うんだ。

僕はノートとペンを用意して、実験の結果をすぐにまとめられるように準備した。そして、しもべに命令して彼らの血を抜かせた。

注射器、それも針が極太の物を使って血を抜いたから、二人ともひどく暴れた。僕はそれを押さえつけるように下僕に命令すると、彼らのうちの一人が採血が終わった注射器を持ってきた。

先に人間の血をいれる事にして、注射器の中身をウサギの蘇生に使った水槽のなかにあけた。そして、エルフの血を混ぜて蓋をする。一分、二分。僕は真面目に秒数まで数えて、“その時”を待った。だけど、僕はふと異変を感じたんだ。ピシッと音が聞こえた。これは、硝子の水槽にヒビが入る音？

僕はノートを放り捨て、その場から走って遠ざかった。すると。後ろで、物凄い音がした。形容しがたい音だけど、硝子が砕け散

る音と水が床に流れ出る音、それから何かはぜる音がまざった感じだ。

背中に何か液体がかかるのを感じて、僕は恐る恐る後ろを振り向いた。とたんに、おぞましい光景を目にすることとなった。

床いちめんに飛び散った保存液、そして血。僕は息を呑み、その場に座り込んでしまう。腰が抜けて立てなくなったんだ。

その血が彼の両親の血なのか、はたまた彼自身の血なのかはわからない。なぜなら、床一面に飛び散っているのは保存液や血だけではなかったから。

彼もまた、肉片と化してそこに散らばっていた。きらきらと輝く硝子の欠片と一緒に、筋肉や神経の組織や骨をむき出しにした肉片がそこらじゅうに散らばっている。

ふと足元に目を落とし、僕は今度こそ大声を上げた。そして無我夢中で後退り、震える唇を引き結んで生唾を飲み込む。

僕の足元には彼の頭がころがってたんだ。虚ろに見開いた目は左右で全然違う方向を向いている。

弛緩した口からはだらりと舌が垂れていて、恨めしげなその姿は無言で僕を責めていた。お前のせいだ。そう言われてる気がした。実際、僕のせいだけだ。

彼の虚ろな双眸を見ると、優しかった酒屋の店主の姿が蘇ってくる。お前のせいだ。彼もまた、僕をそうやって責めていたのかもしれない。

あのときは気づく余裕なんてなかったけれど、今なら解る。僕、とんでもないことをしていたんだ。今までずっと。年数にして、六年間も。息を荒げながら、僕はそのまま実験室の壁までさがった。

「ああああっ、うあああっ！」

もはや意味なんて成さない叫びを上げながら、それでも十分に僕を恨んでるんだと解らせてくれるほどの迫力で、奥さんの方が向かってくる。

手には手術用のメス。きらりと蛍光灯の光を反射して、銀色に煌

くその凶器。レンティーノが過去に、そんなもので何人も研究員を殺してしまったことがあったね。

僕もここで殺されるんだろうか。同じ道具を使う人なら、どちらかというと僕は過去のレンティーノに殺された方がましだと思う。

この人には、きつと何度も挟られる。滅茶苦茶に刺される。死んだ後も執拗に刺され、刺され、刺され、きつと死体は原型を留めなくなるだろう。それこそ、そこらじゅうに転がってる肉片みたいに。怖いよ、リィ。僕、リィに会えないままこんなところで殺されるのかなあ。誰か助けて。助けて、お願い。こんなところで死にたくないよ。

だけど足はすくんで立ち上がれないし、メスを握り締めた奥さんはもう僕に手がとどくほど近い所にいる。

「いつ、いやだっ！」

叫んだ瞬間、腕を深く切りつけられた。僕は攻撃をともに受けてしまつて、床に倒れこむ。傷口が火を噴くように痛み、火ではなく血を噴きだした。

切られた腕を抑えて圧迫止血を試みたけれど、容赦なく次の攻撃が来る。指先に鋭い痛みが走った。

この人、狙うのがとっても下手だ。だから僕は、じわじわと痛みつけられながらそれでもまだ死なずにいる。涙が溢れてきた。痛いよ、怖いよ、苦しいよ……

肉片と保存液で汚れた床を転げ回って、僕は出来る限り逃げようとした。けれどそれも、そう長くは続かなかった。

奥さんは僕を足でふみつけて押さえ、大きく腕を振り上げた。僕は泣きながら、ぎゅっと目を閉じた。

命運、つきた。

第十七話 襲い来るのは（前書き）

この話は特にグロテスクで暗いです。ご注意ください。

第十七話 襲い来るのは

もうおしまいだ。僕はぎゅっと目を閉じて、襲い来る最期の痛みを受けようとした。

……。

けれど、いつまでたっても痛みは襲ってこなかった。僕がそっと目を開けると、奥さんを背中から抱きすくめるようにしてレンティーノが押さえつけていた。

奥さんは暴れていた。けれどもうその喉からは声にならないほど高すぎる、息に近い声しか出せていない。

「やめてください。抵抗したら殴りますよ」

腕の中で暴れる奥さんをあくまで穏やかな声で脅しながら、レンティーノは彼女の手から手術用のメスを叩き落した。固い床とメスがぶつかりあう金属音が響き、僕はゆっくりと身を起こした。

ずきずきと痛む腕を自分の胸に抱きしめながら、レンティーノをぼんやりとみる。

「落ち着いて下さい、奥様」

こんな状況で落ち着いてくださいなんて、レンティーノもなかなか無茶なことを言う。絶対に落ち着けるはずがないよ、目の前で息子が吹き飛んで、ばらばらの肉片になったりなんてしてしまったら。奥さんは案の定暴れ続けたから、レンティーノがさっと表情をくもらせる。

「しっかり忠告したはずですよ」

どすっ！ 箆った重たい音が聞こえたと同時に、奥さんは細い身体をくの字に折ってレンティーノの腕に体重を預けた。

いつも非暴力的で、争いごとは（暴走した時を除いては）言葉で解決してきた彼が、彼よりも小さくて力も弱そうな女性を殴って強

制的に黙らせた。僕はそれに、衝撃を覚えていた。

「あ…… ああ、あ、ブライアン、わたしのブライアンっ」

今頃になって旦那さんの方がショック状態から解放されたのか、がつくりとその場に崩れ落ちる。そして、もはや彼の面影のかげらすらなくなってしまった肉の塊を手に取り、泣き崩れる。

レンティーノはポケットから白いハンカチを出して、僕の傍に屈みこんで傷口を縛ってくれた。彼は折角処置してくれようとしたんだけど、残念なことに効果は無かった。傷が深く、広すぎるから。

僕は旦那さんを見た。目が合った。数秒間かたまり、僕は旦那さんから目をそらせなくなった。

「ゆるさない」

涙を頬に伝わせたまま、旦那さんがゆらりと立ち上がる。僕はひとつと小さく声を上げて、レンティーノにすがりついた。旦那さんは何も持たず、素手で僕を殺しにくるようだ。

「私もゆるしませんよ、貴方がミンイエンを傷つけようとするのでしたら」

そういいつつ、レンティーノは優雅な動作で立ち上がった。優雅で切れがあるその動きを、彼がいつどこで身につけたのか解らない。「わたしの息子を返せっ」

叫びながら僕に向かってくる旦那さんを、レンティーノはすばやい動きで止めた。僕は壁に張り付くようにして、その様子を見ていることしかできなかった。

血が止まらない。圧迫止血もできないし、縛っても効果がなかった。僕はこのまま、ここで息絶えるのだろうか。そんな。まだリイに会っていないのに。

「それを望むのでしたら、実験に協力して下さい」

レンティーノは旦那さんの腕を掴んで捻り上げながら、そういった。旦那さんは奥さんと違って男性で、力もある。だから細身のレンティーノは振り払われて、肉片だらけの床に肩から着地する。

旦那さんが向かってくる。レンティーノなんて放置して、真っ直

ぐに僕をにらみつけて走ってくる。きっと今の彼の頭の中には、僕を殺すことしかないんだ。僕は自分自身をきつくかき抱いて、つよく目を閉じた。

と、その時。僕の耳に、はっきりと銃声が届いた。

目を開けてみれば僕の目の前に旦那さんが倒れこむところで、倒れた旦那さんの後ろには銃を構えたマーティンがいた。

「全く、無茶しやがって」

未だ硝煙が立ち昇っている銃をおろして、マーティンはレンティーノを助け起こしている。

レンティーノはさっきの衝撃で肩を痛めてしまったようで、マーティンに腕を引っ張られて痛そうに顔をしかめていた。

「ミンイエ、大丈夫か」

銃を腰にとりつけたベルトに通しながら、マーティンはにこりと笑った。僕はその瞬間、忘れていた涙を一気に溢れ出させてしまう。なんだろう。どうしようもなく安堵したんだ。

泣きながら頷くと、軽く頭を叩かれた。びっくりして顔を上げると、マーティンにもう一回叩かれた。

「どこが大丈夫なんだ？ 嘘いうな」

そういいながらマーティンは僕を助け起こしてくれた。彼は僕の腕の傷をすごく気遣ってくれたから、僕は激痛で叫んだりはしなかった。

僕は壁に寄りかかって、室内の地獄絵図をしかと目に焼き付けた。破損した硝子、飛び散った血と保存液、そして人体の原型を殆どとどめていない肉片。

人間とエルフの血を混ぜた魔力で、こうなることがわかった。多分、血同士を混ぜたからいけなかったんだ。実際に、血を使わずに魔力を流しいれた場合はちゃんと蘇生できたんだし。

壁に沿って歩いていくと、足でなにか踏んだ。慌てて足をどけてみると、潰れた指がみつかる。これは、手の指だろう。

僕は唐突に吐き気を催して、その場でしゃがみこんで嘔吐した。

むせ返るような血の臭い、そしてその気持ち悪さに更に追い討ちをかけるような凄惨たる風景。

所々に人間の形をしていた名残のあるパーツが転がっているのが、吐き気に拍車をかける。

血の臭いに吐瀉物としゃの臭いが混じり、気分は最悪だ。もう胃の中に吐くものはないというのに、吐き気がこみあげてくる。

暫くのあいだ僕は動けなかった。だけど、やがて壁を伝って再び歩き出した。早くここから出たい。

彼の死体が砕け散る瞬間をみなくて本当によかった。見ていたとしたら僕は、間違いなく実験室に近寄れなくなる。そして多分これからの僕は、肉料理を極端に嫌うようになると思う。

「医務室つれてってやる」

「いい、自分の部屋にいきたい」

マーティンの申し出を断って、僕はふらつきながら実験室を出る。実験室の外の空気を吸い込んで、やって血の臭いから解放される。

怖かった。苦しかった。気持ち悪かった。そして、痛い。痛みだけが現在進行形だ。吐き気は、清潔感あふれる匂いのおかげで大分和らいだから。なんでこんなことになったんだろうと思いつつ、僕は歩いた。

僕がいままでやり続けていたことは一体なんだったんだろう。海辺の町には行かない方が良かったのかもしれない。そうすればこの家族を犠牲にすることも無かったし、こんな痛いだけの苦しい思いをすることもなかっただろう。

あんな、思い出すのすら嫌になる光景だっで見なくてすんだわけだし、何度も殺されかけずにすんだ。

「どうしたの、ミンイェン」

その声に顔を上げると、ハビがいた。僕はハビを見上げて理由を説明しようとしたけれど、ハビが急に表情を変えて殺気立ち、僕の後ろに突っ込んでいったから何もいえなかった。

壁に何か叩きつけられて、何か硬いものが折れるような音がした。

振り返ると、奥さんが廊下に倒れていた。廊下の隅のほうには、銀色のメスが落ちている。

「ハビ、いい動きだった」

駆け寄ってきたマーティンがそういって、銃の引き金を何度か引いて見せてくれた。どうやら弾切れらしい。レンティーノはまた何処か痛めたのか、緩慢な動作で足を引きずるようにしながら実験室から出てきた。

ふたりとも、随分と酷くやられたみたいだ。マーティンだっていつもどおり感じの悪い笑みを浮かべてるけれど、その足取りは普段よりも数倍重たくなっている。

ハビはそんな彼らを一瞥すると、廊下に倒れている奥さんの前に立ってにやりと笑う。ああ、これは第二人格のハビだ。こういうハビは、かなり暴力的になるから見ていて苦しくなる。僕としては、いつでも穏やかなハビでいてほしいから。

でも時々こうやって別人格で日ごろの鬱憤を発散しておかないと、穏やかなハビが消えてしまうのも事実なんだ。だから僕は、凶暴なハビも否定しない。

「まだ死んでないよ。とどめ刺さなきゃね」

楽しそうに笑いながら、ハビは長い足で奥さんの身体を何度も蹴った。

凶暴なハビも否定しない。確かに僕はそういったし、その言葉は嘘じゃない。だけど、やっぱりこれは見るに耐えない光景だ。

僕はそつとハビから目を背けて、第二研究室を目指した。今見たハビのことはなるべく考えずに、碎け散って死んだあの人のことも考えずに、僕を殺そうとした二人のことも考えずに。

僕はすべての物から逃げるために、第二研究室を目指した。そして部屋に戻ると、ベッドに突っ伏して叫んだ。

喚きたかった。何もかも壊れてしまえばいいと思った。痛む腕を抱きしめて、流れてくる血を必死におさえながら、僕は喉が痛くなっても叫び続けた。

怖かった。狂いたくなった。そして悔しかった。僕は、リイをまたこの手から遠ざけてしまったんだ。

何度失敗すればリイが生き返るんだろう。これじゃあ、もう永遠に生き返らないかもしれないなんてことを思わずにいられないよ。どうしよう。どうしよう、本当にどうしよう。

困ったからって、苦しいからって、泣いている自分が酷く醜い。幼児じゃあるまいし、それくらいで泣いてるなんて馬鹿みたい。そう思っているくせにあふれ出る涙は止まってくれなくて、僕はどんどん負の感情に飲まれていく。

僕は何故、この世に生まれてしまったんだろうか。いつそのこと僕が存在なんて消えてしまった方がいいのかもしれない。

だけど僕が死んだら誰がリイを蘇生させるんだろう。それを考えると死ぬわけにもいなくて。僕はひとり、ベッドの上で身を縮めて丸まっていた。じくじくと疼く腕の痛みに耐え、きつく目を閉じる。

目を閉じると、両目から涙がこぼれる。僕はそのまま、こんなに痛くて辛い状況なのに寝入ってしまったていた。泣き疲れたんだと思う、多分。

夢の中で僕は、なじみの酒屋にいた。そして幼い僕は、再びあの悪夢のあとをたどる。父親を刺したときの嫌な感触。頬を濡らす生暖かで忌まわしい赤。

倒れたリイが血の海に沈む。鮮やかすぎる赤と、白すぎるその肌。僕は錯乱し叫んだ。リイは血の海の中で、柔らかに微笑む。ただ穏やかに、それでも『生きたいよ』って顔で。

悪夢のスイッチが入ってしまったのは、このときから。僕はこの日から、毎夜毎夜同じ夢をみるようになった。

よごと襲い来る血塗られた悪夢。眠るのが怖い。夢をみずに眠ることが出来たらどんなに楽だろう。

僕はその日、部屋から一步も出なかった。だけどどうやったのか、レンティーノが部屋に入ってきた。

「傷の具合を見せてください」

彼はそういって、悪夢に怯える僕に近寄ってくる。僕はレントイノをぼんやりと見て、それからまた視界がぼやけてくるのを感じた。

懸命に涙をこらえる僕の腕を取り、レントイノは丁寧な動作で切り裂かれた袖をまくってきた。そして、研究室の内部にあった救急セットを持ってきて僕の腕を消毒しはじめる。

「悪化してしまったら、腕が動かなくなるかもしれないですよ」
半分は責めるように、でも半分はとても心配そうに彼は言う。僕は無言で彼の指を眺めていた。白くて細い、綺麗な形の指。指先にだけほんのりと赤みが差していた。爪の形も綺麗だけど、彼はそれをいつも短く切っている。

その綺麗な手のことを、『本当に何も知らない手だ』と誰もがいうだろう。働けばまめができたり、指が太くなったりする。だから大人は誰もが綺麗な手をそう呼んだ。

リイだって、近所のおばさんに「あんたは本当に何にも知らない綺麗な手をしてるねえ」とよく言われていた。実際は、炊事や洗濯をやってばかりいるせいでその手はとても荒れていた。

ここにあるレントイノの手も、実際はリイの手とそんなに変わらないくらい荒れているんだろう。綺麗に見えるだけで、レントイノだって散々苦勞してる。なのに僕は、いつも彼の苦勞を増やすことばかりしているんだ。

ごめんね、レントイノ。

「リイシュイさんは絶対に生き返りますよ、貴方がこの先に何度でも実験してゆくのでしたら。ですが貴方が諦めてしまっっては、リイシュイさんは永遠にあのままでしょうね」

口調は優しいけど強い意志を持ったその声で、レントイノは言った。そして、僕の腕に包帯を巻いてくれる。切られた指には絆創膏を巻いてくれた。

「貴方には、リイシュイさんをもう一度この世に連れ戻したいと言

う気はまだあるのですか」

穏やかに、ただ優しくそう訊かれた。僕は静かに頷いた。何度も、何度も。

生き返らせたよ、何としてでも。リイをこの手で蘇らせて、また一緒に暮らしたいんだ。僕は六年の間にとっても変わったし、リイの身長もを追い抜いてしまった。けれど、本質的には十歳の頃から全く成長をしてないと僕は思う。

僕の時間は、リイを失った日から止まったんだ。いくら知識を吸収しても、いくら体つきがかわったとしても。僕の時間はリイが微笑まなくなったあの時から止まってしまっているんだ。

待ってるんだ、時計が動き出すのを。時を止めてしまったのはリイだけじゃなくて、僕だってそうなんだ。

だから、止まってしまったところからまたやりなおそうよ。二人揃って時を刻もう、歳を取っておじいちゃんになるまで。そして死に別れるまで、ずっとずっと一緒にいよう。

もう怖い父親もいなくなった。代わりに酒屋のおじさんもなくなくなってしまったけれど、僕にはリイだけいればいい。

リイ、きみが生き返ったら僕の大事な人たちを紹介するね。皆、きみが生き返るのを僕と同じように待っていてくれるんだよ。

だからリイ、もう少し待っていて。絶対にきみを生き返らせてみせるから。

第十八話 夢追い人

十七歳になった。あれから研究は少しずつ進展をみせはじめている。

本当にほんの少しの進展だけど、でも全く進歩していないわけじゃない。最近になって、エルフの血を使って蘇生を試みる時は、血を直接使うのがタブーだと言うことが解った。どんなことをしても、どんな状況でしても、血を直接使った実験はことごとく失敗した。

血が勝手に暴走し、被験体が臓腑をぶちまけて碎け散って、飛び散った硝子の破片で僕自身も傷をおう。何度もそんな場面に遭遇してしまった。やっぱり僕は、肉料理が極端に駄目になったよ。

マーティンは人を洗脳する魔法を覚えたといっていた。その魔法で操ってもらったエルフに魔力を使わせたところ、生き返るか生き返らないかの所まではちゃんと行った。僕は勿論、躍り上がる勢いで喜んだよ。操られているエルフを激励して、どんどん魔力を注ぎ込ませた。

だけどその実験は失敗してしまったんだ。エルフが魔力を使い果たし、死んでしまったから。やっぱり混血児の強い魔力がなきゃダメなのかな。とぼとぼと廊下を歩いていると、ノーチェに出会った。「あら、ミンイエン。元気ないね」

ノーチェはいつも僕に声をかけてくれる。その明るい笑顔のおかげで、研究所の中も大分和んでる。洗脳されているとはいえ、研究員たちにはちゃんと意思がある。だから、ノーチェに特別な好意を持っている男性も少なくはない。だけどノーチェは、言い寄ってくる男を片っ端から振ってひとりでいる。もしかしたら、どこかに彼氏がいるのかもしれないね。

僕はノーチェを見る。ノーチェは僕と身長が同じくらいで、ヒールを履けば僕を抜かすくらいの子だ。

今の時代、女の子も長身で当然だって誰かが言っていた。だけど

この場合、多分単純に僕の背が小さいからノーチェに抜かされてるだけだと思う。

「また失敗しちゃった。まだ足りないんだ」

そういつてみれば、ノーチェはふわりと優しい表情を浮かべる。どきっとした。だって、こんな美人が僕のとかなりで僕に向かって微笑んでるなんて。緊張しちゃうのも無理ないことだと思う。

そんな僕の気持ちを知ってか知らずか、ノーチェは優しい表情のままやわらかな声で言った。

「人は失敗の数だけ大きくなっていくの。ミンイェンも、きつと失敗の数だけ階段を登ってるよ。だから元氣出して」

失敗の数だけ大きくなっていく、か。それなら僕は、かなり大きくなれているはずだ。そう思うと、段々リィに近づいていけている気がして嬉しくなった。

「ありがと、ノーチェ」

彼女にそう言って笑ってみれば、本当に嬉しそうな笑みが返ってきた。最近、ノーチェはよく笑うようになったと思う。何でだろうね。嬉しいことあったのかな。

「私もたくさん失敗した。でも、今日オーディションに合格したの！」

嬉しいことがあったのかなという予想は的中した。そうか、夢がなかったのか！ よかったねノーチェ、本当におめでとう。

僕の夢はまだかなえられてない。だけど僕も、着実に夢にむけて進んでいるよ。リィと一緒に月を見る。それが、今のところ僕のただひとつの夢。

「よかったね、おめでとう」

心からそう思って、僕は笑みを浮かべる。するとノーチェは無邪気に笑い、ふと足を止めて廊下に飾ってあった絵画の額縁の角度を直す。この絵は研究員の誰かが書いたもので、廊下が殺風景だからといってノーチェが飾ったものだ。

「これからセルジのところに行くの。セルジに励ましてもらえたか

ら、私は頑張れた。あの人、私より年上だっと思って思えないくらいやんちゃなんだよ。そのくせ、時々すごく大人びたことをいうの」

楽しそうに笑いながら、額縁から少し離れて角度を見て、また微調整するノーチェ。セルジのことを語るとき、ノーチェの表情が本当に優しいだった。そして、とてもいとおしげに見えた。

僕はちよつと考えてから、呟いてみる。

「セルジのこと好きなんだね」

ノーチェは、一瞬動きを止めた。そして、僕の方を振りかえって軽く頬を赤らめる。

「内緒よ、皆には。勿論セルジにも」

とりたて特徴的なところがないセルジだけど、内面は誰にも真似できないほどの情熱と信念でできている人だ。ノーチェとセルジは結構つりあっているんじゃないかな、と思う。

ちよつとセルジがうらやましいな。こんな美人を惹きつけることができるなんて。だけど、僕はノーチェとは友達のままでいいや。

「セルジのどこが好き？」

興味と好奇心に任せ、僕はノーチェにそう問いかけた。するとノーチェはふと無表情になり何かを悩んで、それからまた柔らかな表情に戻る。

「言いきれないな。でも、ひたむきに夢を追いかけてる姿にどきつとしたの」

今のノーチェは、完全にただの女の子だった。だけどノーチェだって、僕の実験を手伝ってくれたりするんだ。

そんな時、彼女はこんなに綺麗な笑みなんか浮かべてくれない。ノーチェはセルジの傍だったら、本当の自分に戻れるのかもしれないね。

恋をすることは人を変えること、なのかなあ。僕にはよく解らないや。だけど確かに、セルジが夢を追いかけている姿ってとても格好良いって男の僕でも思うよ。恋はしてないけど。

人によってはセルジのことを、格好悪いとか無様だと言う人もい

るだろう。もっと楽な生き方だってあると言う人だっているだろう。だけど、自分の信念を貫いて家族まで捨ててここに転がり込んできたセルジは、少しも格好悪くなんてなかった。

僕は、ノーチェと並んでのんびりと廊下を歩いた。セルジのいる部屋の近くにきたから、お邪魔な僕は退散する。

これから二人でべたべたするんだろう。まあ、それは別に羨ましくもなんともないな。ノーチェみたいな人に好いてもらえるのはとてもいいと思うけど、だからってべたべたするのは好きじゃないから。

僕は歩きながら、色々なことを考えていた。混血児を探さなきゃ。エルフの血じゃ、魔力が弱すぎるんだ。

どうすればいいかな、まずはネットに頼ろう。銀色の目をした人を探すんだ。何としてでも。

僕は部屋に帰ってパソコンの電源をつけると、インターネットのブラウザを開いた。現時点で僕が扱えるのは、ディアダ語とエフリッシュ語。あとはコンピューター言語。高水準言語なら大抵の種類をマスターしたよ。でもまだ全ての関数を網羅してるわけじゃないから、ちゃんと勉強しないとね。まあ、こんなところかなあ。

さすがにコンピューター言語で検索かけても意味ないから、実質的にはディアダとエフリッシュの二つの言語しか使えない。だけど、その二つの言語を調べつくすつもりで頑張ろう。

『銀色の目』や『銀目』、それから『銀の瞳』……他にもたくさん。そんな言葉で検索をかけ続ける。出てくるのはファンタジー物の小説サイトやイラストサイト、それから魚類図鑑のページばかり。首が痛くなってきて、僕は大きく後ろに反った。なかなか銀色の目をした人にめぐり合えない。

だけど、あるサイトで僕はやっと銀色の目をした人の情報を見つけた。そこは歌手志望のグレン（仮名か実名かは解らない）と言う人が運営しているサイトだった。

ディアダ語で構成されたそのサイトは、日記や掲示板、それから

彼自身が歌っている歌がメインの個人サイトだ。サイト名はナイトメア。全く、ナンセンスなネーミングだね。『悪夢』だなんて。

写真で見たグレン本人は金髪で青い目をしていたけれど、同じ写真に写っていた彼の友達がなんと銀色の目をしていたんだ。友達の名前は、クライドⅡカルヴァート。

僕は部下に情報を探ってもらった。その結果、グレンはおそらくラジェルナの田舎に住んでいるだろうと言うことが発覚した。

なおかつ、彼の友達のノエルと言う少年が飛び級で大学に入学したと言う話を日記から見つけた。この大学を調べれば、クライドのすみかが解る。僕は様々な大学のホームページをしらみつぶしに調べて回った。

結果、アンシェントタウンと言う小さな町にある大学のホームページに「異端の少年」という見出しでこの大学を卒業したノエルⅡハルフォードという少年のことが書いてあった。彼は現在十五歳。この冬に卒業したらしい。

まったく、グレンは本当に愚かな人だ。自分のことも他人のこと、こんなに簡単にネットに流してしまうなんて。まあ、おかげで助かったけどね。

感謝するよグレン。君が住んでいるのは、ラジェルナ国の山間部にあるアンシェントタウンだね。そしてそこに、君のオトモダチであるクライドⅡカルヴァートという混血児もいるんだ。リイを生き返らせるために必要不可欠な、混血児がいるんだね。

僕はグレンのサイトに掲載されていた写真をプリントアウトした。そして、クライドをじっと見てみる。本当に銀の目だ。僕が欲しいと思いつけている、銀の目だ。

それにしても彼、本当に楽しそうに笑ってるね。とても幸せそうだ。リイが生き返ってくれば、僕だって負けなくらい幸せそうな顔で笑ってみせる自信があるよ。

だからクライド、僕にその魔力をぜんぶちょうだい。

そうしたら僕は、君をたくさん褒めてあげるから。君にたくさん

感謝してあげる。君にたくさん良い思いをさせてあげる。

ね、だからちょうだいよ。くれないなら奪うよ。どうしても欲しいんだ、リィを生き返らせたいんだ。

第十九話 派遣社員

「誰かアンシエントタウンに行ってくれない？」

その日の夕方、『会議室』で僕は言った。いつものメンバーであるハビとレンティノとマーティンに新参のセルジとノーチェも加えて、僕らは混血児捕獲のための会議をしていたんだ。

皆、真面目に聞いてくれた。洗脳してもいないのに、まじめに僕の話聞いてくれた。

そして僕の話聞いたマーティンは、神妙な表情で何度か瞬きをしてこう言った。

「そこは、俺の故郷だ」

え、それ初耳！ マーティンの故郷って、あのアンシエントタウンなんだ。ということは、クライドのことを…… してるはずがないか。

マーティンがアンシエントタウンで暮らしていたのは、十一歳まで。だから知っていたとしても、クライドはその頃とっても小さかったと思う。議論の結果、僕はマーティンにあの町へ行ってもらうことにした。

マーティンが留守の間に、僕はいろいろとやらなきゃならないことがある。ほら、前に碎けてしまった水槽を改良してもう一度作らなきゃならないし、水晶の欠片が入ったコードも調達しなきゃならない。保存液もまた作らなきゃね。

実験台はいつでも調達できるから良いとして、会社の方はしっかりやっておかないと資金調達が出来ない。

勿論、本業は研究員だよ。でも、社会に公開してる僕の姿は、何てたって社長なんだ。会社をしっかり経営しなきゃ、研究も続けられなくなっちゃうし。

最近開発した新しい風邪薬の売り上げも好調だし、CMもテレビでじゃんじゃん放送されてる。けれど、気を抜いていたらライバル

社に売り上げを持っていかれちゃう。

やること、いっぱいあるね。だけど全部こなして今までやってきた。これからも、僕はこんなふうに多忙な人生を送るのだろう。

リイが蘇生したら、リイを社長にしてあげたいな。でも、社長の仕事も結構大変なんだよね。やっぱり、リイの人生はリイに選んでもらおう。それが一番いい。

次の日、朝起きてすぐに誰かが僕の部屋に来た。ドアを開けると、白い壁をくぐってレンティーノが入ってくる。

手には一輪の薔薇の花。真紅のその花は、僕が彼とであった日に友情の印として貰い受けたものと同じ。レンティーノの家には温室があつて、そこなら一年中薔薇を見ることができるといふ。彼はわざわざ家に行つて薔薇をとつてきてくれたんだ。

彼の家は、ハビの喫茶店がある島にある。ミンは蘇生する前まで、そこにすんでいたという。レンティーノは、ミンの死後正式にその家を受け継いだ。だから、時間に余裕があるときに時々家に帰つたりしているんだ。

とはいつても、レンティーノはここで暮らしている方が楽しいといつていたんだけどね。

「ミンイエ、お誕生日おめでとうございます」

薔薇を差し出してきながら、レンティーノは言う。あの日と同じシチュエーション。

だけどレンティーノは僕を数段抜いて長身になったから、あの日と同じように微笑んでいるその瞳ははるか上の方にあつた。

僕は薔薇を受け取つて、何も入っていない花瓶にそれを挿した。

そして、思い出したように言う。

「今日だったね、そういえば」

適当に決めただけ。それでも、この日は僕の特別な日。

四月の始まりの日は、僕の誕生日。この日に生まれた人は、学年で一番若い人間に該当する。だから僕の誕生日はこの日が妥当なんじゃないかと思つて、僕は四月一日生まれになった。

リイ、僕はリイがいない間にもう十八歳になったよ。リイが止めてしまった年齢を、もう三つも上回ってしまった。

年齢だけは成長してるけど、僕はまだまだ子供だよ。だからリイ、僕よりも幼い姿で生き返っても、リイは僕のお兄ちゃんदैいて。

「マーティン、早く帰ってきてくれると良いですね」

レンティノーはベッドのふちに腰掛けながらそう言った。僕も頷いて、レンティノーの隣に座る。

「うん、何だか皆が揃ってないと調子狂うんだ」

薔薇の花を挿した花瓶を枕元におき、僕はため息をつく。枕元にはリイもいる。

リイには、薔薇の花が良く似合った。だけど彼には、とても控えめで大人しい花も似合う。何でも似合う人なんだ、リイは。

だけど、間違ってもマーティンみたいに多数の女の人をとつかえひっかえして連れまわしているような印象だけは受けないな。

実際、リイは十五年生きていた中で彼女なんて一度も作っていなかったし。よく考えると、それって僕のせいだよね。僕がいたから、リイは恋なんてしてる余裕すらもっていなかったんだ。

ごめんね、リイ。

「そういえば、ハビが明日から一週間ほどカフェの方に行くそうです。多忙すぎるのでここに顔を出せないと、ハビは言っていましたよ」

思考に沈む僕を、レンティノーが現実世界に引き戻した。その言葉はとても現実的で、なおかつ衝撃的でもあった。

「ハビもいなくなっちゃうのかあ」

「ノーチェもです。コマーシャルの撮影に出ると仰っていましたから、恐らくハビと同じくらいここを空けることになるでしょう」

納得してしみじみした直後に更に衝撃的な発言を聞き、僕は頭を抱える。うわあ、皆どこかに行っちゃうの？

急に寂しくなってきた。マーティンもハビもノーチェもいなくなるなんて。残ったメンバーが不満なわけでは決して無いけれ

ど、抗議したくなる。

勿論、三人には仕事があるんだから無理を言うわけにもいかない。でも、やっぱり寂しいから。

「えーっ、マーティン早く帰ってきてえ！」

そう叫んでみれば、レンティーノはおかしそうに笑う。ため息をつく僕をよそに、暫くの間腹を抱えて笑っていたレンティーノ。彼にしては珍しい行動だ。

やがて笑いがおさまってきたところに、ずれた眼鏡を直しながらレンティーノは呟いた。

「私がいますよ。貴方は一人ではありません」

なぜだかその言葉は、胸にすっと届いてくる。乾いた大地に染み込む雨のように、穏やかに、しかし確実に。

僕の心になじんでいったその言葉には、確かに魔力があったと僕は思う。

「そうだね」

答えた自分の声は、自分の声だとは思えないくらい穏やかだった。僕はまだ頑張らなきゃ。寂しいとか退屈とか思っている暇なんてない。早く自分のやるべきことをやらなくちゃね。

それから五日位して、マーティンが帰ってきた。だけど、何故かげっそりとしていて口数も少ない。帰ってきたのはマーティンのみで、クライドの姿は無かった。

僕は、詳細を尋ねる前にマーティンに休養をとらせた。マーティンの部屋にお見舞いに行ってみると、彼はベッドの上で布団もかけずに眠っていた。

寝相の悪いマーティンは、ベッドに大の字になっている。乱れたパジャマの下から覗く彼の腹にはあばら骨が浮いていて、ろくに食べ物食べていなさそうにみえた。

僕は少なからず驚いた。以前のマーティンはとても健康的で、太ってこそいなかったけれどこんなに痩せてはいなかったのに。

今の彼の目の下にはくつきりとくまが出来ているし、眠ったその

顔はとても疲れているように見える。一体、マーティンに何があったんだろう。

相変わらず居心地が悪くなるポスターがべたべた貼られた彼の部屋に、僕は珍しく長居したと思う。だってマーティンの様子が尋常じゃないから。誰かが見ていないうちに手の届かないところへ行ってしまうそうで、僕は怖かった。

一週間近くも待って、やっと帰ってきた彼がこんなにやつれていたんだ。心配するのも無理ないことだと思わない？

僕はじつとマーティンを見つめていた。すると、今まで死んだように眠っていた彼が急に動き始めた。

「ううっ」

両手で自分の腹を抱きかかえるようにして、呻くマーティン。僕は咄嗟に身を乗り出して、マーティンの額に触れる。熱はない。

長らく呻いていたマーティンだけど、やがて落ち着いて荒くなった息をしずめる。彼が口を開くのを、僕はせかさずに待っていた。

「悪いな、連れて来れなくて」

申し訳なさそうな声と顔で、マーティンは言う。自分を責めているようだったから、僕は「とんでもない」と首を振る。

苦しそうな彼が目の前にいるから、混血児がどうこうよりも彼がどうしたのか気になった。大丈夫なのかな、マーティン。

「うん、それはいいんだよ。でもどうしたの？」

訊ねてみると、マーティンは無理に身体を起こそうとする。僕は慌ててそれを止め、寝たまま話すように言った。

それでも身体を起こそうとするマーティンは起き上がろうとして呻き、結局は僕が言ったとおり寝たまま話すことにしたようだ。

「町に入れなかったんだ、クソッ。弾かれた」

舌打ち混じりにそう言い、自分を罵る言葉を呟くマーティン。僕は彼の言葉から不可解な単語を見つけ、おうむ返しに問うてみる。

「はじかれた？」

彼は重々しく頷いた。

どういうことだろう、弾かれたって。まさか町の入り口に屈強な男がひしめきあっていて、それでマーティンは弾き出されてしまったとか？ そんなガードがあるなんて聞いてない。

「そうだ。見えない壁があった。何度も入ろうとしてみたがこのザマだ」

見えない壁、か。古い本で読んだ、結界みたいなものなんだろうか。この世に魔法があるぐらいだから、そういうものもありそうだから。考え込む僕をよそに、マーティンはひどく自虐的になっていた。

何度も何度も自分を蔑む彼は、苛々をぶつけようと枕に頭を打ち付ける。

僕はそんな彼をそつと寝かせて、何も言わずに傍にいた。責めるつもりなんてないよ、大丈夫だよ。彼が自分を蔑む発言を繰り返すたびに、僕はそういった。

それでも彼はとても屈辱的な顔をしたまま、悔しげに虚空を睨む。何を言っても、何をしても、いくら僕が微笑みかけても、その表情が和らぐことはない。悲しくなった。折角マーティンを元気付けようとしてるのに。こんなの、マーティンじゃないよ。

マーティンはいつでもからつと乾いたドライな感じで、こんなにうじうじ悩んでいたりしない人だから。相当ショックだったんだろ。うな、町に入れなかったのが。

僕はそつと彼の部屋を抜け出して、レンティーノのところへ相談に行った。すると、思いも寄らぬ答えが返ってきた。

「彼が町に入れなかったのは、恐らく魔力を持っていたからなのですよ。アンシエントタウンには、魔力封じの結界が張ってあるという神話があるぐらいですから。彼はそのうち立ち直りますから、放っておきましょう」

人一倍心配性な彼が、マーティンを放っておこうといった。冷静に考えたら、確かにマーティンは芯が強い人だから放っておくのが正しいのかも思えてくる。

「次は私が行きましょうか、ミンイエ」

何が？　といいそうになって、僕はそれがクライドの捕獲のことだと気がついた。折角申し出てくれたけれど、レントイーノだって忙しいんだ。だから、今のところ一番手があいてるセルジに行ってもらう事にした。

僕はマーティンの回復を待った。マーティンは研究所内にある医務室で、栄養剤の点滴を受けていた。時々酷く頭痛がすると彼は言い、殆ど病室から出ない日々が続く。

十五日程度たって、やっとマーティンは歩き回れるほどに回復した。僕はセルジの会社での仕事をマーティンに代わって貰い、セルジを『おつかい』に出した。

マーティンが無事に治ってよかった。あとは、リイが生き返れば全てのことが上手く運んでいく。

早くかえってこないかなあ、セルジ。彼がクライドを連れてきてくれたら、僕はどんなお礼をすればいいだろう。そうだ、美容室を経営させてあげよう。

お金なら幾らでも手に入るんだ、だって僕は社長だから。後はセルジ本人が頑張って美容師になれば、セルジの夢がかなう。僕は、セルジの夢をかなえる手伝いをしてあげるんだ。セルジが帰ってくるのが待ち遠しくてたまらない。

今日は四月の二十日。アンシェントタウンまで片道で四日から五日くらいかかるようだから、四月の終わりごろになったら彼が帰ってくるだろう。

これから、カレンダーを見てにやつく毎日が始まりそうだ。

第二十話 すれちがい

待ちに待った四月三十日。今日には帰ってきてくれるだろう、セルジ。僕は待ち続けた。そわそわしながら、何度も外に出たり研究所に戻ったりを繰り返した。

やがて、夕方になって彼をみつけた。でも、彼はクライドを連れていなかった。なおかつ俯き気味で、僕が外にいるのに気づいていない。

「セルジ」

声をかけてみると、彼は駆け寄ってくる。そして、縋るように僕を見上げた。何度も何度も彼が謝るのを聞いて、僕はがっかりすると同時にクライドに対して少し不満を覚える。

どうして素直に捕まってくれないの？

「ごめん、みつけてこれなかった。町に行ってクライドの行方を尋ねて回ったんだけど……」

セルジは本当に申し訳なさそうに、しょんぼりとさういう。僕は少し自分に対して苛立ちを覚えた。あんなに一生懸命調べたのに、もしかしたらアンシェントタウンっていう情報は間違いだったのかもしれない。だとしたら僕は、無駄なことのためにマーティンをあんなにやつれさせてしまったことになる。

そんな。僕がしたことは、一体なんだったの？ 目の前からさあっと色が消えていった。

単色の景色の中に何があるのか判別することすら苦痛になり、僕は目を閉じて頭を抱えた。すると、セルジが意外な事を言った。

「彼は数日前から失踪中だったから、本人を捕まえることはできなかった。でも彼の家に行ってみたら、彼のおばあさんに会えたんだ。彼のおばあさんは、クライドが帝王の孤島まで旅をするって言っていたよ」

なにそれ、凄い情報じゃないか！ やっぱアンシェントタウン

で正しかったんだ、よかった。僕は決して無駄なこのためにマーティンをあんなにしたんじゃないかった。

「セルジ、ありがとう！」

叫びながら彼に抱きつく、通行人全員がいつせいにこっちを振り向いたので苦笑しながら彼から離れた。セルジは啞然として、それから完全なる青年であるその顔に少年らしい照れ笑いを浮かべる。

僕とセルジは研究所に戻る。僕は真っ直ぐ会議室に向かおうとしたけれど、翻る青い筋をみた気がして右側を見る。すると、こちらに背中を向けたマーティンが、忌々しげに壁を殴りつけているのが見えた。

「マーティン、会議室に来て！」

足を止めたセルジに先にいくように言うと、僕はマーティンに声をかけた。暫く僕に背中を向けたままでいたマーティンだけど、やがて僕が立ち去らないことに気づいたのか肩越しにこちらを振り返る。

だけど完全に振り返ったわけじゃなくて、ちらりと僕を視界の端に入れた程度。

「いかねえよ」

冷たく言い置いて、マーティンは去っていった。足音も荒く、途中で何度も壁を殴りながら。僕は言いようも無い苛立ちを感じ、マーティンの後を追いかけた。

走ってマーティンの後を追いかけて、彼の長い髪を引っつかんで止める。彼は即座に僕を振り返り、殴りかかってきそうになった。

僕は咄嗟に目を閉じ、膝の力を抜いた。かくんと膝が折れて、僕はその場に座り込む姿勢になる。

目を閉じてしまったのは、いつもの癖。でも、父親に殴られそうになった時にはこうやって回避したことがあった。

マーティンの腕は何も無い空を貫いた。立ち上がった僕はマーティンの顔を思いっきり睨みつけ、頬に一発平手を食らわせてやった。「てめえっ」

もう一発殴ってこようとするマーティンに、僕は更に平手打ちをした。僕は喧嘩で人を二度もひっぱたいたことなんてなかった。自分自身のしたことにちょっと驚きながら、僕はマーティンを睨む。

「マーティンの馬鹿！ 何怒ってるの？」

思いつきそう叫んでやれば、マーティンは僕にふいと背を向けた。その背中にさらさらと伸びているシャギーの入った長髪を、僕は再び掴んでとめる。

彼は振り返り、僕になんて興味をなくしたかのようにこう言った。「俺は馬鹿だ、大馬鹿だ、ミンイェン様のおっしゃるとおりだ。だから放つといってくれ。もう付きまとうな」

付きまとうな？ 僕はその言葉に愕然とし、マーティンを見上げた。

どういう意味、それ。マーティンは僕のことを、弟のように可愛がってくれてたじゃないか。なのにどうして？ 僕ってマーティンにとって迷惑な人間なの？

立ちすくむ僕をちらりと見て、マーティンは歩き始めた。手の中にあった髪がするりと持ち主に引っ張られ、僕とマーティンをつなぐものは何一つとしてなくなった。

嘘。マーティンが僕のことを嫌いになるなんて、思ってたなかった。引っぱたいたのがいけなかったの？ なら僕、ちゃんと謝るよ。

でも、何で怒ってるのか結局マーティンは教えてくれなかったじゃないか。

「マーティンなんて大っ嫌い！ バカバカバカバカ！」

頭にかつと血がのぼり、何の分別もつかなくなった。気づけば幼稚園児並みの稚拙な言葉で、僕はマーティンを罵倒していた。自分でも止められなかった。僕、やっぱり心は十歳のままかもしれない。

マーティンは振り返ることなく、僕の言葉に反応もせず廊下の角を曲がっていった。何も反応してくれないマーティンに、無性に腹が立って。そんなマーティンのことが何となく怖くなって。うるせえ、っていうただ一言だけでもいいから反応してもらいたくて。

僕は稚拙な罵倒を何度も繰り返した。

マーティンが曲がった廊下の角まで走って行って、彼の背中に向かって叫び散らす。

「何が『付きまとうな』だ、頼まれたって付きまとわないよ！ 馬鹿、マーティンなんか……」

死んじゃえ、って言いそうになって踏みとどまる。これだけは絶対に言っちゃいけない言葉だって、昔リイが言っていたのを漠然と思いつく。

どうして、何も上手くいってこないんだろう。僕は廊下の真ん中で俯いた。

マーティンを衰弱させ、栄養失調に陥らせ、やつれさせたのは僕。人生のうちの大事な十五日間を寝て過ごすことにさせたのも僕。そして、ついに僕は嫌われてしまった。

やっとわかった、僕が嫌われた理由。全部僕が悪かったんだ。なのに僕、マーティンを罵倒した。挙句、死ぬとまで言ってしまうようになった。

最悪だよ、僕。白い壁に手を這わせながら、僕はとぼとぼと廊下を歩いた。あふれる涙が頬を伝い、顎を伝って、ぽたぽたと廊下に落ちる。

マーティンに嫌われちゃった。この研究所に来てから、僕をずっと大事にしてくれた人なのに。

安心しきっていた。彼が僕のことをずっとずっと大事にしてくれるんだと、思いこんでいた。その過剰な自信にまかせて彼をぞんざいに扱ったがために、彼は僕から離れていった。

自己中心的すぎたね。こんなことじゃあ、僕も帝王とそんなに変わらないよ。

「付きまとうな」

彼のその言葉が、深く心に刺さったままにいる。僕は邪魔だったんだ。

本当はずっと、マーティンは僕の我儘に疲れてたんだ。気づいて

あげられなくてごめんね。マーティンの気持ち、全然考えてあげられなかった。僕は、なんて浅はかなことをしてしまったんだろう。付きまとうなって言われちゃった。拒絶されちゃった。大切な人なのに。大事に思ってるのに。なのに、一時の感情に任せて僕は彼に酷いことをした。

「ミンイエン、どうしたの」

思考を打ち切って顔を上げると、ハビがいる。その穏やかだけど心配そうな顔を見たたん、僕は何だかとても悲しくなって彼の胸に飛び込んで泣いた。

まるで子供みたいだって、僕は自分自身をそんな風に思った。十八歳にもなって、友達に嫌われたくらいで泣くなんて。

でも、僕にとって友達はかけがえの無いものなんだ。一般の十八歳には家族がいるだろうし、恋人だっているだろう。だけど僕には友達しかいないんだ。何を差し置いても、友達だけは手放せないんだ。

僕を孤独に取り残さないようにと、いつも手を引いてくれる友達がいる。だから僕は前に進める。なのに、その暖かい手が急にひるがえってどこかに消えた。

手を引かれることが当たり前だと思っていた。強く握りすぎていた。自分を導いてくれる、彼の手に爪を立ててしまっていた。そして僕は暗闇にひとりぼっちになった。リィを亡くした直後と、全く同じ状態になった。

「会議室を空けるように僕から言うから。おいで、ミンイエン」

ハビは文句の一つも言わずに僕を自分の部屋に呼んでくれて、理由も聞かず慰めてくれる。僕はハビの後をとぼとぼについていった。考えるのは、マーティンのことばかりだった。

「放つといってくれ。もう付きまとうな」

ここまで言われちゃったら、もう僕はマーティンと仲直りできないよ。マーティンは僕といることに嫌気が差したんだ。きっと我慢の限界なんか、とっくに超してたんだろう。

ハビの部屋にいたレンティーノとセルジは、ハビの一言で出て行った。現時点では来ていなかったノーチェにも、セルジから来ないように言うらしい。

ハビはいつもどおり穏やかな顔で、僕の頭に重たい手を乗せてくしゃくしゃと髪をかき回している。その仕草がマーティンと妙に重なって、僕は止まりかけた涙をまた流してしまう。

だって、ショックだった。マーティンの一言で、僕の全人格が否定された気がした。

「ハビい……」

暖かくて、僕をしつかりサポートしてくれるその手。その感覚が心の奥にあった硬い壁をいとも簡単に溶かしてしまう。

僕は耐え切れなくなつて、ハビに泣き言を垂れた。心のうちを全部ぶちまけた。

辛いよ、苦しいよ。もう何もできないよ、僕は捨てられたんだ。

僕はそう言って頭を抱え込む。するとハビは、くすつと笑う。

「ねえミンイェン、マーティンは何で怒っていたと思う？」

優しく、心の奥のほうにすつとなじんでいくその低い声。訊かれたのは、彼には答えが解っている問い。この問いの答えは、勿論僕だって痛いくらい解っている。

「僕が我尽すぎたから」

そう答えると、ハビはにっこりと笑った。そして、首を横に振る。あくまで優しく、決して僕を馬鹿にはしていない笑み。この笑みがあるから、彼の隣はとても居心地がいい。

「君の力になれなかったことを今でも悔いてるんだ。だから自分に対して怒ってるんだよ、彼は。その上自分が出来なかった仕事をセルジがやっちゃったからって、セルジに嫉妬してるし。八つ当たりだよ、ただの」

ハビはそういって、僕の背中をぽんと叩いた。いつもこうやってハビの手に背中を押されて、僕は次のステップに送り出されているような気がする。

勿論ハビは親友だけれど、父親のいない僕の保護者的役割をはたしてくれるお兄さんでありお父さんなんだ。彼は僕をいつも支え、教育してくれる良い大人。

こうやってハビに教えてもらえたことを、僕はちよつとでも生かせるようにしていきたいな。ハビ、ありがとう。

「八つ当たりなんて一過性だよ、ミンイェン。明日になれば、気まぐすそうに謝ってくると思うから」

ハビはそう言って、僕を見て目を細める。訝しげだったり嫌そうだったりするわけじゃなくて、とてもいとおしそうな表情だ。僕は涙を拭いて、頷いた。そして、暫くハビと話をした。

泣いていたことが解らなくなるくらいまで目の腫れが引いて、顔の赤みもすっかりとれたから、僕は予定通りこの会議室で会議を行うことにした。

いつものメンバーはすぐに集まってくれた。マーティンはこなかったけれど、僕は会議を始めることにした。

僕のわがままに、皆はいつでも笑顔で付き合ってくれる。だけど、いつ誰がどんなことをきっかけにマーティンみたいになってしまうか解らない。だから僕は、なるべく誰にも心の中を話さないようにしようと思う。

僕は地図を持ってきて、机の上に広げた。そして、アンシェントタウンの辺りに丸をつけた。帝王の孤島は、大体この辺りだろうという大まかな場所をレンティーノが知っていたので、そこに丸をつける。

様々なルート考えた。彼らの足の速さも考えて、アンシェントタウンを中心に半径数十キロの円を描く。山の中か、山沿いの町か、それとも海辺の町に出ているかもしれない。

だけど、数日で歩ける距離なんて知れている。僕らは彼が山を降りる時間を簡単に計算し、そこで捕獲することにする。

どうしてかって？ 山の中でネズミを捕まえるなんて、難しいよ。また友達を衰弱させたりするのは絶対に嫌だから。

クライドが孤島を目指す最短ルートを選んだとしたなら、下山は大体五月の二十三日か二十四日頃になるだろうね。その頃、下山してすぐの場所にある漁師町に彼がたどり着いているだろう。

待ち伏せして、そこでクライドを捕れば良い。そしてリイを生き返らせるんだ、一刻も早く。リイと一緒に暮らしてゆける日が近づいたことを思うと、言いようも無く嬉しくなつて自然に笑みが浮かんできた。

僕は議会を解散し、こんな張り紙を作った。

「五月二十三日にクライドⅡカルヴァートを捕獲してくれる人を急募！ それなりに武器を扱うことができ、自分の身は自分で守れる人がいいな。報酬は成果によって変わるけど、決して安くは無いよ。応募まつてるから、僕に直々に申し出てね。社長より」

張り紙の目的は、言うまでもない。勿論、マーティンに気づいて欲しいって思ったから作つたんだよ。『それなりに武器を扱える』社員なんていないし、みんな一般人だ。だから、武器を扱える人なんて彼しか考えられないんだ。

僕はそれを何枚もコピーして研究員たちに渡して、全フロアの掲示板とエレベーターに貼ってもらった。大丈夫、これならマーティンは嫌でもこの張り紙を目にすることになる。

あとは彼の気持ち次第だね。僕はゆったりとした気持ちで、エレベーターに乗った。何となくだけど、一階に行きたい気分だった。久しぶりに外でも眺めようかと思つたというのも理由の一つだ。

すると、途中でエレベーターが止まった。まだ半分も来てないのに。僕はエレベーターの隅に移動して、誰が乗ってきても大丈夫なようにした。

扉が開く。別に、乗ってくる人になんて興味は無かった。どうせ研究員のうちのどれかだろうし、『会社』の方の用事で来たお客さんかもしれない。そう思っていた。

だけど実際は、エレベーターに乗り込んできたのは不機嫌そうなマーティンだった。一瞬沈黙が訪れる。

どうしようかと迷ったのは、時間にして一秒も無かったと思う。瞬時に脳が出した答えにしたがって、僕はまだ閉まらないエレベーターのドアの間に即座に身を滑り込ませる。

そう、僕は逃げようと判断したんだ。だって、マーティンが怖かったから。また傷つけられたらと思うと、足が勝手に動いていた。マーティンと仲直りしたかったけど、解決を手伝ってくれるほど時は経っていなかった。

僕は走って別のエレベーターに乗って、最上階を目指す。せっかく前向きになっていた気持ちの方がまた落ち込みそうになったから、無理に笑ってみたりした。

折角外に行こうと思ったけれど、もうそんな気も失せた。だから僕は、レントイノーの部屋に直行する。

「ねえレントイノー」

ノックに返事があったから、僕は喋りながら彼の部屋に入った。

すると、そこには笑顔のレントイノーがいた。

それは普通のことだった。だけど、僕は彼に微笑み返せなかった。笑顔のレントイノーの隣に、さっき避けたはずのマーティンがいたから。僕は脳裏に彼の言葉を思い描く。

つきまとうな。

これじゃあ、また付きまとうなって言われちゃう。僕はくるりと背を向けたけれど、レントイノーに声をかけられる。

「私に何か用事があったのではないのですか」

ぎこちない動作で首を捻って顔を彼のほうに向け、作り笑いをしてみる。自分でも、上手く笑えていないと思った。

「ごめん、話したいこと忘れちゃった。おやすみレントイノー」

かなり苦しい言い訳だったと自覚しているけれど、僕はそそくさと彼の部屋を出た。一度逃げたのに、また会っちゃうなんて。

大体マーティンは、どうやってレントイノーの部屋まで行ったんだろう？ テレポートの魔法でも覚えたんだろうか。

今日はつくづく運が悪い日だと思う。もうマーティンの顔なんか

見たくないよ。一生懸命明るく考えようとしている僕だけど、やっぱり限界があった。マーティンの顔を見ると、嫌でも思い出してしまおうから。

つきまとうな。

たった一言のこの言葉で、僕は意外とダメージを受けている。精神的にもっとタフじゃなきゃならないのに。なのに僕、逃げてばかりいる。でも仕方ないじゃないか、マーティンに傷つけられるのが怖いんだから。

第二研究室に向かった。部屋の入り口でカードキーを操作して、指紋認証を行う。ドアが開いたから、自分の部屋に入っただけ息をつく。

今のところ、僕の安息の場所はここだけだ。廊下に出ればいつマーティンにでくわすかわからないし、誰の部屋に行ってもマーティンがいそうな気がして怖い。いつのまにかマーティンは、僕の中で恐れの対象になっていった。全力で逃げたいと思った。初めて友達に對してこんな感情を抱いた。

僕はベッドに向かおうとして、ぴたりと足を止める。見覚えのある、でも今では記憶から消してしまいたいと強く思っている青い髪。安息の場所であると思っていた。けどここも、結局は悪魔の巣窟だった。何で、こんなところにまでいるの？

僕は逃げようとして彼に背を向けたけれど、短い後ろ髪をくいと引かれて立ち止まる。今の、結構痛かった。

「待ちな」

いつもどおりのマーティンの声。だけど僕は、逃げようともがいた。マーティンの手の中でぷつんと音がして、髪が二、三本抜ける。「放して」

そう言ってみるも、マーティンは放す気配すらみせない。背中に感じる彼の気配が怖い。まるで殺人者に背中から銃を突きつけられているような、そんな感じ。

僕はその場にへたりこむ。その拍子に、髪が更に抜かれた。俯く

と目の前がぼやけ、目頭が熱くなってくる。

泣くもんか。そう思っていていくら唇をかみ締めても、堪えきれない嗚咽が唇の隙間から流れ出る。自分の嗚咽を聞いてしまって、完全に制御が外れた。僕はそれでも自分自身に抵抗し、頑張っで涙を堪えようとする。堪えようとするたびに涙は僕を無視し、意地悪く流れ続ける。

「もう付きまとわない、部屋にも行かない、もう傍にいない。だからマーティン、僕から離れて」

それだけというのがやっとだった。

背中に感じるマーティンの気配が一瞬だけたじろいだように思えて、僕はちらりと彼を振り返ろうとした。

けれど、やめた。泣き顔なんか、もう絶対この人にはみせないんだ。

第二十一話 総力戦

一体どこを如何間違ったのか、今度は僕がマーティンを拒絶してしまった。最早これは、マーティンに対する八つ当たりだった。

本当は離れて行って欲しいんじゃない。なのに、無理にそういつてマーティンを突き放した。

「……俺のせいだ。俺のせいで、思いつめさせちまったみたいだな」
ふと柔らかな声が後ろから聞こえ、同時に暖かで優しい手が頭に乗った。もう髪を引っ張ったりしないで、ハビミたいにすっかり穏やかになったマーティンが、後ろから言った。

「ごめんな」

その一言で、僕の心にわだかまっていたどす黒い感情がすうっと解けてなくなっていたような気がした。僕はマーティンを肩越しに振り返る。何か言おうとしても、言葉になってくれなかった。

「八つ当たりして悪かった。だから、そんな哀しいこと言うな」

そんな悲しそうな顔しないで。随分前に聞いた、リーの言葉が脳裏をよぎる。

僕はさっとマーティンを振り返り、彼の不透明な青色をした瞳を覗き込む。彼の目は、すごく悲しそうな光を宿していた。

「マーティン、ごめんねっ」

謝ると、マーティンはほっとしたように笑った。そして、僕の頬を大きな手で包み込んでくる。

「目え腫れてる、男の癖に泣くな」

いつもどおりの、そんな言葉。僕は嬉しくなったけど、やっぱり涙が止まらなくて。自分がとても格好悪く思えた。

服の袖で涙をぬぐいながら、僕はマーティンを見上げた。

「しょうがないじゃんっ、だって僕、本当に」

言いながら、ふたたびこみ上げてくる嗚咽としゃっくりをこらえ

る。

「チッ これだからお前は」

マーティンは舌打ちし、そのくせ少しも不機嫌そうじゃない顔で僕を見下ろした。そして、僕を優しく抱きしめてくれた。

あまりにマーティンらしからぬ行為で、僕は啞然とした。そのまま彼に成されるがままにしていると、ちよつと低めのマーティンの体温を肌で感じることになる。

「いつまでも小せえままの弟みたいで放っておけねえんだ」

言葉の続きを彼の胸でききながら、僕はどうしようもなく満たされた気分になっていた。何だかマーティン、本当のお兄ちゃんみたいで安心できる。僕は彼の服に染み付いている、タバコと硝煙と香水の匂いに目を閉じた。

苛立つとタバコを吸いまくり、時々所構わず発砲するマーティン。香水のにおいがするのは、多分女の人と遊んでいたからだろう。

リィは苛立つても絶対外面に出さない人だった。それに、女性とは全くといって良いほど縁が無い人だった。修行僧並みに清廉で、十五歳になっても彼女がいなかった彼は、間違っても女遊びが激しいといえる人ではない。

基本的に、マーティンとリィは正反対なんだ。なのに、マーティンからリィと同じ空気を感じる時がある。まさしく今が、そんな時。

暫くこうしているうちに気分が落ち着いて、涙はもう流れなくなる。僕がそつとマーティンの胸から離れると、マーティンは実にお兄さんの笑みを浮かべた。僕はマーティンの友達であり、多分弟でもあるんじゃないかな。

「貼り紙見た？」

ふと僕が尋ねてみると、マーティンは深く頷いた。

「誰か候補者はいるか」

彼に尋ねられたけれど、立候補者はいない。だってこれ、もとからマーティンだけを立候補させるためにつくったようなものだから。

マーティンは役立たずなんかじゃない。それを証明したかった。要するに、彼の名誉挽回ってことかな。

僕は笑顔で首を横に振り、マーティンを見上げる。

「いないよ、マーティン行ってくれるの？」

そう訊ねてみれば、マーティンはいつもどおり皮肉な笑みを口許に浮かべる。そしてこういった。

「ああ。こんどこそ、クライドⅡカルヴァートを捕まえる」

彼の自信に満ちた発言を聞いて僕も安心して、その日は眠る前に悪夢の恐怖に怯えなかった。寝るたびに悪夢を見ることを、僕は忘れかけていたんだ。

だけど、やっぱりその日も悪夢を見た。いつになったらリイが目の前で死んでゆく夢を見なくてすむようになる？

傷を押さえる彼の手に絡みついた赤が痛い。生きたいよって顔で笑んでる、その心を押し量るのが辛い。そして何より、リイが死んでしまったその時の苦しみは、きっと想像もできないぐらい大きなものののだ。

リイを生き返らせてあげたい。だってこのままじゃ、あまりにもリイが可哀想だから。無念だったろうね、十五歳で時を止められてしまうなんて。

僕を護るために犠牲になってくれた彼を、僕はこの手で生き返らせたい。というか、僕がやらなきゃだめなんだ。いままで十分護られた。だからこれからは、僕がリイを護っていきたい。

僕は悪夢にうなされつつ、五月の終りを待った。五月二十三日につくようにマーティンが出て行ったから、帰って来るのはちやうど五月の終りになると思うんだ。僕は辛抱強く待った。

悪夢にうなされ、起きるたびリイに謝って、重い気持ちのまま朝を迎える。そんな生活も、もう僕のリズムとして定着してしまった。

「ミンイエ、マーティンが帰ってきた！」

ノーチェの元気の良い声で、僕は銃弾のように部屋から飛び出して真っ直ぐマーティンのところへ向かった。

ところが僕は、戻ってきたマーティンを見て愕然とした。よれた服。乱れた髪。そして、切り裂かれた肩と腹。血で汚れた傷跡や服それから髪。マーティンはボロボロだった。だけど、いつも通りシニカルに笑っていた。

「クライドⅡカルヴァートとその仲間の容姿を掏ってきた。だが、イノセントⅡエクルストンを見つけちゃってそっちを追うことを優先的に考えちゃった」

彼はそう言って、疲れたように笑う。

イノセントⅡエクルストンといったら、マーティンが追っている古くからの仇だね。だったら、そっちを追ってしまっても無理は無いと思う。

それにマーティンもクライドも、そしてイノセントもアンシェントタウンの出身なのだから、きっとイノセントを追うことでクライドについて何らかの情報を得られると思う。なにか、つながりがあるっていいと思うんだ。

「イノセントⅡエクルストンもクライドⅡカルヴァートを追っていた、チッ。帝王もクライドⅡカルヴァートを欲しがってるらしい」
うわ、帝王ついに行動に出たんだね。僕が手下にならないからって、クライドを手下にしようって魂胆？

じゃあ、クライドのことを混血児だって知ってるんだ、帝王。負けてられないね。

「クライドⅡカルヴァートの連れに視力を操る魔道士がいた。トニールとか呼ばれてる奴だ。年齢は十二、三歳」

マーティンの情報は、物凄だと思う。にわか信じがたいことばかりだった。完全に度肝を抜かれた。まさかクライドを追うことで帝王のことやイノセントの宿敵が浮かんできるとは思わなかった。

何だかクロスワード・パズルみたい。紙に並んだ『クライドⅡカルヴァート』の文字列に交差するように帝王ができて、帝王の文字列にイノセントⅡエクルストンの文字列が絡む。

そしてこれから、おそらくもっともっていろんなワードが出てく

る。

そのなかに僕の名が交じる日、それがクライドを捕らえる日。楽しみだなあ？　僕、クロスワード大好きなんだ。

「ねえ、早速クライドになってみせてよ！」

僕が嬉々としてそう言うのと、マーティンの身長がちょっとだけ縮んで長かった髪が短くなったのとどっちが早かっただろう。

僕の目の前には、写真でしかみたことがなかったクライドⅡカルヴァートが立っていた。ただし、目の色と声だけはマーティンのままだったけど。

「混血児は血液に物凄い魔力が宿るんだ」

クライドの顔をしたマーティンが、いつもの声と表情でそういう。あの明るい笑顔のクライドも、こんなに嫌味ったらしい笑みを浮かべることができるんだ。僕は頷いて、クライドの姿のままのマーティンを連れて実験室に向かう。

どこからか優しい歌声が聞こえる。そういえば、研究員の中に歌が好きな女の人がいたんだ。彼女の歌をBGMにして、僕らは希望の扉を目指す。

もしかしたら、これでリイが生き返ってくれるかもしれないんだ。だから、実験室の扉は希望の扉。

僕もマーティンも、無言で歩いた。僕はリイのことを考えていた。多分、マーティンも考え事をしていたんだろう。マーティンが何を考えているのか僕には解らなかったけれど、口許に終始皮肉な笑みを浮かべていたってことは女の人のことでも考えてたんじゃないかと思う。

マーティンが今まで一緒にいた女の人は全員遊びで付き合っていたつもりらしいけど、女の人の中には本気でマーティンのことを好きになってしまう人もいるらしい。仕方ないよね、マーティンと一緒にいて凄く安心できるし。

だけどマーティンは、絶対本気で女の人を好きになったりしないんだ。マーティンの気持ちも解るよ、だってマーティンは束縛を嫌

う人だから。一人の女の人のところにずっといるなんて無理なんじゃないかな。だからマーティンと付き合う人は、遊びのつもりだっ
てことを覚悟しなきゃならないね。

女を抱いてる時くらいはイノセントⅡエクルストンのことを考え
ずにすむ。前にマーティンが言っていたことが脳裏にちらりと浮か
ぶ。

マーティンにとって女の人は、都合の良い逃げ口なんだなって、
それを聞いたとき思った。色々苦しんでるんだ、マーティンも。

彼は気楽そうに見えて、いつも影を背負っているような雰囲気がある。女の人と遊ぶ時だって純粹に楽しんでる様子じゃないし。彼
が本当に楽しそうに笑ってくれたのは、今から何年前のことになる
んだろう。

リイを生き返らせたなら、マーティンがイノセントを捕らえるため
の手伝いをしてあげよう。僕の目的の為に一生懸命頑張ってくれた
彼だから、僕も彼の目的の為に頑張ろうとおもう。

「なあミンイェン」

マーティンについて色々考えていたら、隣を歩いていた本人が僕
に声をかけてくる。僕はその声に本人の顔を見上げ、首をかしげる。
白い肌に滑らかな色をした金髪。端正な顔立ちだけど、口許にた
えず嫌味な笑みを浮かべているマーティン。

「どうしたの、マーティン」

そう答えてみれば、マーティンはふと無表情になった。何を聞か
れるのかと身構えると、彼は不意に満面の笑みを浮かべた。こんな
に楽しそうなマーティンを見たのは、何年ぶりだろう。

僕が驚いていると、彼は出し抜けにこんなバクダン発言をした。

「まだ童貞か？」

……前言撤回。絶対マーティンなんて助けてやらない。

マーティンはやっぱり能天気で、脳みその三十パーセントが「い
かにして人をからかうのか」ということを考えるためだけにあるよ
うな人間だ。

僕は多分、このとき頬を赤くしていたんじゃないかとおもう。鏡を見なくても、マーティンの反応でそれが容易に解った。

「解りやすい奴だねえ？　とっとと女つかまえな。十八にもなってまだ童て」

即座に切り返す。彼がその言葉を言いきる前に。

「馬鹿マーティン！　僕は君と違って遊び人じゃないんだ！」

僕の反応のどこが面白かったのか、マーティンは腹を抱えて笑い出す。馬鹿馬鹿しいくらいに笑いまくっているマーティンに、すれ違う研究員たちが訝しげな視線を送っている。

確かにマーティンは兄貴分だよ。間違いないね。だけど、リイはこんな破廉恥なこと絶対にいわなかった。だから僕はマーティンに教えられるまで、こういう言葉なんて聞いたことすらなかった。

兄弟ってこういうのが普通なの？　違うよね？　というか、違うって言って欲しい。

むすっとした僕の隣で、マーティンはいつまでも笑っていた。実験室についても笑っていたけど、ここにきてようやく彼は笑いをおさえることに思い至ったみたいだ。

僕はずっと機嫌が悪かったけれど、実験に使う芸術品を物色していたらいつのまにか気分がとても軽くなっていた。

リイにあえる。話ができる。そんな日がもう目の前に迫ってる。

「クライドⅡカルヴァートの仲間は三人」

マーティンがそういい、僕は物色を中断して彼を振り返った。彼の話によると、そのうちの一番弱そうに見える少年が魔道士らしい。二番目に弱そうな少年を操ってみたが、大昔の魔道士の亡霊に邪魔をされたと彼は言う。

全く話がつかめない。大昔の魔道士の亡霊？　でも、マーティンがそういうからには本当のことなんだろう。

僕は早急に被験体をどれにするか決めて、『クライドⅡカルヴァートの血』の模造品をマーティンに提供してもらった。それを使って実験してみる。

前にやったのと同じように、ウサギをいれられる大きさの円筒形の水槽に魔力伝達用チューブをつなぐ。被験体は小さな猫。栗色の毛並みに青い目をした、可愛い猫だ。

僕はマーティンに水晶の詰まったコードを渡し、魔力を送ってもらうことにした。待つこと数分。水槽に少しずつ変化が現れた。猫の水槽の中に気泡ができてくる。しかし、その先は何も起こらなかった。

僕はマーティンを振り返る。マーティンは僕を見て、それから元の姿に戻った。どういうことだろう。やっぱり、模造じゃどうにもならないってことなのかな。

そっか、まだリイは生き返らないんだ。でも、手の届く位置に混血児がいるよ。それを捕まえてくればいいんじゃないか。

落ち込んだんだ、落ち込むな。マーティンは頑張ってくれた。だから、僕も頑張って辛抱しなきゃ。

「悪いな」

彼は言う。

「気にしないで。頑張ってくれてありがとう、休んで良いよ」

僕は笑みを浮かべ、指を鳴らす。そして、実験の後片付けを全て部下に任せた。

クライドの追跡を始めてもいいかもしれない。だけど情報によると、彼らは漁船で孤島を目指してるという。この会社は、海上を追跡する技術なんて持ち合わせていないんだ。海軍を持ってるわけじゃないし、船の操縦ができる社員なんていないし。

彼らが海に逃げたら、待ち伏せしかないね。だったら、孤島に行くまでの島に人を配置すればいい。そうして、罠をしかける。まさしく蜘蛛のように、待ち伏せて捕らえて混血児たちを貪り食う。

いや、実際に食べはしないよ。でも結果的に、血を使い果たしてもらうことになるから。この網に、早くクライドがかかってくれればいいのにな。

獰猛な蜘蛛は腹ペコで、毒針をかくしつつ君にしのびよっている

んだよ。ぜったい気づかないでね。まあ、気づくはずも無いけれど。僕は部屋に戻り、地図を広げる。大きく広がるナルディーニ洋を突っ切って、あの孤島へ向かうと予想されるクライドの軌道。

それをみて、僕は唐突にはっと思いつく。ハビの喫茶店やレンテイーノの実家があるアルカンザル・シエロ島が、絶好のポジションじゃないか。漁船の燃料なんて長持ちするはずが無い。補給する場所が必ず必要になるはずだ。

僕は即座に会議室に行き、皆を呼び出した。マーティンは医務室で治療を受けさせて、残りのメンバーに話しかける。

「アルカンザル・シエロ島に行ってくれる？　そこにクライドたちがくるはずなんだ」

そういうと、真っ先にノーチェがこう言った。

「私、ちようどそこで撮影があるの。女優として初めての映画なんだ」

本当に嬉しそうに彼女は言う。彼女の隣でセルジが笑っているけれど、無理しているように見える。隣で成功者が満面の笑みを浮かべているのに、自分はまだ夢を叶えることができていない。それをとて歯がゆく思っている表情にみえた。

ノーチェの映画の監督は、帝王の手下らしい。イノセントⅡエクルストンとその仲間が何度か監督を呼び出して話をしていたことがあったから、ノーチェはそれに気づいたんだとか。

帝王の一味は、僕がクライドⅡカルヴァートを捕獲しようとするということを予測していたらしい。だからそのまえに捕まえてしまえって言う魂胆なんだ。

くう、汚いぞ帝王。やっぱりあいつは自由の権化で、究極の自己中心的男だ。

僕のもつ力じゃあ決して消すことも潰すこともできないだろうけど、僕はあいつをいつか解体してやりたいとひそかに思っている。だって、僕の邪魔ばかりするじゃないか。性格悪いよね、帝王って。利己的すぎ。まあ、僕だって人のこと言えないのは解ってるけど。

「あの島が孤島に一番近い島国だよ。帝王の住処に向かうんだっ
ら、裂けて通れないところでしょ？」

気を取り直して僕がそういうと、皆うなずいてくれた。だから僕
は、早速皆を送り出した。

ノーチェはすぐに発っていった。明日の朝にも、船でその島へ向
かうといっていた。それまでは生活用品などを買い足したりしにい
くらしい。

彼女のあとを、セルジも追っていった。セルジは旅行鞆に美容師
について書かれた本やハサミのセット、それから髪を切る時に服を
汚さないようにするためのカッティング・クロスをつめてすぐに玄
関に向かっていく。

ノーチェとセルジの二人を玄関まで見送ると、ハビとレンティ
ーノも一階まで降りてきていた。いつもどおりしつかりしたスーツ
みたいな格好のレンティーノが笑顔で手を振って、屋敷の電話番号を
メモした紙を手渡してくれる。細いペンで書かれた、女の人を書い
たみたいに繊細な文字。まさしくレンティーノの字って感じだった。
自然に笑みが浮かぶ。

僕はそれをしっかりと白衣の胸ポケットに仕舞うと、レンティ
ーノに手を振り返した。薔薇の似合う優雅な彼は、軽やかな足取りで
街へでてゆく。歩いている姿さえ美しいと思わせてくれるから、レ
ンティーノは凄い。

レンティーノを見送ると、ハビもお店の電話番号を教えてくれた。
僕が手帳にそれをメモすると、ハビも行ってしまう。ハビには僕
のように垢抜けない印象はない。なおかつ、統括者としての威厳を十
分に持つてる。歩き方も、きびきびとしていた。

僕は皆が見えなくなるまで見送った。あとはマーティンだけ。マ
ーティンには、怪我が良くなってから行ってもらおう。

さあ、これから僕の総力戦が始まるよ。クライド、絶対にアルカ
ンザル・シエロ島に向かってね？

皆をアルカンザル・シエル島へ送り出してから暫くたった。その

間に僕は新製品を開発したり、リイに語りかけたりと、いつもと何も変わりのない日々を過ごしていた。

レンティーノからは毎日のように電話が来た。意外と寂しがりやなレンティーノは、島についてから初めてかけてきた電話で、広大なお屋敷にたった一人で住むことにちょっと抵抗を感じているといった。

でもレンティーノはとても適応力のある人だから、そんな環境にも慣れてきているようだ。最近の電話では、庭の花が綺麗だとか倉の中にあった古書が面白かったとかそんなレンティーノらしすぎることしか言わないから。彼はこれまでの電話では、切る前に必ず「早く帰ってミンイェンと直接話したいです」なんていってたんだよ。

ハビからは時々電話でお店の様子を聞かせてもらった。セルジはハビの喫茶店からちょっと離れたところにある書店でバイトして、ちよつとでも多くのお金を稼ごうと頑張っているという。何て前向きな人なんだろう、僕だったら絶対遊んじゃうのに。

ノーチェはというと、映画のヒロイン役として頑張ってる。帝王の手下である監督のもとで、彼女自身がいちばんやりたかったことを全力で頑張ってるんだ。

僕はリイの為に日々頑張ってるつもり。いつもと何も変わりなくとも、いつもリイの為に生きているから。

第二十二話 幻影

その日の夜、僕は新しい薬品の成分を書いたリストをパソコンで編集していた。電話がかかってきたから、パソコンをやりながら出る。

「もしもし？」

番号は確かめなかった。だから誰がかけてきたのか解らなかった。けれど、僕が電話に出ると同時に、レンティーノの声がした。

「クライドと接触できましたよ。私に好感を持ってくださったようです」

それをきいて僕は、思わず握り拳を天井に突き上げて叫んでいた。リイに近づけた。リイに手が届く。

夏になったら二人で天体観測ができる。秋になったら十五夜の月をみられる。冬になったら雪の降る野原で雪合戦でもしよう。そして春になったら、花でも見ながらリイが再びこの世に舞い戻ったことを喜び合おう。

「やったっ！」

本当に嬉しかった。心の底から嬉しかった。だけど、事態がそう簡単にはこぼわけがなかった。

僕が狂喜のあまり叫び散らしていると、彼が一言で僕を制する。

「ですが聞いてください、とんでもないことが起こっています」

冷静な彼の声に、僕はぴたりと動きを止める。なに、とんでもないことって。

僕が呆けた声を上げると、レンティーノはこういった。

「ハビが帝王側のお嬢さんに暴行を加えて半殺しにしまったのです。その光景を間近でみてしまったクライドは、ハビに殴りかかりました」

「えっ」

「大変なことになりましたよ、クライドはハビのことを敵だと断言

しましたから」

うわ、まって。状況が飲み込めない、どうしたの？ 何が起きたの？

そんな、ハビのことを敵だなんて。敵、なんでまた。待って、その前に帝王側のお嬢さんって何のこと？

僕が混乱していると、またしても冷静な声でレンティーノが言った。

「ハビの二つの人格のうち、破壊的な方が現れてしまったのです。よりにもよって、クライドの目の前で」

その後、繰り返しレンティーノの話をきいてこんなことが解った。ハビの店にいる従業員の中に帝王の手下がいて、その子がクライドをさらおうとした。そして、ハビに「死んで」と口走った。

その途端にハビの第二人格のスイッチが入ってしまい、ハビは女の子と一対一で殺し合いになる。ハビは女の子の頭をワインボトルで殴打し、骨が折れるくらいの強さで蹴り飛ばした。

残忍な性格に変貌したハビは、女の子を甚振るのを楽しんでいた。それがクライドを怒らせる理由になってしまった。

クライドがハビを蹴り、床に倒したところでマーティンが来た。今まで連絡をよこしてくれなかったマーティンだけど、ちゃんとハビの援護に入ってくれたようだ。

クライドはマーティンを本当に嫌っているようで、彼に対しては態度が悪く、睨んだり怒鳴ったりするという。

きわめつけに、帝王軍の到着。イノセントⅡエクルストンと仲間が現れて、イノセントの仲間の一人が女の子を病院に連れて行った。そして、イノセントがクライドを人質にして店からずらかうとしたところ、クライドが彼から逃げ出した。ハビやマーティンは追おうとしたけれど、イノセントの仲間に阻まれて戦場となっていた店の中から出られなかった。

レンティーノがこのことを知ったのは、店の防犯カメラを見たからだだった。

なお、この映像を見たハビは自分が二重人格者であるということ
を今更確信したという。マーティンは帝王軍との乱闘で大怪我を負
い、ハビに担いでもらってレンティーノの家に運び込まれた。

レンティーノはその後一人で店に行き、防犯カメラを取って来て
映像をみたのだとか。セルジとノーチェとは、今夜会っていないら
しい。二人は無事で、クライドやクライドの仲間に好かれていると
いう。

まさかこんなことになるなんて思ってなかった。レンティーノに
頼んで、件の防犯カメラをここまで持ってきてもらうことにする。
百聞一見に如かず、聞くより見る方が早い。詳しいことは、彼ら
がここに戻ってから話してもらおう。

レンティーノとセルジ、ノーチェの三人は乱闘に加わっていなか
ったからよかったものの、ハビとマーティンは本当に酷い有様らし
い。

聞いていて胸が痛んだ。どうしてそんなことになっちゃうんだろ
う。僕は、すぐに戻ってくるようにレンティーノに告げた。

彼らは翌日の昼に、全員揃って帰還した。ハビとマーティンは確
かに酷い有様で、全身が包帯とガーゼだらけになっていた。

マーティンはともかく、ハビがこんなに傷だらけになっていると
ころなんかみたことがない。僕は身震いして、ハビとマーティンを
交互に見た。

「クライドⅡカルヴァートをとりにながしちまった」

ポケットからタバコを取り出しながら、マーティンは言う。そん
なマーティンの手をハビがおさえて、タバコを吸わないように忠告
している。

まったくいつもどおりのハビだった。傷だらけだということを除
けば、いつもと全く変わらないハビだった。

「気にしないでマーティン、皆も」

僕は平静を装って笑顔でいたけれど、本当はとても苛立っていた。
なんで二人はこんなに傷だらけなんだろう。帝王軍が本当に憎たら

しい。即刻潰すべきだと思う。

「生きて帰ってきてくれてありがとう」

僕はそう呟いて、部屋に戻った。

帝王軍やクライドのこと、そしてリイのこと。全てが頭をごちゃごちゃにさせ、僕を苛立たせた。

リイを生き返らせたかった、ただそれだけだったのに。なんでこんな事になってるんだろう？ 少なくとも帝王は関係ない。引っ込んでいて欲しい。クライドもクライドだ、早く捕まってよ。

「ミンイェン、お昼食べないの？」

廊下からハビの声が聞こえた。だけど僕は布団に包まって、外界の全てを遮断した。そしていつのまにか眠りに落ちる。

僕はまた、夢を見た。なんと悪夢がグレードアップしていた。嬉しくもなんとも無い。あの酒屋で血の海に沈むリイを見た僕は、一生懸命リイを起こそうとする。だけど無理で、半分泣きながらリイを背負う。

するとハビとマーティンが現れて、彼らもまた父親に刺し殺されるんだ。リイはともかく、ハビは大きすぎて背負えない。なおかつ三人一緒なんて絶対無理。何もできない僕は、情けないことに途方にくれて泣き叫ぶ。その間にも三人の身体はどんどん冷たくなり、僕は恐怖で狂いそうになる。

目を覚ましたとたんに、周りを見回した。三人の死体は転がっていなかったけれど、代わりに生きたレンティーノがいた。

「大分うなされていましたよ」

静かにそう言って、レンティーノは僕の枕元に小さなテーブルをおき、そのうえでリングをむいている。僕の好物がリングだってことは、レンティーノも知っていると思う。

レンティーノは細い指でリングを持って、小さな銀色のナイフでその皮を丁寧にむいていた。リングの皮はちゃんと一本につながっていて、なおかつその皮の幅はどれだけ剥き続けていても均一だ。これって職人芸？

「ねえレンティーノ、」

今何時？ そう訊ねようとしたとたん、レンティーノが僕の質問をさえぎってこう言った。

「夜の九時ですよ」

まるで超能力者だよ、レンティーノ。僕はしばらく呆然としていたけれど、やがて悪夢を思い出してきつく目を閉じてしまう。

「怖いのですか？」

こくりと頷くと、レンティーノはリングとナイフをテーブルの上の皿に置いた。そして、僕を見てにこりと微笑む。十歳でここにきてから今まで、いつだって傍にあったこの笑顔。

僕は寝たままの姿勢でレンティーノに手を伸ばした。彼はその手をぎゅっと握ってくれる。

暖かく、華奢で綺麗な手。いつだって僕の傍にあったこの手。細くて繊細で壊れそうなこの手は、実はとても強い。だから、悪夢でさえ追い返してくれる。

「貴方は大丈夫ですよ。私がいいます。皆が傍にいます。誰も勝手にいなくなったりしません」

心に染み入ってくるようなその声は、いつだって僕を導いてくれた。幼い頃からずっと。いまでも変わらずに。

ずっと当たり前のようにそばにあった、とても大切でなくてはならないもの。

「ありがとうございます」

心から感謝を込めてそういえば、レンティーノは僕の手をそっと離してまたリングの皮をむき始める。途中からむき始めたのに、むかれて平紐みたいになったリングの皮の太さは変わっていない。

やがてレンティーノはリングをむき終わって、皿の上で食べやすい大きさにきってくれる。

「どうぞ」

差し出されたお皿に乗ったリングを、僕は夢中で食べた。すっきりとした味、しゃりしゃりした感触。

リングはよく冷えていて、とてもおいしかった。空腹だったから、異常に美味しく感じていたのかもしれない。

「ミンイェン、少しの間全てのことを忘れてみたらどうですか？」
彼にそういわれる。

貴方は色々溜めすぎているのです。貴方は無理をしすぎている。このまま無理し続けたら、貴方はいずれ壊れてしまう。レンティーノはそういった。

だけど、本当に壊れそうなのは僕の方じゃなくて皆だよ。想いをそのまま声に出してみたら、レンティーノは軽く笑う。

「だからこそ、貴方に休んで欲しいのですよ」

レンティーノは綺麗に笑う。その笑顔を見ると僕は、それもそんなのかもしれないと思ってしまう。

昔からそう。彼には妙な説得力があるんだ。

「ごめんね」

いつもこきつかってごめんね。危険な目にあわせてごめん。こんなこと、最初から全て僕がしていればよかったんだ。

ハビやマーティンを傷つけてしまったのは、紛れもなく僕自身だ。そして僕は、友達皆を危険にさらした。

「貴方が謝ることはなにもありませんよ。ですから、安心して休んで下さい」

危険にさらされても、レンティーノはこんな風に笑う。どうしてだろう。

「私の言うことを信じられませんか」

そんな風に悲しげにいわれてしまったら、僕は何も言い返せなくなる。黙って従うことにした。全てを忘れて気楽に暮らすなんて無理だけど、少なくともクライドのことだけは考えないようにしようと思う。

クライドのことを考えずに暮らし始めてから二ヶ月あまりが過ぎた頃、僕は奇妙な新入社員を洗脳した。海賊なんだって。訳解らないよね、何で海賊が製薬会社に入社するの？

それから三カ月後に、今度は山賊が入社した。体中傷だらけで、近寄ったら噛み付いてきそうなその人は、何故か僕の会社で裏の顔があることを知っていた。

それで、クライドⅡカルヴァートの仲間でありイノセントⅡエクレストンの弟のグレンを追うためにここにきたといった。彼は知識も教養も無くて、獣みたいに凶暴な奴だった。だけど、その根性は結構気に入ったから入社させてあげた。

決して「彼に逆らったら殺されそうだから」なんて理由で入社させた訳じゃないよ。

僕はのんびりと過ごしていた。本当は早くリイにあいたくて仕方なかったけど、無理に休んでいた。すると、ちよつとずつ状況が変わり始めた。

丁度冬の休暇が来る頃になって、僕の会社でも一週間ほど社員全員に休暇を出した。その時に、情報が舞い込んできたんだ。クライドたちが漁師町にいるという情報が。

すぐ捕まえてしまおうと僕は思った。だけどマーティンが、いつものようににやりと笑って言ったんだ。

「イノセントⅡエクレストンに盗聴器をしかけた。まあ聞きな手渡されたカセットテープを再生してみると、クライドはイノセントにこんなことを話していた。」

「イノセント、喫茶店覚えてるか？　そうそう、戦場になっちゃったあの店。じゃあ、店長さん覚えてる？　あの、背が高くて優しい奴な」

「うん、あんな人だと思ってなかったけど」

「俺、あの人を助けなきゃならないんだ。レイチエルにそう頼まれた。俺もハビさんをあのまま放っておくわけに行かないと思うし」

「俺、ハビさんに言わなきゃならないことがいっぱいある。あの年から貰った手紙、読み返すたびに苦しくなるんだ。だから、夏休みにはハビさんを探しに行こうと思う。人工魔力の研究機関がどこにあるか知ってるか？」

対するイノセントの受け答えはとても簡潔だった。否定と肯定を示す言葉しか言っていなかったような気がする。

問題はクライドの発言だね。彼が良心的で正義感が強い人で本当によかったよ。もしもクライドがマーティンみたいな性格だったら、逆にハビを殺しに行くんじゃないかと僕は思う。

よかったね、これでクライドは自分からこっちに向かってきてくれる。僕の手間が省けたよ。それに、誰も傷つけずにクライドを捕らえられる。皆ありがとうね。もう少しで、全てが終わるんだ。全てが終わってリイが生き返ったら、きっと皆もリイのこと気に入ってくれるはずだよ。

僕はその日中庭に出て、ひとりで夜の空気を浴びていた。僕、クライド、カルヴァートが本当に欲しい。絶対手に入りたい。

早くリイをこの世に呼び戻してあげたいんだ。待っててね、リイ。ごめんね、こんなに待たせてしまっ

でも、今度こそ本当にもう少しだよ。僕はあの子を手に入れる。そしてあの子の全ての魔力を貰うんだ。

リイ、僕は必ずきみを生き返らせるよ。きっと成功する。これでまた同じ月を見られるよ。父親に虐待される毎日なんてもうない。だからリイ、二人で新しい時を刻んでいこう？ 止まってしまった時を、二人で一緒に動かしていこうよ。

クライドは、自分からこっちに向かってきているんだ。ハビを追って。ハビを更生させようという魂胆で。

くもの巣に気づかずに草むらを飛び回る蝶のように。極上のおもてなしをしなくちゃ。羽から触覚まで、余すことなく全てを食い尽くしてあげる。

さあ、クライド。はやくおいで。全てが終わったら、君も僕のコレクションにいられてあげるから。君なら素敵な芸術品になるんじゃないかな。

ね、だから僕を退屈にさせないでよ。楽しませて？ 君の全ての魔力で。そしてリィを生き返らせることに貢献してよ。悪いようにはしないから。

ふと見上げた空には満月がでていた。リィが大好きだった、淡く穏やかで優しい月の光。

悪夢に魘^{うな}される日々も、きつともう少しで終わるよね。

終

第二十二話 幻影（後書き）

『魔幻の鐘』悪役キャラ、ミンイエンの物語でした。お読みくださってありがとうございます。初出は2006年7月ですが、改稿しつつ、ここ『小説家になろう』にて再掲載してみました。

この物語は、そのまま魔幻の鐘二章に繋がるようになってはいます。解りにくいところもありますが。

ミンイェンは我尽ですが、実はどこまでも他人主義者です。自己中に見えるけれど、実はいつだって友達やリイのために一生懸命なので。そんな彼は、今でもリイの幻影を追い求めて日々暮らしています。

魔幻が完結する時に、この『幻影』にも本当の意味での終りがきます。この物語の結末は、作者もまだ解りません。

一ついえるのは、クライドもミンイェンも本当の意味での『悪役』ではないということでしょうか。

顔貌がそれぞれ違うように、価値観もひとそれぞれです。ですからクライドとミンイェンでは、正義のあり方も、友情のあり方も、善悪のあり方も異なるんです。

幻影をお読みくださった方は、是非ミンイェンサイドの視点で魔幻を思い返してみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6498b/>

幻影

2010年10月8日14時29分発行